

さぬき市埋蔵文化財調査報告 第7集

さぬき市内遺跡発掘調査報告書

平成20年度国庫補助事業報告書

岩崎山古墳群
龍王山古墳

2009. 3

さぬき市教育委員会

さぬき市内遺跡発掘調査報告書

平成20年度国庫補助事業報告書

岩崎山古墳群
龍王山古墳

2009. 3

さぬき市教育委員会

序

平成16年度から津田湾沿岸に所在する古墳群の様相を明らかにするために発掘調査を実施しております。今年度の調査は岩崎山1号墳、龍王山古墳を中心に調査を実施いたしました。

岩崎山1号墳は、昭和2年に発見され、畿内を除いた西日本では珍しい滑石製模造品が出土しています。今回の調査では直径18~19mの小型の円墳であることが判明し、前方後円墳でない小さな古墳に畿内で多く出土する滑石製模造品が副葬されている点が注目されます。今回の調査によって、岩崎山古墳群には様々な大きさの古墳があることが判明しました。昨年度の岩崎山4号墳の調査を含めて、岩崎山古墳群の特徴が少なからず判明してきたといえます。

龍王山古墳は、昭和51年に香川県教育委員会による調査が行われていますが、今回の調査は史跡指定を目指すための範囲確認を主目的に行っています。調査を開始するにあたり草木で墳丘が覆われていましたが、伐採し墳丘測量調査を実施しました。詳細な内容につきましては来年度以降の調査で明らかにしていきたいと思っております。

最後になりましたが、調査にあたりましてご理解とご指導をいただきました地元の皆様ならびに関係各位、また、調査にご協力とご援助をいただきました方々に厚くお礼を申し上げます。

平成21年3月

さぬき市教育委員会

教育長 豊田 賢明

例 言

1. 本書は、さぬき市教育委員会が平成20年度国庫補助事業として実施した発掘調査報告書である。
2. 今回の発掘調査はさぬき市津田町津田に所在する岩崎山1号墳、2号墳、6号墳と墳丘測量調査はさぬき市津田町津田2695-2に所在する龍王山古墳である。
3. 調査の実施はさぬき市教育委員会が調査主体となり、大川広域行政組合理蔵文化財が補助を行った。
4. 本書の編集作成は大川広域行政組合理蔵文化財係松田朝由が行なった。また、遺物整理を松村春美、遺物実測を松田朝由、多田歩、トレースを多田歩が行った。
6. 報告で用いる北は国土座標第Ⅳ系の北である。縮尺は掲載図面内に掲載している。
7. 遺物観察表及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』を使用している。
8. 報告書で使用した写真の一部(図版1-1)は、鎌田共済会郷土博物館の所蔵品である。
9. 本事業及び本書の作成にあたっては、地権者をはじめ次の方々より多大なご指導・ご援助を得た。記して謝意を表します。(敬称略・五十音順)

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課、香川県立ミュージアム、鎌田共済会郷土博物館、さぬき市シルバー人材センター、内田和伸、大久保徹也、大朝利和、鎌田敬子、丹羽佑一、古瀬清秀、松本和彦、六車功、六車恵一、六車ふみ子、六車美穂、森格也、吉田和彦、米田武子、渡部明夫

本文目次

序文

例言

岩崎山古墳群

岩崎山1号墳

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 岩崎山1号墳に関する過去の記載	2
第3章 調査の成果	4
第1節 墳丘測量	4
第2節 トレンチの設定	5
第3節 各トレンチの状況	5
(1) トレンチ1 (1号墳の範囲)	5
(2) トレンチ2	7
第4節 出土遺物	9
(1) 出土状況	9
(2) 遺物について	9

岩崎山6号墳

第1章 調査の経過	10
第2章 調査の成果	10
(1) トレンチ1 (6号墳の範囲)	10
(2) トレンチ3	10

岩崎山2号墳

第1章 岩崎山2号墳の過去の記載	13
第2章 調査に至る経緯と経過	15
第3章 調査の成果	15
第1節 墳丘測量	15
第2節 トレンチ調査の成果	16
第3節 出土遺物	18

岩崎山4号墳遺物調査

第1章 調査の概要について	18
第2章 調査の成果	19
第1節 銅鏡 (斜縁二神四獣鏡 M1)	19
第2節 銅鏃 (篋被付柳葉式)	19
第3節 埴輪	22
第4節 土器	28

岩崎山五号墳遺物調査

第1章 調査の概要について	28
第2章 調査の成果	28
第1節 銅鏡（内行花文鏡）	28
第2節 鉄刀子	31
第3節 勾玉、管玉、ガラス玉	31

岩崎山火葬墓

第1章 掲載の概要について	32
第2章 調査の経緯	32
第3章 岩崎山火葬墓の概要	32

まとめ

第1章 岩崎山1号墳	33
第1節 墳丘について	33
第2節 埴輪について	35
第2章 岩崎山6号墳	38
第1節 墳丘について	38
第2節 埋葬施設について	38
第3章 岩崎山2号墳	40
第1節 墳丘について	40
第4章 岩崎山4号墳	41
第1節 線刻絵画埴輪について	41
第5章 岩崎山5号墳	44
第1節 ガラス玉について	44
第6章 岩崎山火葬墓	44
第1節 岩崎山火葬墓について	44
第7章 岩崎山古墳群について	44

龍王山古墳

第1章 調査に至る経緯と経過	52
第1節 調査に至る経緯	52
第2節 調査の経過	52
第2章 龍王山古墳に関する過去の記載	53
第3章 調査の成果	54
第4章 まとめ	58

挿図目次

岩崎山古墳群

岩崎山1号墳

第1図	遺跡位置図	1
第2図	1号墳人骨、遺物出土状況図（1/20 昭和5年報告書から転載）	3
第3図	1号墳墳丘測量図（1/300）	4
第4図	トレンチ配置図（1/600）	5
第5図	トレンチ1, 2平面図及び断面図（1/100）	6
第6図	1号墳墳丘裾付近平面図及び断面図（1/60）	8
第7図	1号墳出土遺物（1/4）	9

岩崎山6号墳

第8図	6号墳平面図及び断面（1/100、1/40）	12
-----	------------------------	----

岩崎山2号墳

第9図	2号墳墳丘測量図（1/200）	14
第10図	トレンチ配置図（1/400）	16
第11図	2号墳平面図及び断面図（1/100）出土遺物（1/4）	17
第12図	4号墳出土鏡（4/5 さぬき市郷土館蔵）	20
第13図	4号墳出土鏡拓影図（1/1）	21
第14図	4号墳出土銅鏃（1/2 さぬき市郷土館蔵）	22
第15図	4号墳出土埴輪（1）（1/4 さぬき市郷土館蔵）	24
第16図	4号墳出土埴輪（2）（1/4 さぬき市郷土館蔵）	25
第17図	4号墳出土埴輪（3）（1/4 鎌田共済会郷土博物館蔵）	26
第18図	4号墳出土埴輪（4）（1/4 鎌田共済会郷土博物館蔵）	27
第19図	伝4号墳出土土器（1/2 さぬき市郷土館蔵）	28

岩崎山5号墳

第20図	5号墳出土鏡（1/1 さぬき市郷土館蔵）	29
第21図	5号墳出土鉄刀子、勾玉、管玉、ガラス玉（1/1 さぬき市郷土館蔵）	30

岩崎山火葬墓

第22図	岩崎山火葬墓出土遺物及び出土状況図（1/4、1/20）	32
------	-----------------------------	----

まとめ

第23図	1号墳、6号墳復元図（1/30）	34
第24図	円筒埴輪突帯の比較（1/1）	36
第25図	2号墳墳丘と石材散布状況図（1/200）	41
第26図	平成19年度報告書掲載遺物番号66（1/3）	42

第27図	人物線刻絵画の事例	43
第28図	岩崎山古墳群及び岩崎山火葬墓の位置 (1/2500)	45

龍王山古墳

第29図	遺跡位置図	52
第30図	墳丘測量図及び断面図 (1/200)	55
第31図	墳丘断面図 (1/200) 及び採集遺物 (1/4)	57

表目次

岩崎山古墳群

まとめ

表 1	津田湾古墳群 埋葬施設	39
表 2	岩崎山古墳群一覧	46
表 3	岩崎山 1号墳、4号墳出土埴輪観察表	49
表 4	岩崎山 4号墳出土埴輪観察表	50
表 5	岩崎山 5号墳出土勾玉、管玉、ガラス玉観察表	51

図版目次

岩崎山古墳群

- 図版1-1 岩崎山古墳群遠景（南東から 昭和2～5年 ×が1号墳、○が3号墳）
- 図版1-2 岩崎山古墳群遠景（南東から 平成20年）
- 図版2-1 岩崎山1号墳墳丘（北東から）
- 図版2-2 岩崎山1号墳墳丘（北西から）
- 図版3-1 岩崎山1号墳トレンチ1（北東から）
- 図版3-2 岩崎山1号墳トレンチ2（北西から）
- 図版4-1 岩崎山1号墳墳丘斜面トレンチ1
- 図版4-2 岩崎山1号墳円筒埴輪出土状況
- 図版4-3 岩崎山6号墳蓋石出土状況
- 図版4-4 岩崎山6号墳調査風景（南西から）
- 図版5-1 岩崎山2号墳墳丘（南西から）
- 図版5-2 岩崎山2号墳盛土
- 図版6 岩崎山1号墳出土遺物（平成20年出土資料）
- 図版6 岩崎山4号墳出土遺物（昭和4年出土資料、鎌田共済会郷土博物館蔵）
- 図版7 岩崎山4号墳出土遺物（昭和26年出土資料、さぬき市郷土館蔵）
- 図版8 岩崎山4号墳出土遺物（令和26年出土資料、さぬき市郷土館蔵）

龍王山古墳

- 図版9-1 竪穴式石室（北から）
- 図版9-2 墳頂部（南から）
- 図版9-3 竪穴式石室（南から）
- 図版9-4 墳丘（西から）
- 図版10-1 墳丘（東から）
- 図版10-2 葺石（墳丘南西部）

岩崎山古墳群

岩崎山1号墳

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成16年度から国庫補助事業として津田湾古墳群の内容確認を実施している。平成20年度は岩崎山4号墳に引き続いて岩崎山1号墳の確認調査が計画された。

平成20年3月10日(月)に第4回津田湾古墳群調査検討委員会が実施され、調査方法が検討された。岩崎山1号墳はこれまで墳形において円墳とする意見と前方後円墳とする意見がある。従って、調査は墳形の確定が主たる目的とされた。トレンチは円丘部の裾付近から北東、北西の両尾根上に設置することが決定された。

(調査体制)

さぬき市教育委員会生涯学習課

課長	六車 正徳
課長補佐	山津 勝美
係長	山本 一伸
主事	鶴身 昌大

大川広域行政組合理蔵文化財係

主査	阿河 鋭二
主任主事	松田 朝由
技術員	多田 歩
技術員	松村 春美

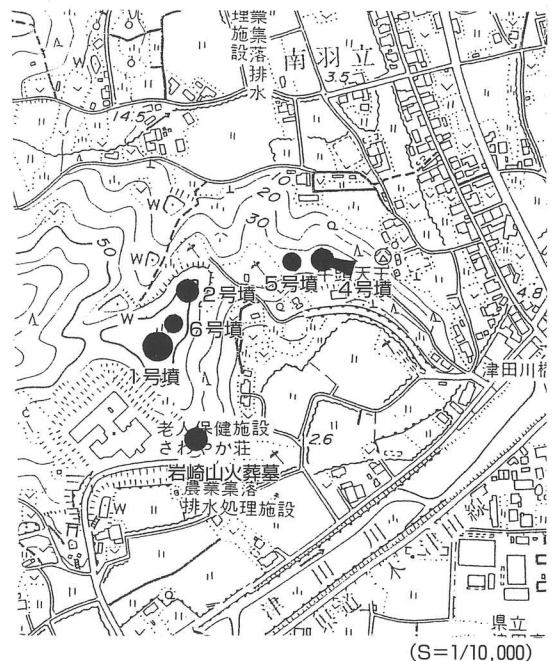
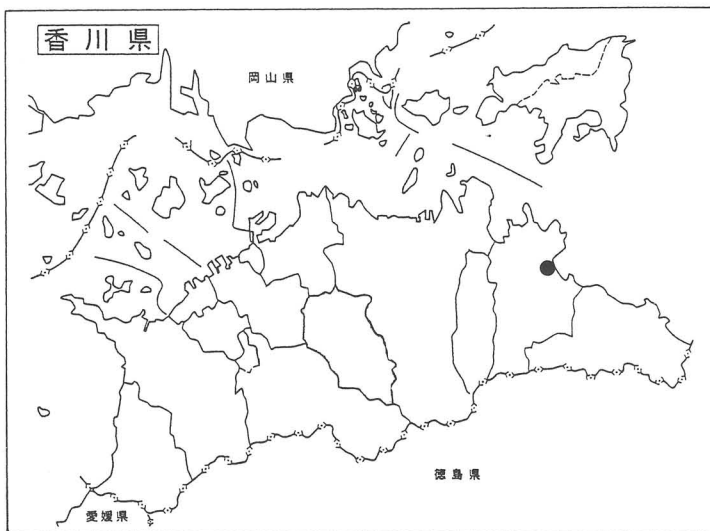
第4回津田湾古墳群調査検討委員会

検討委員 出席者

委員長	六車 恵一
副委員長	丹羽 佑一
委員	古瀬 清秀
委員	渡部 明夫
委員	大久保徹也
委員	内田 和伸
(指導)	森 格也

第2節 調査の経過

平成20年7月7日(月)から調査を開始した。7日から16日にかけて伐採を行い、10日に株式会社イビソクに委託してGPS観測による基準点及びメッシュ杭の設置を行った。16日から墳丘測量を開始し、24日に終了した。23日に北東尾根にトレンチ1を長さ17m、幅1mで設置し、24日から掘削を開始した。



第1図 遺跡位置図

トレンチ1の調査はまずトレンチ内の表土掘削を行なった。トレンチ起点の南西端付近は堆積土のしまりが悪く、南西端から3.5m先で再び地面がしまっていた。よってこの範囲に墳丘を区画する溝のある可能性が推測され、優先的に掘削を行った。また、同時にトレンチ内で複数の石材が集積して土中に埋没しているのを2ヶ所確認し、埋葬施設の可能性が推測された。28日に墳丘を区画する溝が明らかとなり、また埴輪片を確認した。30日に溝の外側の石材集中地点を一部掘削し埋葬施設であることを確認した。8月4日にトレンチ1の調査を終了した。

8月4日からトレンチ2の調査を開始した。5日に墳丘を尾根から区画する溝が土質から確認された。7日に溝の埋土を掘削し埴輪片数点を出土した。8日にトレンチ2の調査を終了した。

8月21日(木)に岩崎山1号墳の調査状況を議題として第5回津田湾古墳群調査検討委員会が実施された。現地で検討を行った結果、墳丘の段築、盛土の有無を検討するため、トレンチ1、トレンチ2ともに墳頂部側に延長することが決定された。第5回津田湾古墳群調査検討委員会の委員は以下のとおりである。

第5回津田湾古墳群調査検討委員会

検討委員	出席者
委員長	丹羽 佑一
副委員長	古瀬 清秀
委員	渡部 明夫
委員	大久保徹也
委員	内田 和伸
(指導)	森 格也

8月25日から1号墳の追加調査を実施した。トレンチ1の延長から開始し、9月1日に終了した。段築、盛土ともに確認されなかった。9月1日からトレンチ2の延長にとりかかり、2日に終了した。トレンチ2も段築、盛土ともに確認されなかった。

第2章 岩崎山1号墳に関する過去の記載

岩崎山1号墳は昭和2年(1927)4月26日に偶然発見された。翌27日と5月3日に発掘調査され、墳頂部から並列した2基の箱式石棺と、内部から人骨、副葬品が発掘された。当時の様子は昭和5年(1930)に刊行された『香川県史蹟名勝天然記念物

調査報告 第5冊』の岩崎山古墳の報告や平成14年(2002)刊行の『岩崎山第4号古墳発掘調査報告書』に詳細に紹介されているため再説しない。ここでは出土遺物の掲載に混乱が認められることを指摘し、その内容を記載しておく。

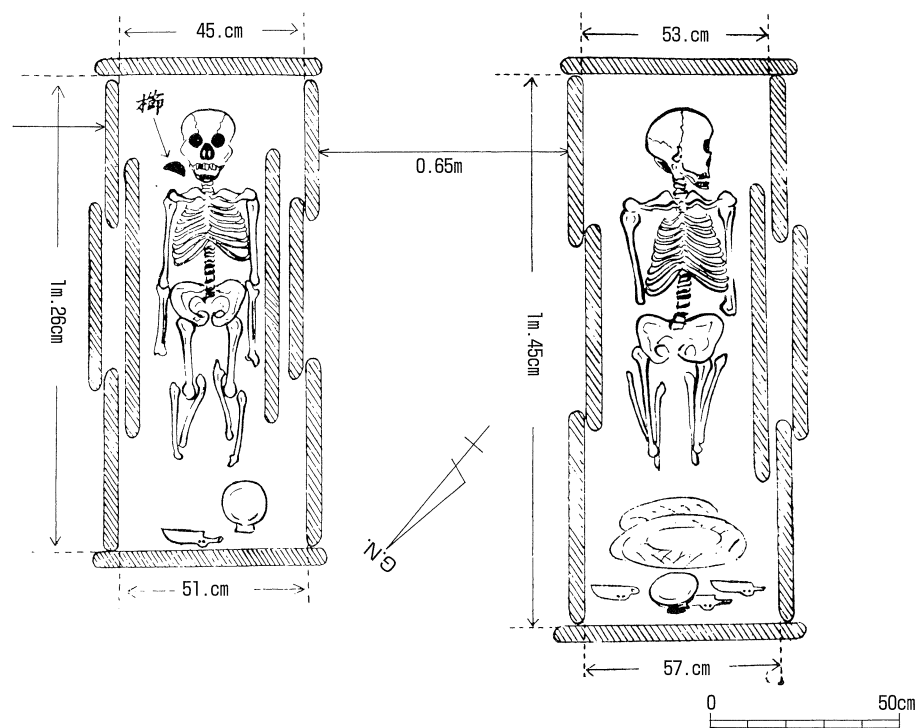
墳頂部で確認された2基の箱式石棺について西棺(A棺)、東棺(B棺)と呼称している。平成14年報告書によると、石製刀子は西棺から2点、東棺から1点出土したことになっているが、昭和5年報告書では西棺で3点、東棺で1点であったことが図面、文章からわかる。

一方、平成14年報告書に記載されている「これまでの調査並びに今回の調査」(第1章3節)には岩崎山1号墳発見の経緯が記載されているが、それによると昭和2年4月26日、笠井咲一氏が最初に発見した箱式石棺は東棺であり、出土品の中に石製刀子2点が含まれていたという。現在に伝わる東棺の石製刀子は1点であり数が異なる。最初に発見した箱式石棺の名称を誤ったか、報告書の中に記載されている石製刀子には最初に発見された石製刀子が含まれていなかった可能性が推測される。なお、7月15日頃に警察に届けられた以外の岩崎山4号墳の遺物が海中に捨てられたと記録されているが、その中には1号墳の石製刀子3個も記録されており、結論として本来の数量は不明とせざるを得ない。

滑石製品は東京国立博物館の所蔵になっているが、1点のみ滑石製斧がさぬき市郷土館にある。これは村人が採集したもので出土状態がはっきりしないと記載されている(平成14年報告書)。津田町史によると昭和26年の京都大学の調査時で残存の遺物として僅かに石斧頭1ヶを得たるのみ、とあり(津田町史 1959)、上記の石製斧と同一製品と思われる。

墳丘に関する記載はまず昭和5年(1930)の報告書に窺うことができる。古墳発見の経緯からは蓋石は露出していたようである。報告書では墳丘の現状について、封土の流出の顕著なことが記載されている。また、墳丘上の直径10mは禿山で通路があり、その周囲は高さ1m程の小松が繁茂している、とある。周溝、埴輪は認められないと指摘する。

昭和26年の京都大学の調査でも墳頂部が禿山で、周辺に小松が繁茂していると同じ表現がある。また、墳頂から北東に尾根の稜線がのびており、基部が前方後円墳のようにくびれているが、葺石や埴輪など古墳を示す材料が認められないことから円墳と判断している。墳丘基底部は山野斜面との区別が付けにくく、特に東と西が直線的で、それが墳丘の南



第2図 1号墳人骨遺物出土状況図 (S=1/20 昭和5年報告書から転載)

側で直交し方墳のようにも見えるとある。ただ、墳丘については、北東方と北西の両平坦面で接する線でとれば、方墳に見える箇所まで下ならず、墳頂から1.5m下までが範囲で、墳丘は径15mの円墳と判断している。

平成14年の広島大学の測量調査では2つの尾根筋と墳丘の関係に重点がおかれた。北東尾根は墳丘中心から11~12m、墳頂から1.5m下でくびれが見られ、溝が尾根筋から墳丘を切り離していると指摘し、尾根は自然尾根と判断している。一方、北西尾根は幅5m、長さ4~5mに平坦に張り出した地形が観察できることから、前方部と判断し、1号墳は全長26mの前方後円墳と指摘している。また、墳丘は南側が自然傾斜面との区別が困難で、見かけ上大きく見えるのに対して、北側は急角度の自然傾斜面に続き墳丘裾は直線的で円形をしていないことから、墳丘が津田川方向を意識した造りであることを指摘している。

以上から、岩崎山1号墳は墳形が円墳とする意見と前方後円墳とする意見があり、墳形の確定が今回の調査の主たる目的となった。

次に古墳の築造された時期について、これまでの見解をまとめる。昭和5年報告書では岩崎山4号墳と同じ頃と同族の古墳ではないかと指摘している。ちなみに岩崎山4号墳は古式古墳と記載され、富田茶臼山古墳、赤山古墳との時期関係を課題として挙

げている。

昭和34年津田町史では石製模造品や鎧の出土していることから見て、岩崎山4号墳よりも新しい中期の古墳であると指摘している。

六車恵一氏は「讃岐津田湾をめぐる四、五世紀ごろの謎」(昭和40年=1965年)で石製模造品、武具から5世紀中頃を中心とした時期を想定している。

このように石製模造品、武具から古墳時代中期を想定した岩崎山1号墳の指摘は中期前半を指摘した広瀬常雄氏(1983)、5~6期(中期前半)を想定した古野徳久氏(2000)などがみられ、現在に及んでいる。

ここで問題になるのが富田茶臼山古墳との関係である。先学研究からは津田湾古墳群から富田茶臼山古墳への時期的変遷が指摘されており、勢力の移動に関して議論がなされている(古野2000他)。先学の指摘からは岩崎山1号墳は津田湾古墳群の中では最も新しい古墳の一つである。よって、この古墳の時期を検討することによって、富田茶臼山古墳と同時期であるのか、異なるかが明らかとなる。これは津田湾古墳群と富田茶臼山古墳の関係を語る上で大事であり、調査では重要な目的の一つとした。

第3章 調査の成果

第1節 墳丘測量

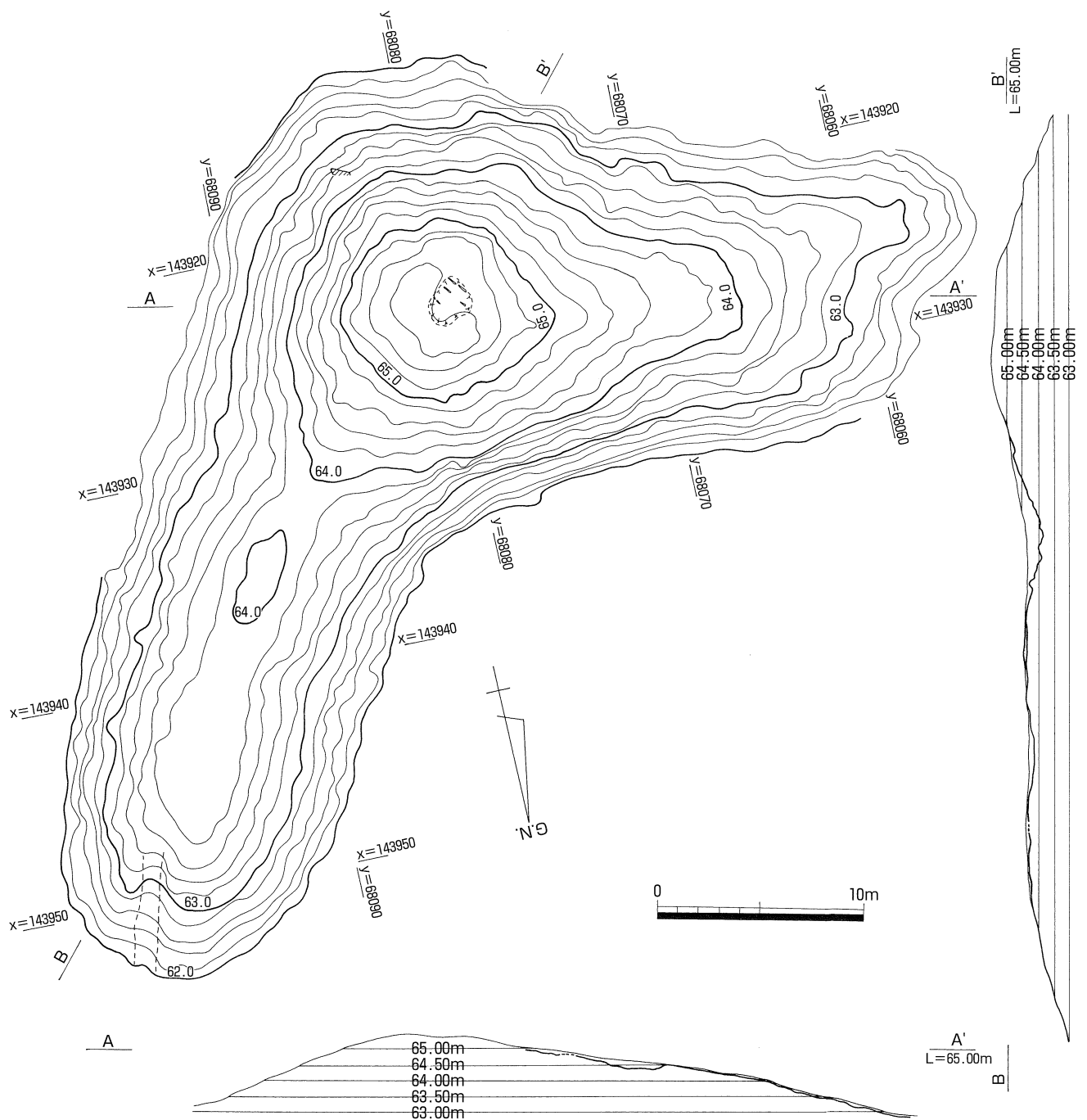
前章で触れたように1号墳の墳丘測量図は昭和26年(1951)の京都大学調査によるものと、平成14年(2002)の広島大学によるものがある。今回、発掘調査に先立って墳丘から張り出す両方の尾根を含んだ範囲で伐採を行い、再度測量を実施した。

測量は国土座標の基準点を設置し、縮尺1/100、20cmコンターで行った。なお、測量範囲は山頂全体

を含むが、これは広島大学の行った測量範囲にほぼ等しい。

1号墳の立地する山頂は北東と北西、南の三方に尾根が延びる。北東、北西の尾根は墳頂からゆるやかに下り前方後円墳のように見える。先学によって北東の尾根は前方部ではなく自然地形とする指摘がなされている。現況もこれまでの指摘どおり墳丘と尾根の境にくびれが認められ、墳丘が溝によって尾根から切り離している可能性が想定される。

くびれ部から北東に続く尾根上は、くびれ部から



太線はトレンチ調査で確認された墳丘ライン

第3図 1号墳墳丘測量図 (S=1/300)

9～10m北東で尾根傾斜面が凹み、くびれが見られる。この間は尾根上から両斜面に80cm下位の範囲でコンターが曲線気味である。この範囲内で今回新たな古墳が確認された（岩崎山6号墳）。

次に北西の尾根はこれまで指摘されていたように北東尾根のようなくびれはなく、長さ7m、幅7mの方形の張り出しが認められる。張り出しの上面は長さ5m、幅5mの平坦地で、外側はゆるやかに傾斜している。広島大学の調査で指摘されていた前方部の可能性が推測されたが、トレンチ調査で前方部の可能性は否定された。

墳頂部は径約5mで平坦になっている。墳丘の中心から少し北東の地点に最高点（標高65.68m）がある。最高点の周囲はコの字状にコンターがまわり（標高65.5mライン）、墳頂部掘削に伴う地形の改変が推測される。埋葬施設は西棺が西長軸側石2石と東長軸側石2石を露出し、約65cm離れて東棺が西長軸側石2石を露出している。2基の箱式石棺は並列しており、方位はN-40°-Wである。発掘記録から埋葬頭位は南である。また、この方位は北東尾根の主軸と82°の関係にあることから、埋葬施設は北東尾根に直交するように意識して設置されたことが推測される。

墳丘裾はこれまで自然傾斜との区別が困難なことが指摘されているが、墳丘と北東尾根の境であるくびれ部付近からそのまま南に墳丘を取巻いて若干のテラスが確認できる。テラスは標高63～63.6mで墳丘南東、南西が比較的良好である。墳丘南はコンターが乱れてテラスは不明瞭となるが、これは通路による改変のためである。墳丘裾の標高は墳丘南東が63～63.4mに対して、墳丘南西が63.4～63.6で南東よりも少し高い。

墳丘北側は標高64mから下位が谷奥に向って急傾斜を呈しており、墳丘裾は不明瞭である。土砂の流出があったのか、古墳築造当初からの地形なのか、判然としないが、北側の墳丘裾は現状で不明瞭である。

墳丘斜面に明瞭な段築は認められない。また、墳丘斜面の特に南側において花崗岩の塊石が点在するが、山頂尾根部の岩盤が露出していることから、葺石ではなく岩盤の風化石と判断する。墳頂部南側も花崗岩風化土らしき堆積の認められる箇所があり、自然地形を整形して古墳を造営している可能性が推測される。

遺物は墳丘と北西尾根との境付近から埴輪片（第7図-10）が1点採集されている。

第2節 トレンチの設定

岩崎山1号墳は円丘の頂部から北西、北東に尾根が延びている。調査は墳形の把握を主たる目的とし、円丘部裾付近から尾根にかけて2ヶ所設置した。調査の過程で2つのトレンチともに墳頂部側に3m延長し、墳丘構造の把握を努めた。また、北東尾根頂部の先端に新たな古墳が所在するか判断するためにトレンチ3を設定した。トレンチ1は長さ20m、幅1m、トレンチ2は長さ20m、幅1m、トレンチ3は長さ5m、幅1mである。



第4図 トレンチ配置図 (S=1/600)

第3節 各トレンチの状況

(1) トレンチ1（1号墳の範囲）

①目的

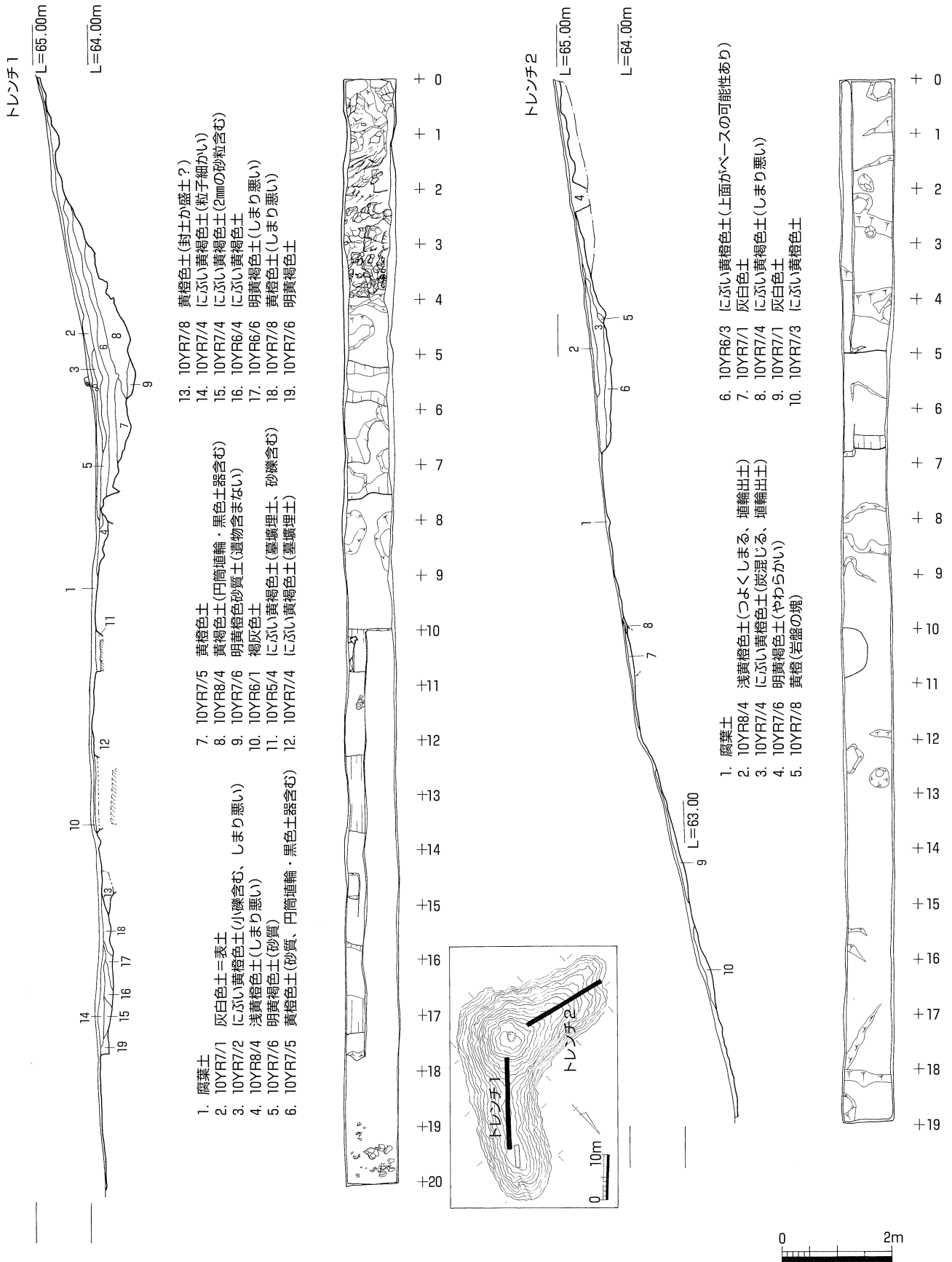
円丘部から北東尾根にかけては、ゆるやかな傾斜で一見前方後円墳のように見える。一方、円丘部と尾根部の境はくびれており、墳丘を区画する溝が想定できる。トレンチ1では堀切りの有無、墳形、北東尾根の性格を調査の目的として設定した。

②トレンチの場所

トレンチ1は円丘部斜面（標高65.0m）を起点として北東尾根上の端部までの長さ20mで設定した。起点は墳丘中心部から約5m北東である。

③堀切り

トレンチ南西端から7.5m北西の地点で堀切りの外側の肩を検出し（以下ではトレンチ南西端からの距離を～m地点と呼称する）、幅4m、深さ0.5mの堀切りが確認された。尾根側の堀切りの傾斜は20～30°で肩にむかってゆるやかに立ち上がる。ベース面は花崗岩風化土で肩部のみ岩盤が残る。堀切り底



第5図 トレンチ1、2平面図及び断面図 (S=1/100)

は凹凸が目立つが幅1.5mの平坦面を呈する。底場の標高は63.25～63.35mを測る。堀切りの底場の5～6m地点で幅0.9m、深さ0.2mのトレンチに直交する溝らしき遺構があるが、トレンチ調査のため、その性格は不明である。単なる窪みの可能性もある。

④墳丘裾

墳丘裾は葺石が確認できなかったため地形変換から言及せざるを得ず、不鮮明である。地形変換からは4.8m地点が推測される。この地点（墳丘裾）の標高は63.25m、墳頂部最高点が65.68mで墳丘高は2.43mである。なお、墳丘南東部で表面観察から推測された墳丘裾の平坦地は63～63.4mでトレンチ1の墳丘裾とほぼ水平になっている。

⑤墳丘の構造

墳丘裾からトレンチ南西端にかけて墳丘の立ち上がりが見られる。立ち上がりは墳丘裾から1.3m地点まで20°の傾斜で、その上は若干傾斜角度を変えて10°で立ち上がり、ゆるやかに曲線を描きながら墳頂部に至る。墳丘斜面に段築は認められない。

墳丘裾付近は花崗岩風化土、そこから上方はトレンチ南西端にかけて凹凸のある岩盤が露出している。堆積土から崩落した岩盤塊が少し出土したが、葺石と考えられる石材は皆無であった。表面観察でも葺石は認められず、1号墳は本来的に葺石を葺いていなかった可能性が指摘できる。

⑦堆積土・遺物出土状況

堀切りは多量の土によって埋没し、地表面は円丘部からゆるやかに尾根に続く。最も深い地点で0.85mの堆積がある。堆積土は主に墳丘側から流れこんでいる。地表から腐葉土、表土、その下に明黄褐色土を1層挟んで、下層に遺物を含む層がくる。

遺物は2.5m～6m地点に見られ、特に明黄褐色土下位、黄褐色土上位に集中する。ベース直上や原位置を留めた例は認められない。遺物の種類は多くが円筒埴輪の小片であるが、黒色土器片も数点確認した。黒色土器片は円筒埴輪片と混在し、層位差は認められない。

⑧まとめ

尾根から墳丘を区画する堀切りを確認し、北東尾根が前方部ではないことが判明した。堆積土から円筒埴輪片が出土し、これまで埴輪の存在が指摘されていた1号墳において埴輪が樹立されていたことが判明した。一方、葺石は皆無であり、埴輪は樹立するが葺石を葺かない古墳であることがわかった。墳丘裾は標高63.25mを測り墳丘高は2.43mとなる。

(2) トレンチ2

①目的

北西尾根の尾根上は長さ15m、幅7mのゆるやかな傾斜面が円丘部から続いている。特に円丘部に接する長さ7m、幅7mは方形上の張り出しに見え、広島大学の測量調査において前方部の可能性が指摘されている。そこで、前方部の有無を主たる目的として円丘部斜面から北西尾根にかけてトレンチを設定した。

②トレンチの場所

トレンチ2は円丘部斜面を起点として北西尾根の端部までの長さ20mで設定した。起点は墳丘の中心から約4m北西である。

③堀切り

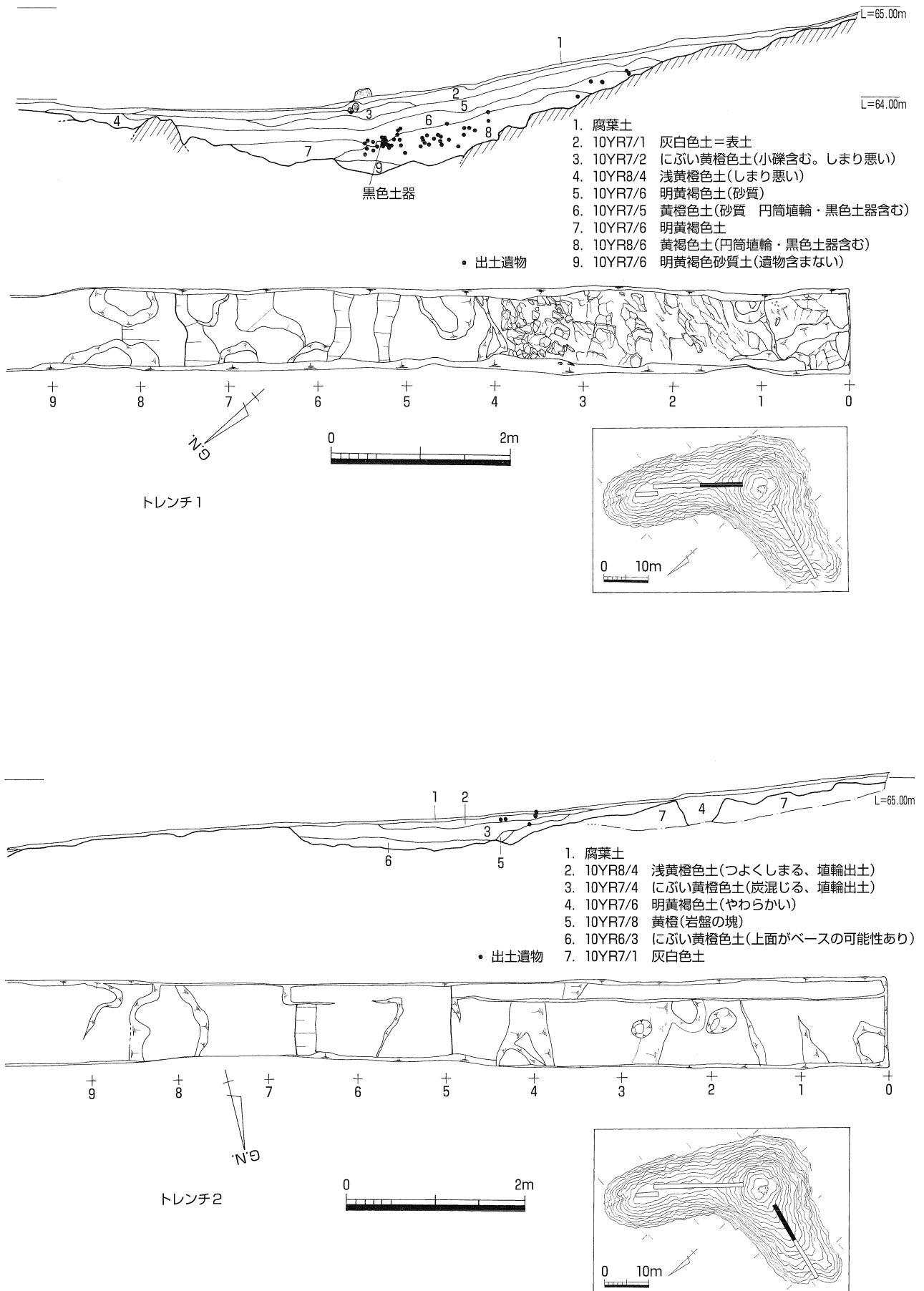
トレンチ南東端から6.5m北西の地点で堀切りの肩を検出し（以下ではトレンチ南東端からの距離を～m地点と呼称する）、幅2.7m、深さ0.2mの堀切りが確認された。尾根側の堀切りの傾斜は30～40°である。ベース面は花崗岩風化土で、トレンチ1で見られた岩盤は顕著でない。堀切りの底場は水平である。標高は64.1mであるが、直上の層がよくしまったにぶい黄橙色土で、この層の上面がベース面となる可能性もある。層は10cm堆積しており、層の上面をベース面とした場合、底場の標高64.2m、深さ0.1mとなる。トレンチ1の堀切りの底場（標高が63.25m）とは約1mの比高差がある。

④墳丘裾

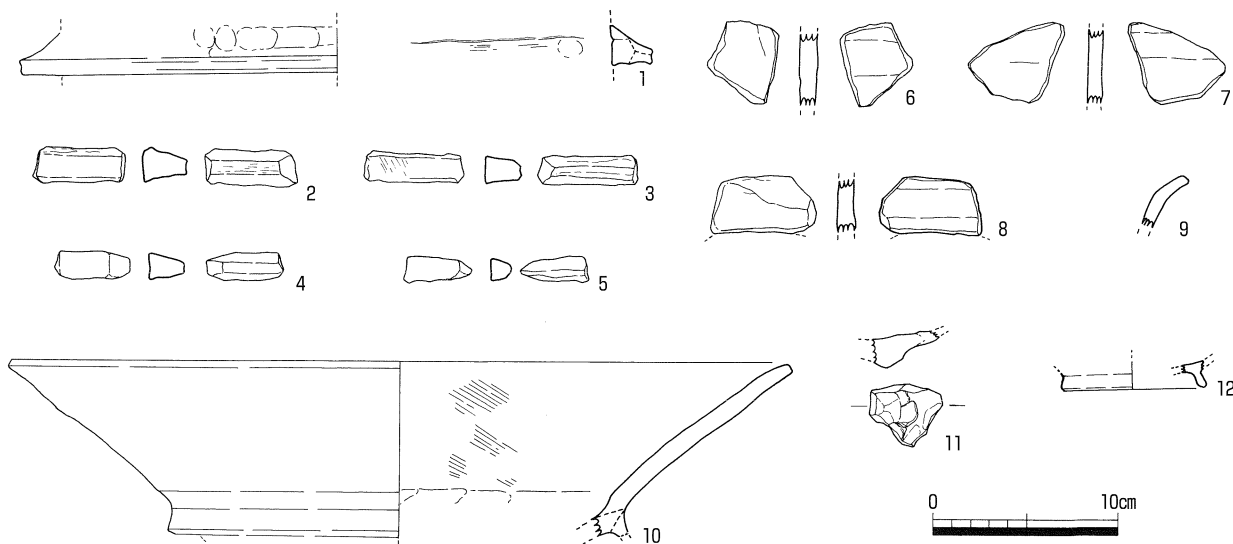
葺石はなく、ベース面の傾斜変換が唯一の判断材料である。ただ、墳丘の傾斜角度はゆるやかであり、明瞭な傾斜変換も想定できない。現状では4.3～4.9m地点が墳丘裾と推測される。この地点（墳丘裾）の標高は64.1～64.2mで、墳頂部最高点が65.68mであることから、北西尾根墳丘裾からの墳丘高は1.48mを測る。なお、墳丘南東部で表面観察から推測された墳丘裾の平坦地は63～63.4mで北西尾根堀切り底部と1mの比高差がある。

⑤堀切りから外側の構造

堀切りの肩から外は幅1mのテラスがあり、地表は岩盤の地山である。テラスからさらに外側は地山が傾斜変換しながらゆるやかに下っていく。墳丘を示すような構造はなく、自然地形が指摘できる。なお、11m地点において壁際に楕円形状の遺構が確認された。幅0.85m、長さ0.6m以上を測り、埋土はしまりの悪いにぶい黄橙色土である。掘削を行わなかったため遺構の性格は不明である。



第6図 1号墳 墳丘裾付近 平面図及び断面図 (S=1/60)



第7図 1号墳出土遺物 (S=1/4)

⑥墳丘の構造

墳丘は葺石を認めず、ベース面は花崗岩風化土である。墳丘裾から20°の傾斜でゆるやかに立ち上がり、2m地点で傾斜変化して10°で立ち上がる。ベース面は樹痕など攪乱が目立つ。

⑦堆積土・遺物出土状況

堀切り上面には強くしまった浅黄橙色土が、その下位にはにぶい黄橙色土が堆積する。また、墳丘斜面にはしまりの悪い明黄褐色土が堆積し、埴輪片は主にこれらの層から出土している。出土範囲は3.5~4.5m地点で、ベース面から離れた上位に散在する。埴輪片はそれぞれ小片で上位から転落してきたものと推察される。

堀切り底場の直上は強くしまったにぶい黄橙色土が堆積しているが、遺物を含まないため、この層の上面がベースになる可能性もある。

⑧まとめ

北西尾根は前方部の可能性が想定されていたが、尾根から墳丘を区画する堀切りを検出し、円墳であることが明らかとなった。また、堀切りは北東尾根に較べると浅く、底場は比高差約1mで北西尾根の方が高い。墳丘に葺石はなく、埴輪片は小片を少量堆積土上位から出土した。原位置を示す資料はなく、墳丘上位から転落してきたものと推測される。堀切りの外側は約1m幅でテラスをもち、ゆるやかに傾斜して下っていく。

第4節 出土遺物

(1) 出土状況

1号墳の堀切りの埋土から埴輪片が出土した。埴輪は全て小片であり、また、全てベース面よりも上位で出土したことから、原位置、近隣に置かれていたものではなく、比較的距離をもった上位から転落してきたものと推測される。墳丘斜面に段想がある可能性も想定して調査を行なったが、段築はなく、埴輪を設置していた痕跡も認められなかった。よって、埴輪は墳頂部にあった可能性が強い。埴輪が墳頂部を巡っていたと判断することはできないが、距離の離れたトレンチ1・2ともに出土したことから、1ヶ所だけに設置していたのではなさそうである。

出土遺物のほとんどは埴輪片で、多くが円筒埴輪と推測される。埴輪片数は100点程度で、接合できた例は限られる。一方、埴輪片に混ざって黒色土器がトレンチ1において埴輪片と同レベルで少片が3点出土している。

(2) 遺物について

トレンチ1、トレンチ2合わせて100点程度の小片が出土した。また、1点は墳丘斜面で採集した。これらの内、11点を実測した。

1~5は突帯である。胴部から剥がれた状態である。1はトレンチ2から出土した。2片が接合し、胴径29.4cmに復元される。突出のつよい突帯で突出高2.3cm、幅2.2cmを測る。突帯は補充技法が見られる。補充技法は胴部に貼り付けた粘土紐の上部や下部に粘土を足すことによって突帯の形状を整えるものである(赤塚1979)。断面で接合痕が観察され、

剥離面には粘土紐の接合痕が明瞭に観察される。突帯端部は強いナデが入る。突帯の形状は下面が水平に伸び、上面が傾斜して下る。上面は内傾しながらくんだり、指押さえが部分的に確認できる。下面は2条の横ナデが施され、部分的に指押さえが見られる。下面は還元焰色である。2はトレンチ1から出土した。突出高2.35cm、幅1.9cmを測る。突帯上面はややふくらみをもって下り、下面は2条の横ナデが見られる。端部はつよいナデが見られる。上面、下面とも酸化焰色である。3はトレンチ1から出土した。突帯高2cm、幅1.5cmでやや小ぶりである。外面に明瞭なナデは見られない。胴部との剥離面に斜め方向のハケが認められ、胴部調整が確認できる。上面、下面ともに酸化焰色である。4はトレンチ1から出土した。突出高1.9cm、突出幅1.5cmでやや小ぶりである。上面はほぼ直線的に傾斜し、下面は2条の横ナデが見られる。下面の先端付近が還元焰色を呈する。突帯端部はよわい横ナデで面を形成している。5はトレンチ1から出土した。突帯高1.2cm、幅1.3で、断面形は丸みをもち、突帯端部も十分なナデではなく、一部丸くおさめているなど法量、形態ともに他と異なる。壺形埴輪の頸部の突帯になる可能性がある。

6～8は胴部片である。胴径が復元できる資料はない。6はトレンチ1から出土した。外面に幅2cmの剥離面が見られる。7はトレンチ1から出土した。外面に幅1.5cmの剥離面が見られる。8はトレンチ1から出土した。外面に幅1.5cmの剥離面が見られる。剥離面から0.5cm下に透孔がある。やや曲線をもって傾斜しているが、形状は不明である。

9はトレンチ2から出土した。口縁部である。外面はつよく外反して立ち上がり、内面は途中屈曲点をもちながら直線気味に立ち上がる。端部は破損して判然としないが、本来の形状を留めているものとして作図した。器種は壺や甕など様々な可能性が想定されるが、胎土、色調は他の埴輪片と差異がなく、埴輪片の可能性が大きい。円筒埴輪の口縁部とすると、受口状を呈するものとなり、古い段階の円筒埴輪であることが指摘できる。

10は墳丘の伐採作業中に採集したものである。採集地点は墳丘西側の北西尾根と円丘部の境付近で、地表面で観察される墳丘裾の傾斜変換点から少し上がった地点になる（標高63.8m付近）。2片が接合した。器種は朝顔形埴輪の口縁部の可能性が大きい。口径41.4cmを測る。突帯からやや外反しつつも、直線気味に立ち上がる。口縁端部付近で少し外反気味

になる。口縁端部は剥離しているようにも見え、判断が難しいが、横ナデによって面を形成していると判断した。突帯付近は断面から擬口縁接合が認められる。突帯も端部付近に剥離痕があり、補充技法による突帯の整形が推測され、本来は突出のつよい突帯の可能性もある。突帯内面は強い横ナデによって凹む。内面に斜めハケが認められる。

11は瘤状の突出があり、その周りは粘土の剥離が認められる。高杯脚部の剥離した杯底部の可能性はあるが断定はできない。胎土、色調は他の埴輪と共通することから、埴輪片の可能性もある。

12は黒色土器の底部である。他に小片が2点あり、同一製品の可能性がある。底径7.4cm、高台高0.8cmを測る。色調は橙色を呈しており、埴輪とは異なる色調である。

以上、1号墳出土の埴輪片はどの個体も同じ色調（浅橙色）で、胎土（0.2～0.5cmの砂粒を比較的多く含む）もほぼ共通している。突出度の高い突帯が特徴的である。形態的な位置づけは「まとめ」において考察したい。

岩崎山6号墳

第1章 調査の経過

北東尾根は上述したように堀切りを確認したため1号墳に含まれないことが明らかとなった。しかし、堀切りから9～10m北東の尾根傾斜面にまた凹みがみられ、この地点も堀切りになっている可能性が想定された。この地点から1号墳の堀切りまでの間は、標高63.2cmラインから上位で曲線気味にコンターが見られ、墳丘の可能性が推測された。

岩崎山1号墳調査で設定したトレンチ1によって、埋葬施設、堀切りが明らかとなり新たな古墳の確認となった。

第2章 調査の成果

(1) トレンチ1（6号墳の範囲）

①墳丘

トレンチ1の7.5m地点に1号墳の堀切りの外側の肩があり、そこから北東に約0.5mはテラス状を呈し、さらに先は墳丘の立ち上がりが認められる。この傾斜変換点を6号墳の墳丘裾と想定する（8.2m地点）。

一方、14.7～17.6m地点で浅い堀切りを確認した。堀切りは幅2.9m、深さ0.25mを測る。この堀切りから両側に尾根を下った斜面には地表面で窪みが見られ、尾根斜面まで堀切りが続く可能性がある。この堀切りの傾斜変換点を墳丘裾と推測すれば、尾根上において墳丘裾間の距離は7～7.5mとなる。標高は北東側の墳丘裾で63.7m、南西側の墳丘裾で63.6～63.7mを測り、ほぼ同値である。南西の墳丘裾付近は地山整形でそこから40cm北東の標高63.8mから地山上に堆積土がみられる。一方、北東の墳丘裾付近も地山整形からなり、50cm北西の標高63.7mから堆積土が見られる。北東側の堆積土の裾付近を長さ80cmで断ち割ったところ、地山はそのまま水平に墳丘の中心に延びていた。この堆積土が盛土か封土か、或は後世の堆積土かは判然としないが、墳頂部の高さとの堆積土裾の比高差は20～30cmを測る。2基の埋葬施設の蓋石上面の標高は一方が堆積土より下位で、一方が上位に位置する。また、堆積土に版築は確認できない。以上の状況からは断定はできないものの埋葬施設の封土の可能性が強いと思われる。墳丘上から葺石、埴輪等の遺物は出土しなかった。

②埋葬施設

北東尾根に直交するように2基の埋葬施設を確認した。北西側を埋葬施設1、北東側を埋葬施設2と呼称する。表土を除去して精査を行ったところ、溝状の土壇掘り方を2ヶ所検出した。

埋葬施設1は9.95～10.7m地点で土壇の掘り方を確認した。幅は0.75mである。土壇内には砂礫を多く含むにぶい黄褐色土が堆積している。トレンチ測壁に沿って幅0.1mのサブトレンチを入れたところ、土壇検出面から8cm下で3枚の安山岩の板石を確認した(標高63.85m)。この安山岩の板石は埋葬施設の蓋石と考えられ、ピンポールで埋没する蓋石の範囲を確認すると、長さ1.8m、幅0.5～0.7mが推測される。方位はN-55°-Wで北東尾根に直交する。埋葬施設の中心はトレンチ南側壁付近となる。

埋葬施設2は埋葬施設1から北東で墓壇の肩を確認した。両埋葬施設間の距離は1.5mである。埋葬施設2も北東尾根に直交していることから、6号墳は尾根に直交した埋葬施設が2基並列することになる。方位はN-55°-Wを測る。墓壇の掘り方は幅1.3～1.4m、墓壇堆積土はにぶい黄褐色土である。埋葬施設2もピンポールで内部を確認すると石材の反応があった。また、トレンチから約1.4m南には安山岩の板石の露出した箇所があり、墓壇内で

反応する石材も安山岩の板石である可能性が想定されるため、掘削による確認は行わなかった。なお、石材の反応は墓壇検出面から32cmの深さで確認できる。このポイントは標高63.63mで、埋葬施設1の蓋石上面よりも約20cm低い。また、墳丘裾よりもレベルはやや低く、墳丘内で最高地点の地山の標高が63.8mであることから、地山よりも20cm以上低い地点に蓋石が認められることになる。埋葬施設1と同じくピンポールによって蓋石の範囲を確認すると、長さ3.15、幅0.7～0.9mが推測され、埋葬施設の中心はトレンチ南側壁付近となる。よって、2基の埋葬施設ともに墳丘の主軸を基準として左右対称に尾根に直交するように埋葬施設が設置されたと考えられる。

③堆積土

墳丘上面は腐葉土直下で墓壇を検出している。隣接する1号墳とは土層の切り合い関係は認められない。北東部の堀切り(尾根端側)の埋土は北東に向って斜めに堆積しており墳丘側から流れた状況が窺える。また、その上面は水平に切られたような状況で、その上ににぶい黄褐色土が水平に堆積している。これらの状況からは古墳時代以降に水平に墳丘が削平された可能性が推測される。ただし、削平を示すような後世の遺物は確認していない。

④まとめ

墳丘上に尾根に並行する埋葬施設を2基確認したことから新たな古墳の認識となった。尾根先端側に幅2.9mの堀切りを確認し、また、墳丘は地山上に30cm程度の堆積土が見られ、古墳の封土の可能性が想定される。墳形は地表面のコンターがゆるやかな曲線を描くことから、円墳の可能性はあるが、明瞭な円形を描かない。よって、尾根を区画しただけの可能性もあり、現段階では両方の可能性を想定しておく。

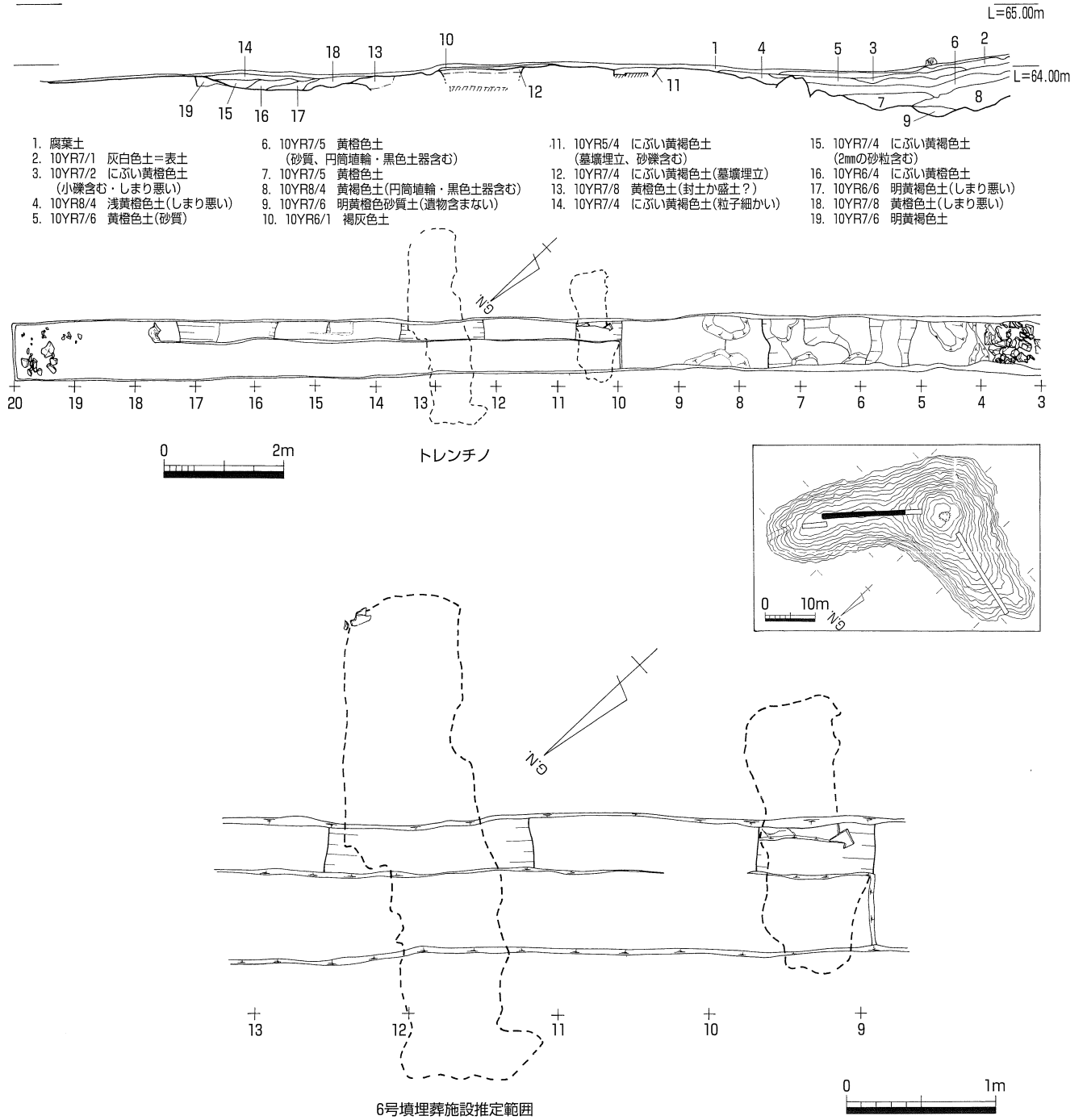
2基の埋葬施設は蓋石のみを確認したため、形式は不明である。墳丘上の位置は墳丘中心の両サイドに位置するが、墳長が断定できないため、墳丘の中心から対称に設置されているかどうか不明である。埋葬施設の方位は尾根に直交して、また、尾根主軸に対して対称に設置されている。

(2) トレンチ3

①目的

岩崎山6号墳は堀切りによって尾根を区画していることが明らかとなった。北東尾根頂部は先端までまだ若干の余裕があり(長さ6m)、さらに別の古

岩崎山古墳群



第8図 6号墳 平面図及び断面図 (S=1/100、S=1/40)

墳の存在する可能性が想定された。尾根先端の北側付近では安山岩の板石が1石地表面で確認でき、埋葬施設に使用された石材の可能性があった。また、尾根頂部の先端から斜面に下った地点ではわずかながらテラス状を呈している。そこで、古墳を示す埋葬施設等の有無を確認することをトレンチ3の目的とした。

②トレンチの場所

北東尾根の先端は北東尾根から少し北側に方角を変えている。よってトレンチ1では尾根の主軸上にのらないことから、再度尾根上の主軸にトレンチを設定した。トレンチはトレンチ1よりも80cm北側に平行移動して設置した。南西部のトレンチの起点はトレンチ1と土層、尾根の関係を明確にするため、1m分をトレンチ1と重複させた。トレンチ3は長さ5m、幅1mである。

③地山・堆積

地表面から5cmで地山を検出した。地山はほぼ平坦で、尾根先端付近でゆるやかに傾斜して降る。地山面には攪乱による地形の乱れはあるが、埋葬施設を示す遺構は認められなかった。一部焼土はあったが、近年の火災時の痕跡と推察される。

④まとめ

トレンチ3は表土下で地山を検出し、埋葬施設を示す遺構は認められなかった。よって、6号墳の先に古墳は所在せず、山頂部は1号墳と6号墳の2基であることが確定した。

岩崎山2号墳

第1章 岩崎山2号墳の過去の記録

岩崎山4号墳は文化6年(1809)に石棺が発見され、『全讃史』の『岩崎古冢』、『讃岐国名勝図絵』の『津田山古墳』として古くから知られていた。岩崎山1号墳は昭和2年(1927)4月26日に発見され、5月3日に発掘された。この時に発掘された遺物の評価を記した書簡が鎌田共済会郷土博物館に残されている。書簡は昭和4年(1929)2月14日高橋直一氏が岡田唯吉氏に送ったものである。この中に岩崎山1号・2号・3号の記載が見られる。ただ、ここにみる古墳名は現在認識されている古墳と異なり、岩崎山1号墳の西棺を1号、東棺を2号、岩崎山4号墳を3号と呼称しているようである。つまり、この段階では岩崎山古墳群は1号墳と4号墳のみの認識であったようである。翌年の昭和5年(1930)

に『史蹟名勝天然記念物調査報告』として岩崎山古墳の報告書が刊行される。この報告書によって現在と同じ岩崎山古墳群の紹介がなされている。報告文には「其の内南羽立と川北両部落の間に突出したる標高70米余の小丘岩崎山には頂上より漸次下方にある小丘毎に古墳のあることを発見せり。」とある。

よって、岩崎山2号墳は昭和4年2月以降に2号墳として認識されたと考えられ、可能性として昭和4年2月18日の実地調査時が推測される。しかし、名称はさておき、この地に古墳が所在したことは以前から知られていたようである。

大正5年(1916)、長町彰氏は『考古学雑誌7巻3号』において岩崎山4号墳(当時岩崎山古墳)の紹介をしている。この紹介は明治6年(1973)の発掘の様子であり、さぬき市志度多和文庫に残されている図面と当時発掘をした人からの聞き取り調査である。その中で古墳の位置について、「岩崎山の頂上より、約四五間下りたる斜面にして、一老松の根元の二間半許り四方平面になれる所にて」とある。つまり、岩崎山の頂上から90m下った斜面ということであり、この地点は現在の4号墳ではなく、2号墳の位置である。この場所について長町氏は「現在の地形其他の点より見るも、石槨の存せしものとも思われず」と記載している。長町氏の報告は現在確認できる4号墳の内容と少し異なる点があるが、2号墳の内容とするにはあまりに4号墳との共通性が目立つ。明治6年の発掘において2号墳も発掘など何かしらの行為が行われた可能性はあるが断定はできない。いずれにせよ、この地点が古墳であったという認識は明治6年の段階にあった可能性はつよい。

昭和5年以降、2号墳の名称が与えられて以降の記載を次にみていこう。

まず、昭和5年の報告書では2号墳に関して以下の記載がある。

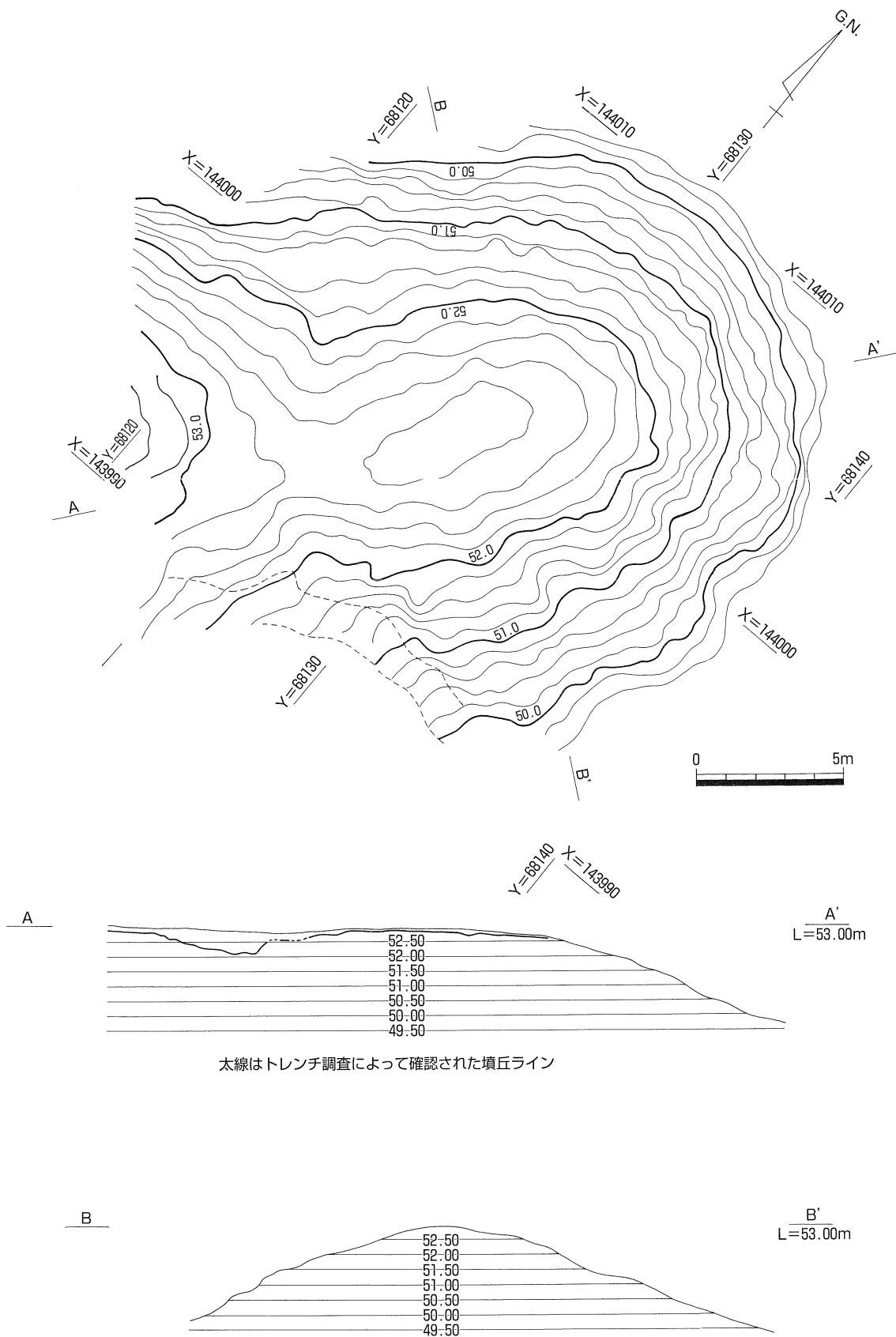
第二号古墳 頂上より稍北に下れる小丘上にあり。破壊されたる小石室あり。(昭和5年 報告書)

戦後、編纂された『津田町史』(昭和34年刊行)には以下の記載がある。

岩崎山第2号古墳

発掘年代不詳、組合箱形石棺の破壊されたあとがある。(昭和34年 津田町史)

昭和47年(1972)、津田町内の古墳の分布調査が



実施された。翌年刊行（1973）の『ふるさと津田の文化財 1 古墳時代』に2号墳の調査表が掲載されている。これによると、尾根の小高き所に立地し、付近に葺石が散乱していることから古墳と判断された、とある。墳形は定かでないとしながらも、小型の円墳を推測している。埋葬施設は不明であるが、安山岩で石室が築かれていたと推測している。

平成12年（2000）、津田町教育委員会によって岩崎山古墳群の古墳確認調査が実施されたが、2号墳の墳丘、主体部は確認できなかった。

これまでの記録から推測するに、戦前、戦後間もない頃は破壊された小石室、箱式石棺が確認できたが、昭和47年段階では埋葬施設を確認することができなかったようである。平成12年に至っては墳丘すら不明瞭になっていたことがわかる。

第2章 調査に至る経緯と経過

平成20年（2008）岩崎山1号墳の調査が実施された。1号墳に行く通路としては崖面になっている尾根の南斜面を登って尾根上に至り、そのまま尾根上を1号墳までのぼっていた。調査が進むにつれ、尾根上に上がる箇所には花崗岩塊が多く見られ、その地点から北側の雑木林を望むと、かすかに墳丘らしき高まりのあることに気付いた。そこで1号墳の調査が一段落ついた8月11日から雑木林の伐採を開始した。8月20日にほぼ伐採を終了し、古墳の可能性が極めて強いことを認識する。翌8月21日に第5回津田湾古墳群調査検討委員会が実施され、1号墳とともに2号墳の検討を行なった。そこで、尾根から墳頂部にかけてトレンチによる確認調査を行なうことが決定された。調査の主たる目的は古墳であることの確認で、その判断材料として埋葬施設の状況、墳丘の形態、構造の把握が指摘された。

9月8日から2号墳の測量を開始し、9日に終了した。9月16日からトレンチ掘削を開始し、17日に墳丘を尾根から区画する堀切りを確認した。24日から墳頂部掘削に取り掛かったが、トレンチ内では花崗岩塊が2点、安山岩の小板石が1点確認できたものの、埋葬施設とされる遺構は確認できなかった。しかし、版築による盛土を確認し、当地が確実に古墳であることを認識し調査を終了した（10月3日）。

第3章 調査の成果

第1節 墳丘測量

2号墳は1号墳から北東尾根を下った尾根上に位置する。傾斜する尾根が傾斜変換して若干のテラス状となり、再び傾斜して下っていくが、そのテラス状の地点に古墳は所在する。1号墳とは直線距離で約70m、比高差11mである。

測量は1号墳から国土座標の基準点を移動し、縮尺1/100、20cmコンターで行った。測量範囲は墳頂から約3m下までである。

墳丘は東から北、そして西方向の保存状態が良好で、東から南にかけては攪乱が顕著であり墳丘ラインは不明瞭である。また、墳丘の南側に1号墳の山頂に至る小道がついており、地形の改変が顕著である。

墳丘斜面は標高51.6mに若干のテラスが認められ、墳丘を東から西にかけて取巻いている。テラスから下は再び傾斜して下る。よって墳丘裾はこのテラス付近が推測された。このテラスは尾根に接続する墳丘西側で幅広となるが、この地点は尾根が強くくびれており、古墳を自然地形から区画する堀切りの存在が推測された。特に尾根側の地形は地表面で矩形に整形している様子が窺える。一方、尾根上には堀切りを示す窪みはなく、尾根上は墳頂部から長さ15mの平坦地が続き、山頂に向って傾斜する。

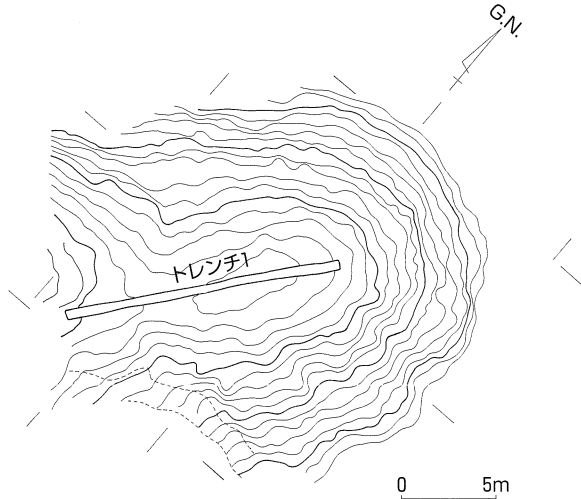
さて、推定される墳丘裾のラインから墳形を復元すると、墳丘は北東方向を主軸に長い楕円形を呈する。楕円形の主軸はN-40°-Eである。墳頂部も平坦気味で、楕円形状に長くのびる。推測される墳丘の中心付近に肉眼では明瞭ではないが、最高地点があり、標高52.888mを測る。標高51.6mを墳丘裾とすると、墳丘高は約1.2mとなる。

墳頂部及び墳丘斜面、周辺には石材の散布が点在して認められる。数は約30石程である。石材は花崗岩の塊石、板石状の安山岩の2種類である。数量は花崗岩塊石が圧倒的に多く、大きさは人頭大である。墳丘の中心から南東にかけて比較的集中して認められる。また、墳丘外の、墳丘の中心から南に7mの地点でも花崗岩塊石が集中している。これらの石材が昭和47年現状調査で葺石と記載されたと推測されるが、トレンチ調査では葺石が確認できなかったため、別の用途で使用された石材である可能性もあつよいが、点在する数量はそれほど多くはない。東西に散らばって散在している。最高地点は墳頂部

のトレンチ内で出土、最低地点は墳丘西の広いテラス部（標高51.5m付近）にある。また、今回の測量の範囲外である墳丘南側の標高49m付近にも認められるが、転落してきたものと推測される。

古墳から約20m先（北東）は開発による崖面となり、古墳の近くまで及んでいる。

第2節 トレンチ調査の成果



第10図 2号墳トレンチは配置図 (S=1/400)

①目的

2号墳は墳丘測量と表面観察から、ある程度は古墳の可能性を示す情報を得ることができたが、古墳の断定には不十分であった。そこで、古墳の判断材料を得ることを目的として埋葬施設の有無、堀切りの有無等を確認するためにトレンチを設定した。

③トレンチの場所

尾根の主軸と楕円形の墳丘の主軸は直線になっていない。そこで、楕円形の墳丘の主軸に平行するように尾根上にトレンチを設定した。トレンチの起点は平坦な墳頂部から再び山頂に向かって傾斜し始める地点である。北側は墳頂平坦面の先端地点である。トレンチは長さ15m、幅1mである。

④堀切り

トレンチ起点である南西端は地表面から12~14cmで地山を検出する。地山は岩盤で、尾根主軸に直交した方向に傾斜して下っていることから、尾根斜面であることがわかる。トレンチ南西端から1.5m（以下ではトレンチ南西端からの距離を~m地点と呼称する。）までは北東に向かってゆるやかに傾斜するが、1.5m地点から傾斜変換してつよく下っていく。傾斜角度は20°である。そして、5m地点から再び立ち上がり墳頂部に至る。この溝を自然尾根から古墳を区画する堀切りと理解した。堀切りは幅5.5m、高さ0.6mである。

堀切りの底場は4m~5m地点までの幅約1mである。底場は凹凸が顕著で、標高は52.08~52.2mである。

⑤墳丘裾・墳丘の立ち上がり

墳丘裾の標高は52.1mである。墳頂部が52.888であり、堀切り底からの墳丘高は約0.8mである。また、表面観察から推察した墳丘北東部の墳丘裾は標高51.6m付近であり、推測される墳丘の長径は13mである。

地表面から観察される墳丘裾は、約51.6mであり、トレンチ内の墳丘裾52.1mとは0.5mの比高差がある。

墳丘は埋土中に葺石を認めない。墳丘の立ち上がりは地山整形である。墳丘斜面は攪乱が顕著に見られ、中には赤褐色の焼土がドーナツ状になっている箇所がある。内部の埋土は斜めに深く入りこんでおり、近年の火災により消失した樹痕と判断した。

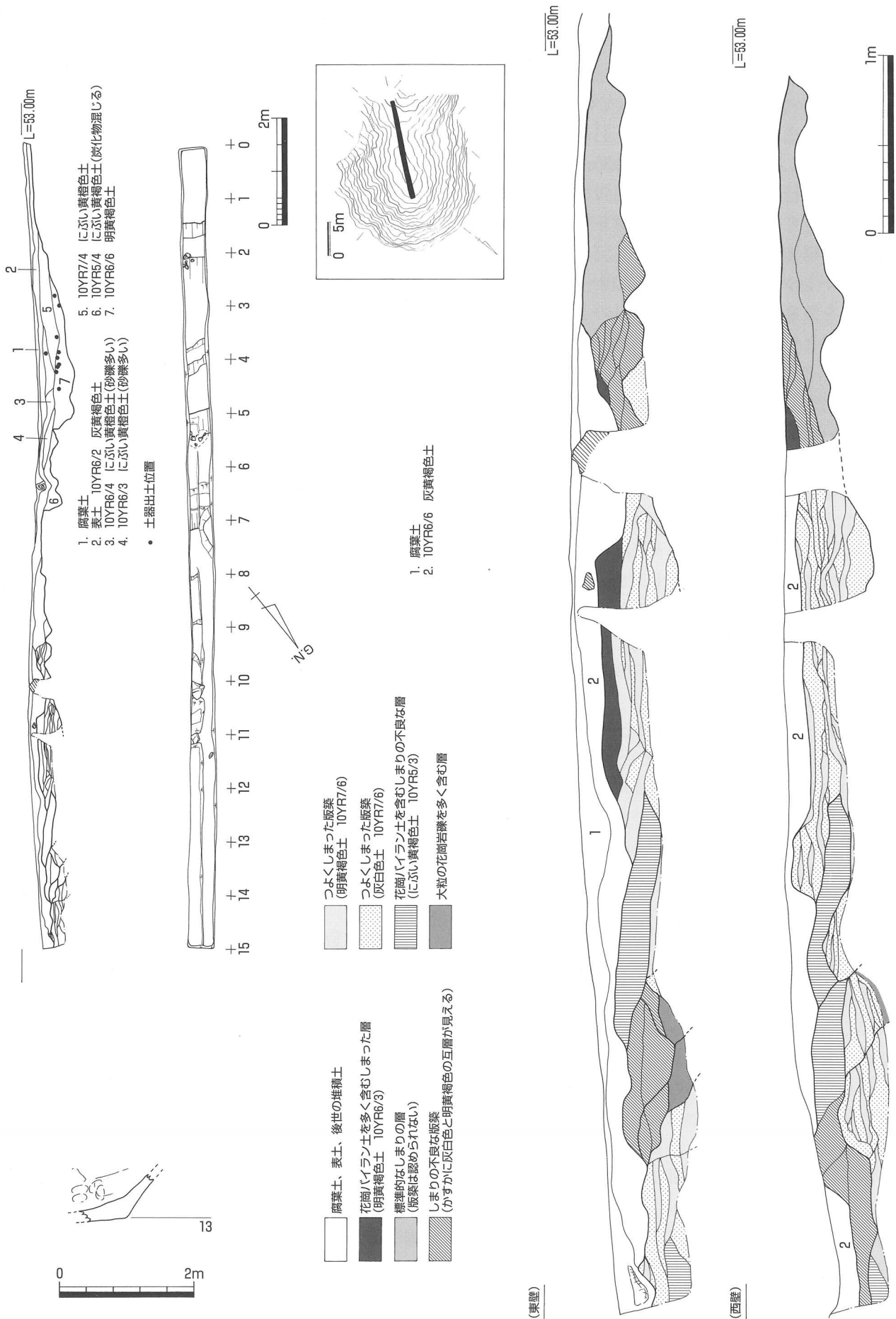
⑥堆積土・出土遺物

堀切り内には2層ないし3層の堆積が認められる。2.8~4.2m地点の埋土中から土器の小片が数点出土している。その内1点は底部で形態からは中世の土師器皿の可能性が強い。他の小片も色調、胎土が類似しており、出土遺物は全て古墳時代から後のものといえる。

⑦墳頂部

7m地点から墳頂部に至る。そして、14m地点から再び斜面となって下る。よって現状の墳頂平坦面の長径は約7mである。

墳頂部は表土を除去すると、しまりの良くない明黄褐色土が堆積しており、花崗岩塊が3石埋土中に露出していた。上面を精査したが、埋葬施設の遺構は確認できず、幅25cmのサブトレンチを南側壁に接して設定した。掘削を進めるうち、強くしまった土層を確認するに至り、盛土の版築と判断された。上層の明黄褐色土からは結局、花崗岩塊石3石と安山岩板石の小片1石を確認したが、埋葬施設にはならなかった。この層は推定される墳丘の中心部からやや北東部よりで深くなっており、墓壙の可能性を想定して、壁面、周囲の精査を行ったが埋葬施設のプランは検出されなかった。層中にある花崗岩塊石と同じような塊石が墳頂部から斜面にかけて広範囲に露出している状況からは、明黄褐色土の堆積は埋葬施設や古墳の封土に関わるものではないといえる。一方、この層は広範囲に見られるため、攪乱土と断定することもできない。将来、面的な確認を行う際の課題である。



第11図 2号墳トレンチ平面図及び断面図 (S=1/100) 出土遺物 (S=1/4)

⑧盛土の様子

7.5m地点から盛土が確認できる。一方、地山は7.5m地点をピークにして（標高52.7m）、尾根先端に向かってゆるやかに傾斜して下っていく。今回11m地点まで地山の検出を行なった。11m地点で標高52.2mを測ることから、3.5m間で約50cmの比高差がある。地山の様子からはこのまま尾根先端に向かって傾斜して降っていると推測され、墳丘は傾斜面に盛土によって構築されている状況が推測される。

盛土はトレンチ南壁に接して幅0.2~0.3cmのサブトレンチを設定して確認した。図11の土層断面はトレンチ東壁とサブトレンチの西壁の状況である。

盛土は厚さ0.3~0.7cmのしまりのある灰白色と明黄褐色の土を交互に積み重ねた版築部分と、しまりのよくない花崗バイラン土混じりの土、そして、大粒の花崗岩礫を含む比較的しまりのある土などから構成される。

盛土上方のみの掘削のため、全体の様子は不明であるが、尾根端であるトレンチ東端は灰白色土と明黄褐色土の版築による丁寧な盛土が見られる。この盛土は西側に傾斜して下っていることから、尾根端側の墳丘裾に土堤状の版築による盛土を行っている可能性が推測される。この土堤状の版築の西側は土堤の傾斜面上に大粒の花崗岩礫を多く含む層が見られる。この層は厚さ10cm以上を測る。墳丘の尾根端側に造られた土堤の内側に充填した盛土と考えられる。この層のさらに上位や西側は再び灰白色土と明黄褐色土の版築による丁寧な盛土が見られるが、箇所によって土のしまりが不十分である。複数回土堤を構築した可能性はあるが、今回の調査では確認できていない。

土堤状の盛土から墳丘の中心までの間は丁寧な版築としまりの悪い簡易な盛土が見られる。後者は花崗バイラン土の混ざる脆弱な土層で、墳丘の中心に向かって緩やかに傾斜して下っている。厚さは最大部分で約18cmある。この層の上位、下位には丁寧な版築が見られることから、一連の盛土の中でこのような質の悪い層も造築されたといえる。

墳丘の中心付近は灰白色土と明黄褐色土の版築による丁寧な盛土が見られ、上面に花崗バイラン土の混ざった明黄褐色土が堆積する。トレンチ壁面、平面で明確な墓壇ラインは確認できない。9.6~10.7m地点の断面で盛土上面に幅約1m、深さ約20cmの窪みが見られるが、トレンチ内のその他の壁面では墓壇と想定されるラインは確認できず、また、この窪みには明黄褐色土が堆積しているが、この堆積は窪み

を越えて、その東側までに延びている。また、堆積土には幅30cm程の花崗岩塊がトレンチ内で3石見られ、トレンチ南の地表面でも同様の岩石が点在している。この石材が埋葬施設の一部であった可能性はあるが、原位置を保ったものとはいえない。よって明黄褐色土は後世の攪乱土と判断した。墳頂部は長さ5mの広い範囲で平坦であり、過去の2号墳の記録に墳頂部に箱式石棺の残骸が見られるという指摘からも後世の改変が顕著であった可能性が考えられる。

第3節 出土遺物

掘切り内の埋土から10点前後の土師質の小片が出土している。唯一形態の確認できるのが第11図-13である。底部から胴部にかけての部位で土師器皿の可能性がよい。小片のため底径は復元できない。胎土は長石、石英の小片を含むが、量は少なく精緻な胎土といえる。他の小片も胎土、色調が類似しており、中世頃の遺物である可能性がよい。

以上から出土した土器片は後世のものであり、今回の調査では古墳に伴う遺物は確認できなかった。

岩崎山4号墳遺物調査

第1章 調査の概要について

岩崎山4号墳の発掘調査は昨年度（平成19年度2007年）実施し、遺構、出土遺物の報告を行った。

今年度は過去に調査された遺物において、未報告のもの、再報告の望ましいものについて整理を行った。

今回の整理は、第1に銅鏡である。銅鏡はこれまで写真、断面図が公表されていたが（津田町2002）、実測図、拓本がなかったため、今回、実測と採拓を行った。

第2に銅鏃である。銅鏃は2点（Z2、Z5）が公表されているが、残り3点は同形ということで省略されている（津田町2002）。しかし、実際には茎の長さの大きさが異なっている。よって、今回、5点全ての実測を行った。

第3に埴輪である。岩崎山4号墳の埴輪は形象埴輪と円筒埴輪の一部が平成14年の報告書（津田町2002）、円筒埴輪の一部が『富田茶白山古墳』の報告書（国木1990）『中間西井坪遺跡I』の報告書（大久保1996）に掲載されている。一方、昭和4年2月18日に墳丘南側のくびれ部で発見された楕円形の

円筒埴輪はこれまで資料化されていない。今回、これら岩崎山4号墳の埴輪の実測を行った。

第2章 調査の成果

第1節 銅鏡（斜縁二神四獣鏡 M1）

①発見の経緯

昭和26年10月16日、京都大学の調査によって、竪穴式石室南端の棺外から出土した。岩崎山4号墳からは文化6年（1809）に発見された1面（現存せず）と合わせて計2面の銅鏡が知られているが、大正5年（1916）の長町彰氏の報告によると、明治6年の発掘で棺外に1面の銅鏡を確認しているようである。この銅鏡が昭和26年出土のものと同じであるかは不明である。

②遺存状況

完存しているが、錆の膜が広がっている。鏡背文様は、右側の獣2匹は白銅色で遺存状態が良好であるが、左側は錆によって不鮮明になっている。鏡面に布の付着した痕跡は認められない。

③法量・重量

直径17.8cm、厚さは内区地文部で0.2cm、縁頂部で0.95cmを測る。反りは0.3cm程度で端から4.2cm内側から反りはじめる。重量は930.6gである。

④文様構成

半球形の鈕があり、その外側に有節重弧文の鈕座がめぐらる。内区は6つの乳によって分割し、それぞれの区画に神獣像を入れる。神像は主神像と脇侍像の二対一組、獣像は乳を挟んで2体が向き合う。

圏線をはさんで、内区外周には銘文、櫛歯文を入れる。一段高い外区にいたる斜面は無文で、外区は端に向って厚みを増す。外区文様は鋸歯文帯－複波文帯－鋸歯文帯の3帯からなる通有の構成である。

⑤鈕

径2.8cm、鏡面からの高さ1.6cmで、径3.3cmの円座にのる。鈕孔は断面が隅丸長方形で幅9mm、高さ5mmを測り鈕孔底部をおおよそ鏡背の地文部の高さに置いている。円座の外側に有節重弧文の鈕座がめぐらる。

⑥内区主文様

乳は内区主模様の中央からやや外寄りに位置する。直径底径1.2cmの乳座に、底径0.8cm、高さ0.6cmの乳を配して、6分割する。

主神像は右斜め上を向くもので、顔には眉、眼、鼻、口が表現されている。頭上には冠があり、下側は2つの突起物から西王母、上側は三山冠から東王

父が指摘できる。胴部は左右の袂や膝が表現され、首や襟、肩から上方へ伸びる翼も明瞭に認められる。西王母、東王父ともに座の表現が見られる。

脇侍像は胴部下半身にスカート状の裳が表現され、肩から上方に伸びる翼や襟も見られる。

獣像は乳を挟んで2体が向き合う。左側は左右対称、右側は左右で異なる獣である。右側の上方の獣は正面を向いて口を開ける虎像で、眉、眼、鼻、舌が見られ、胴部には翼の表現もある。右側の下方の獣は右を向いて口を開け、舌をのばす龍像である。左側の獣は錆による膜で覆われて詳細な特徴は不明である。

⑦内区外周部

銘帯と櫛歯文帯の2帯から構成される。

幅0.7cmの銘帯には時計周りに銘文が見られる。銘文は「吾作明竟、幽凍三商、競徳序道、配象萬疆、曾年益寿、宜子」であるが、作、明、配、疆の字が錆化によって見えなくなっている。

⑧外区

外区文様は鋸歯文帯－複波文帯－鋸歯文帯の3帯からなる通有の構成で斜縁の縁部に至る。

⑨保管場所

平成20年（2008）現在、銅鏡はさぬき市郷土館で保管されている。

第2節 銅鏃（篋被付柳葉式）

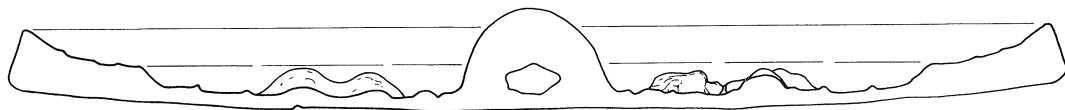
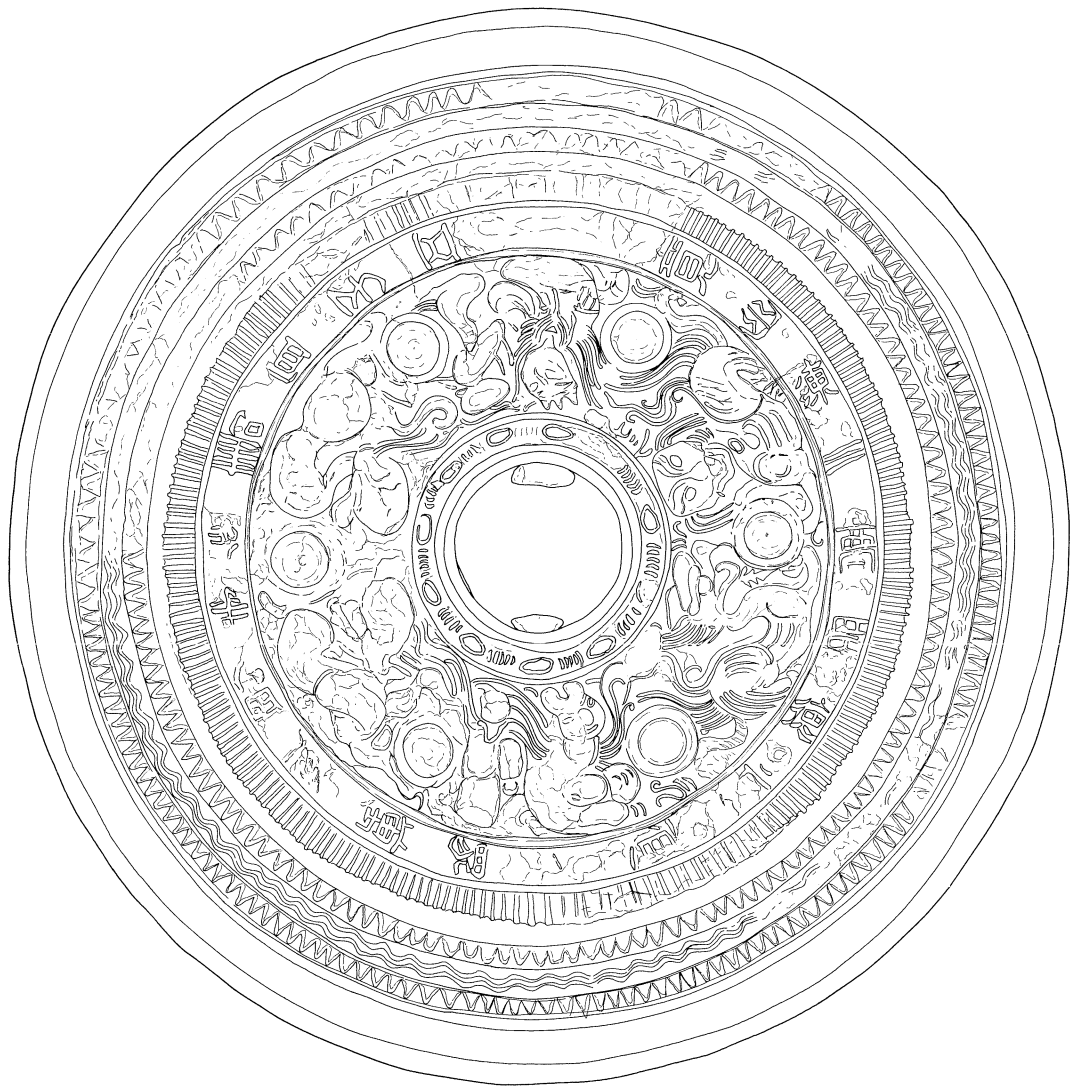
昭和26年の調査において棺外から5点の銅鏃が出土した。棺南端部に接して3本（Z1、Z2、Z3）が、棺の西側中央部に2本（Z4、Z5）が出土している。

2002年報告書では銅鏃は全て同じ造りで、茎の長さはZ5が他と較べて短いとし、Z5とZ2の2点を資料化している。

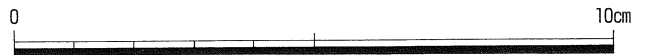
しかし、実際はZ3もまた茎の長さが異なり、図Z4はZ5と同じである。そこで、5点全ての実測作業を実施した。

5点の銅鏃は全て篋被付柳葉式で鏃身部は法量、形態が極めて類似するが、微細な差異も一方で認められる。法量や全体の形態において類似した銅鏃として滋賀県雪野山古墳の埋葬施設出土品がある。

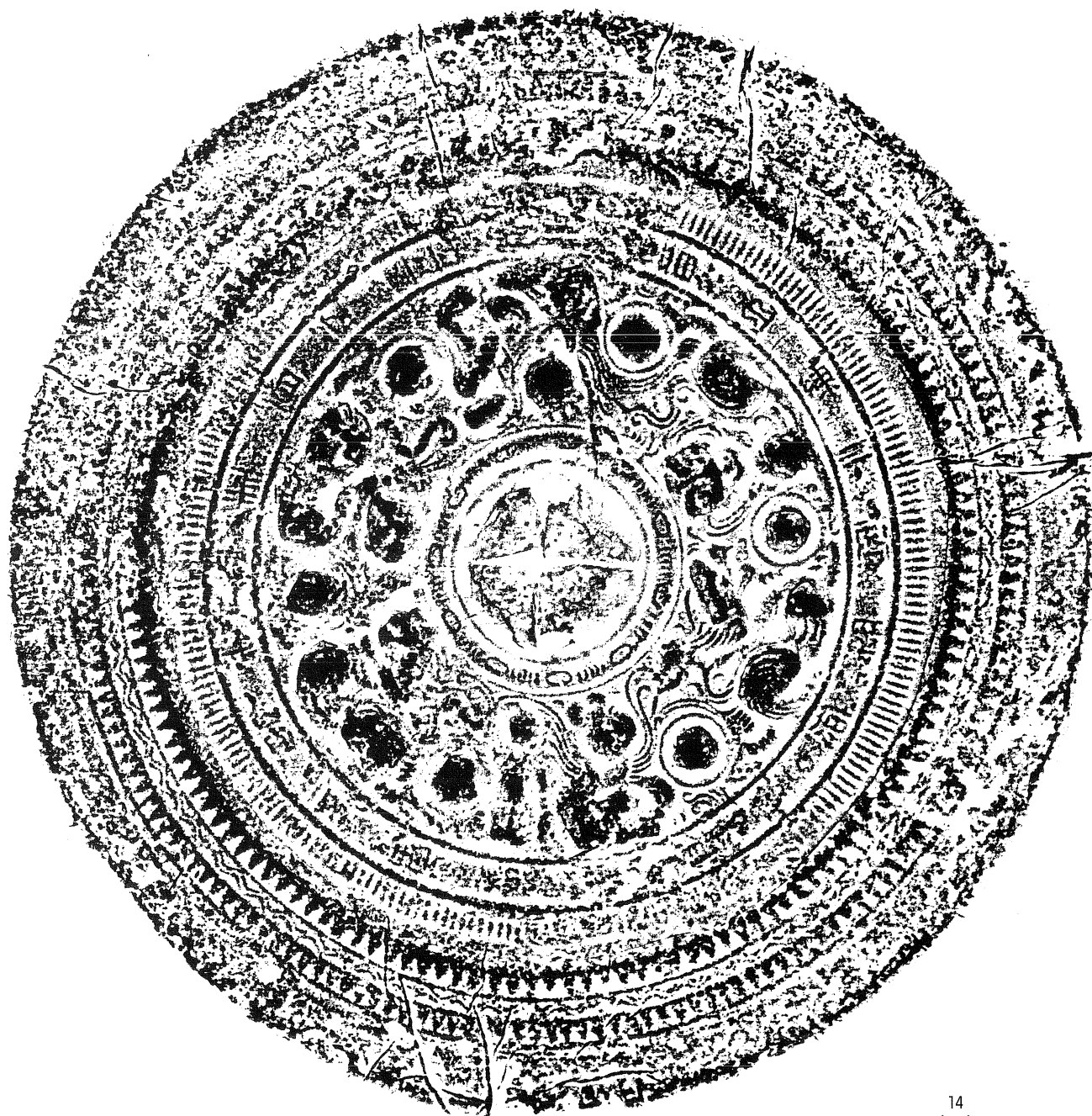
まず、5点の銅鏃を概観する。全長は6.5～7.7cmである。篋被を含まない鏃身長は4.4～4.5cm、篋被長は0.8～0.9cm、鏃最大幅は1.9～2.0cm、鏃身厚0.4～0.5cmで、これらの数値は極めて類似する。一方、茎の長さは短い例19（Z4）で1.4cm、長い例15（Z2）、18（Z1）で2.4cmと差異が認められる。この



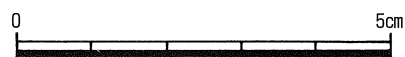
14
(M1)



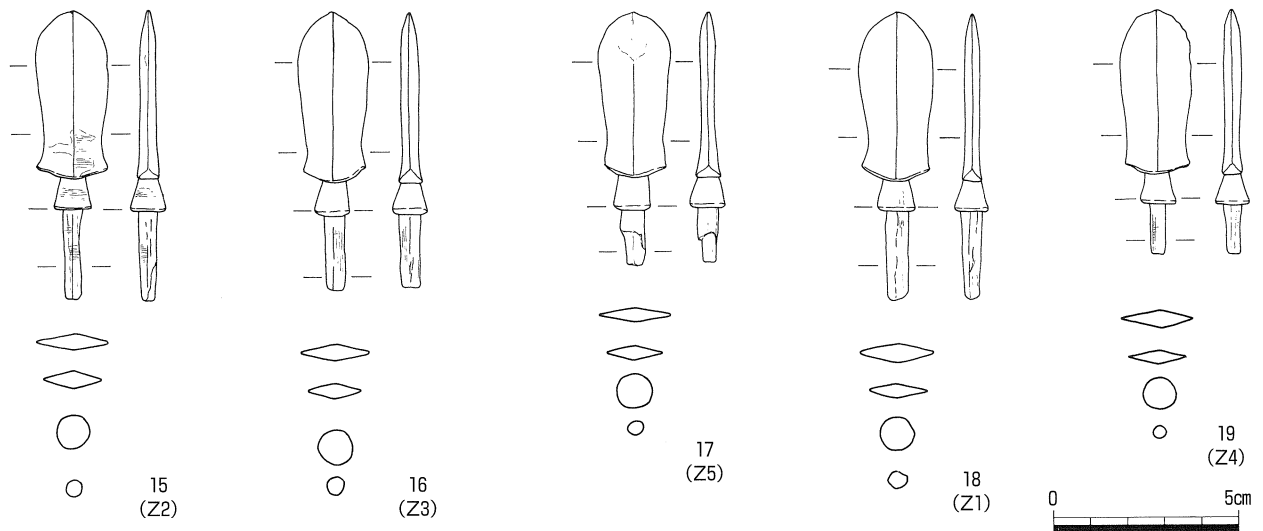
第12図 4号墳出土鏡 (S=4/5 さぬき市郷土館蔵)



14
(M1)



第13図 4号墳出土鏡拓影図 (S=1/1)



第14図 4号墳出土銅鏃 (S=1/2 さぬき市郷土館蔵)

ような差異は茎の端部の処理の仕方と関わる可能性がある。茎の短い17 (Z5)、19 (Z4) は茎端部が面を呈しており切断している可能性があるのに対して、18 (Z1) は鑄放しのままの可能性もある。

その他、関部の幅 (1.6~1.9cm) も差異があるが、これは鑄造の後に工具による整形が行われたためと思われる。

身部表面の研磨は錆のため明瞭には確認できないが、白銅部分が観察される15 (Z2) で横方向の研磨を確認できる。17 (Z5)、18 (Z1) も白銅部分が認められるが不明瞭である。関はS字状の曲線を描いて少し立ち上がる。立ち上がりの高さは0.25~0.35cmである。

筥被は断面円形で、基部から先端に向って直線的に広がる。基部が0.7cm、先端が1cmを測る。15 (Z2) が比較的残りがよく、本来の形状にちかい。

茎の径も顕著ではないものの差異が認められるが (径0.4~0.6cm)、錆に覆われているための誤差が推測される。茎の整形は少しずつ回転しながら十数面に仕上げられる場合が多いが、錆のため不明瞭である。径は基部から先端まで同じである。

全ての銅鏃に柄の装着を示す痕跡はなく、出土位置も考慮すると、柄をつけないで埋葬した可能性が指摘されている (津田町 2002)。

第3節 埴輪

4号墳ではこれまで多くの埴輪が確認・採集されており、保管場所も様々である。今回、これらの埴輪を資料化するため、鎌田共済会郷土博物館、さぬき市郷土館の収蔵資料の実測を実施した。4月にさぬき市郷土館、5月13日~15日に鎌田共済会博物館

の埴輪を調査した。以下では保管地ごとに紹介する。

①さぬき市郷土館保管埴輪

津田町にある旧津田町郷土館である。ここには昭和26年、京都大学の調査によって採集された埴輪が保管されている。

埴輪の展示棚の中に並べられている。総数は26点である。出土場所は報告書によると墳丘上に散乱していたものの採集品である (報告書33P) が、調査日誌には後円部背後の葺石の調査時に埴輪円筒が所々に散在していたこと (報告書10P)、前方部端の北東隅に埴輪片が散乱し、倉庫とおぼしき形象埴輪があったこと (報告書11P) が記載されており、墳丘の様々な箇所から採集された可能性が推測される。今回は26点の埴輪資料のうち、24点を図化した (残りの2点は突帯を含まない胴部片である)。

なお、報告文の中の () 内の番号は埴輪の注記番号である。

20~25は主に家形埴輪片である。どの個体も胎土、色調が共通する。円筒埴輪で普遍的に見られた赤色顔料の塗布は確認できない。

20 (H14) は屋根である。外面に棟覆が見られ、横方向の押縁と、それに直交する筧が突帯によって表現されている。突帯幅約2cm、突帯高4mmである。突帯右側には斜め方向の突帯がみられ、妻の屋根の傾斜に平行したものであると思われる。斜め方向の突帯の傾斜は押縁から40°の角度であり、それは屋根の妻の傾斜角度に等しい。

内面は幅3.5cmで妻部の壁の剥離した痕跡がある。押縁の下面は剥離しており、入母屋作りの可能性もある。網代の表現は見られない。

21は壁から屋根にかけてである。壁には窓の表現が確認できる。窓は屋根との接合部から約2cm下位にあり、内側に0.5cm凹み、さらに0.8cm下で透孔になる構造である。破片のため、窓の全形、大きさは不明である。窓の左側は柱の表現が推測されるが、上位に窓上端から横方向に延長した線刻が入る。屋根の傾斜は25°である。

22も屋根から壁にかけてである。2と同様、屋根との境から2cm下に方形の輪郭があり、窓の表現が推測される。窓の左は柱が推測されるが、21のような横方向の線刻は認められない。屋根の傾斜は25°である。

23(H3)は色調・胎土は家形埴輪の他の破片と共通するが、部位が分からず断定できない。一面に幅3cmの剥離が認められる。断面を観察すると、剥離面の下位は厚さ1~1.5cmの粘土板が2枚平行して貼付けられており、厚さ3.5cmとなる。この粘土盤に厚さ1.8cmの粘土盤が斜めに取り付けられている。この破片に近い形態・構造の埴輪片は昨年(平成19年)の岩崎山4号墳トレンチ4において確認されている(第41図-122 報告書53P)。同定は今後の課題である。

24(H2)は基部である。断面は「へ」の字状に屈曲する。高さ約3.6cm、上端面の幅約3cmを測る。内側は剥離痕が認められず、壁面が接合していた様子は窺えない。よって、基部の上位は窓の可能性がある。

25(H1)は基部の隅部である。断面は「へ」の字状に屈曲する。高さ約4cm、上端面の幅は約3cmを測る。

上端部内側には幅0.6~1.0cmの柱の剥離痕が見られる。剥離痕の内側は、透孔状の切れ込みが認められ、還元色を呈していることから本来柱が接合していた可能性が推測される。隅部下面は、粘土を下方に積み足している。

26(H7)は草摺形埴輪の可能性があるが、断定できない。香川県埴輪出土遺跡調査報告(1986年刊)には盾形埴輪として紹介されている。外面がにぶい褐色、内面が明赤褐色を呈しており、岩崎山4号墳の埴輪の中では異質な色調である。外面に3条の横方向の沈線と、それにT字に直交する2条の縦方向の沈線が見られる。断面は横方向に曲線をもっている。内面は上位に横方向のハケが見られ、下方につれて器壁が厚くなる。作図は2002年報告書と同じ天地で行ったが、草摺形埴輪であれば、天地が反対になる可能性もある。なお、同様の色調の事例と

して37(H10)があり、同一個体の可能性もある。

27(H6)は平板状の埴輪片で外面に綾杉文が見られる。この綾杉文に隣接して平行する幅2.5cm以上の剥離痕がある。また、綾杉文から剥離痕とは反対方向に4cm離れて端面が確認できる。外面には縦、横両方向のハケ調整が見られ、赤色顔料が塗布されている。香川県埴輪出土遺跡調査報告(1986年刊)には盾形埴輪として紹介されているが、外面に剥離痕を認めることから断定は困難である。

28(H11)は平板状を呈し、外面に突帯がついていたと推測されるが、小片のため埴輪の種類及び全体の復元は困難である。突帯の一辺が剥離しており、剥離面にハケが確認できる。色調は赤褐色を呈し、岩崎山4号墳出土の埴輪では異質な色調である。赤色顔料は認められない。香川県埴輪出土遺跡調査報告(1986年刊)には盾形埴輪として紹介されている。

29(H9)は勾玉のような形状を呈する。一方の端部は曲線を描きながら丸くおさまる。もう一方は途中で欠損する。現存長6cm、断面は不整円形、屈曲部付近で径2.5~3cmを測る。赤色顔料は認められない。2002年報告書では人物埴輪の一部(腕)の可能性が指摘されている。

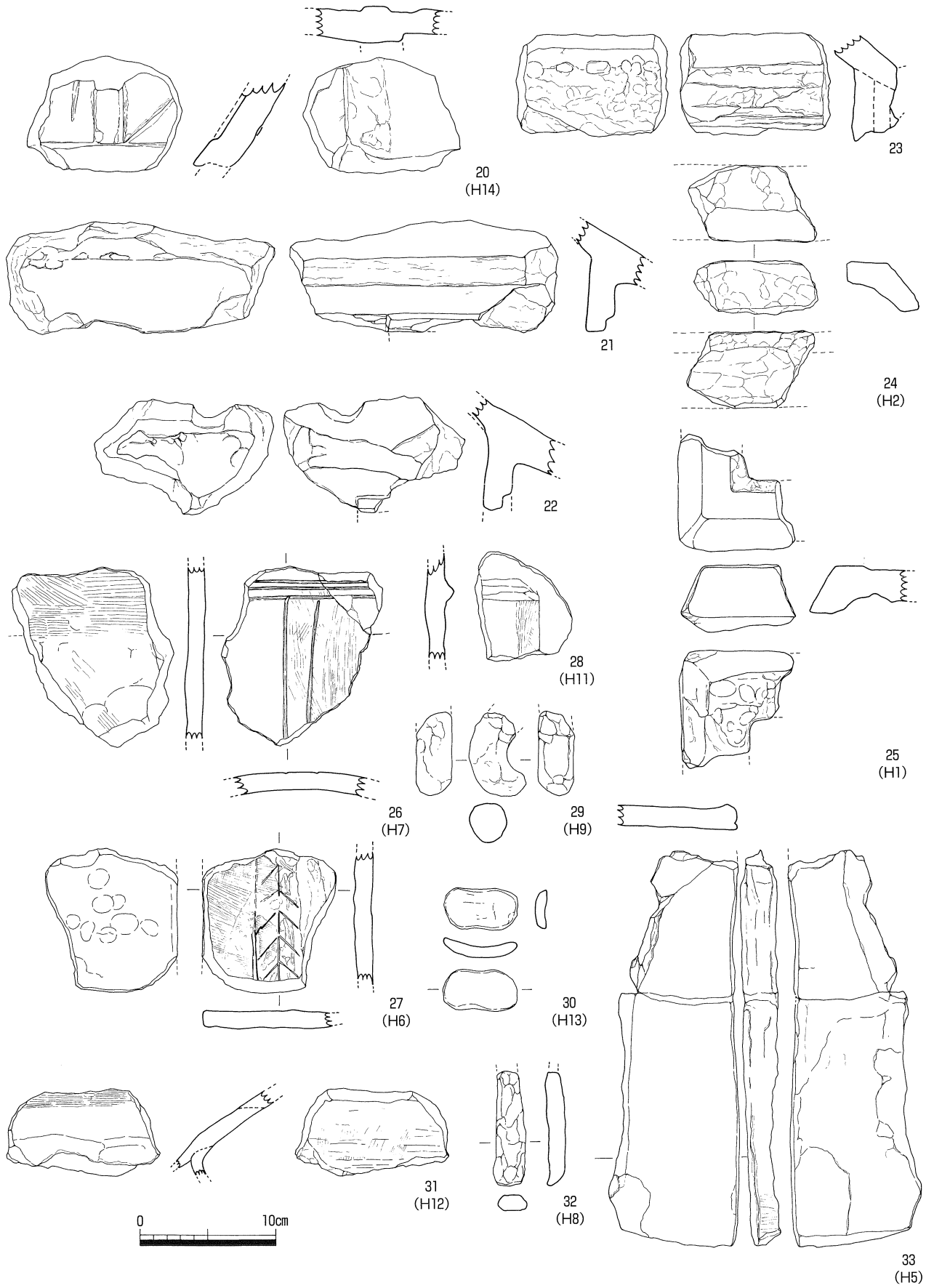
30(H13)は長さ5.3cm、幅約3cmで中央部が少しくびれた長楕円形を呈する。石棺身の南側縄掛突起の下より出土した。胎土は精緻である。2002年報告書では陶餅と紹介されており、一見人物埴輪の頭についていた結髪のように思われるが明らかでないと記載されている。色調は外面が橙色に対して内面は還元色を呈する。赤色顔料は認められない。

31(H12)は外反部分である。外面に突帯が見られるが、突帯の先端は破損している。調整方法は外面が縦ハケの後に横方向のナデ、内面が上位に横ハケを残す。外面には赤色顔料が確認できる。埴輪の種類は不明である。

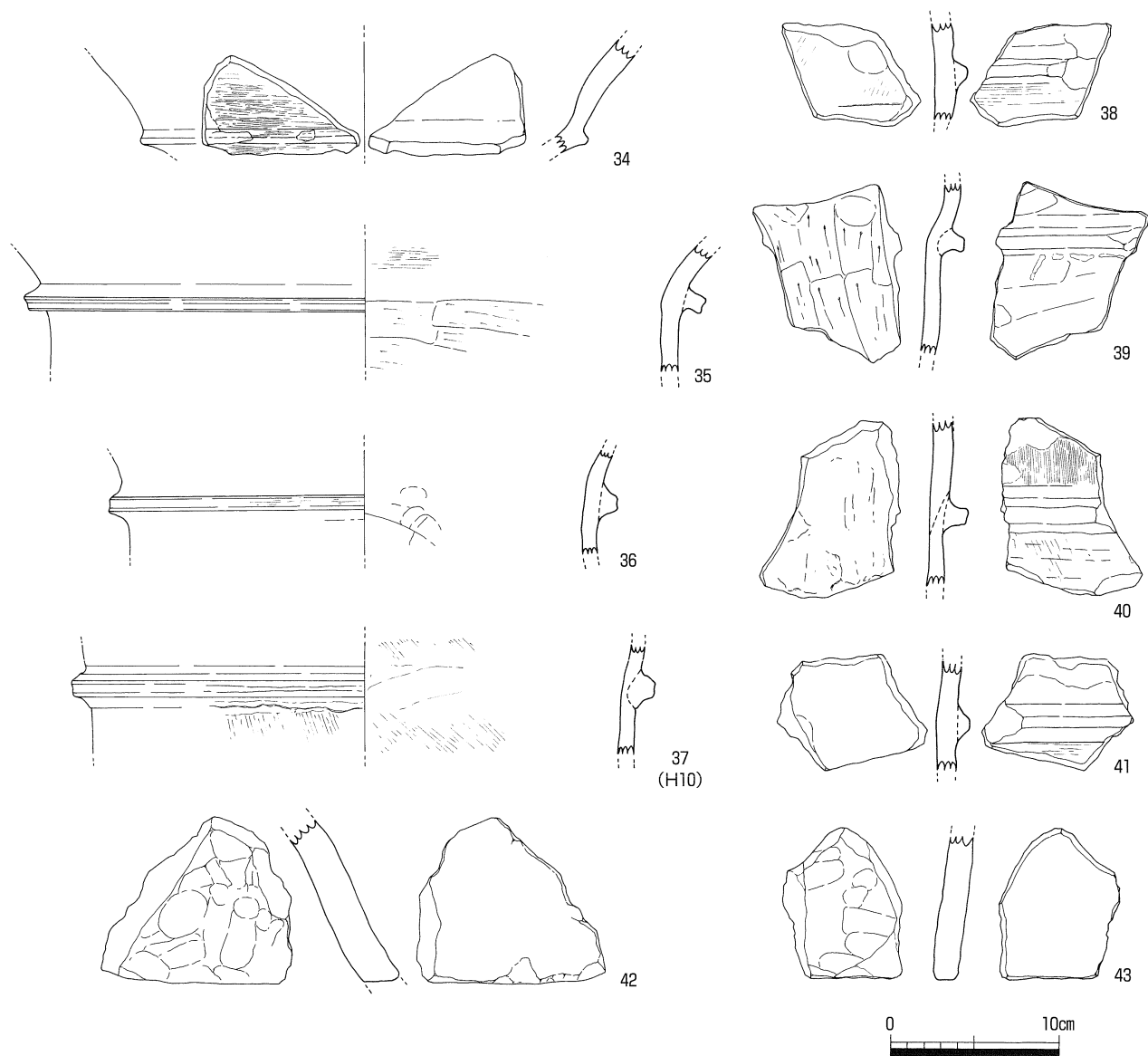
32(H8)は棒状の埴輪で、片方の端部は欠損している。現存長8.3cmを測る。幅は欠損部に向かうにつれ細くなっていく。内側に粘土の剥離痕が認められ、本来他の部材と接合していたようである。

33(H5)は鱗付円筒埴輪の鱗が推測される。本体から剥離した状態で、上下面、外端部も欠損する。現状で長さ28.7cm以上、幅9.5cm以上を測る。剥離面から先端にかけて厚さは薄くなっていく。剥離面は幅2~2.5cmを測り、下端から3cm間で横方向のハケ調整の痕跡が認められる。横方向の突帯との関係がわかる箇所はない。赤色顔料は認められない。

34は朝顔形埴輪か壺形埴輪の口縁部である。擬口



第15図 4号墳出土埴輪(1) (S=1/4 さぬき市郷土館蔵)



第16図 4号墳出土土埴輪(2) (S=1/4 さぬき市郷土館蔵)

縁手法による二重口縁を呈する。屈曲部から口縁部端にかけてゆるやかに外反し、器厚は屈曲部から口縁部端にかけて厚くなっていく。外面に横方向の丁寧なヘラミガキが見られ、また、赤色顔料の塗布が顕著である。

35~43は円筒埴輪片が主である。

35は最上段の突帯から口縁部に至る箇所である。最上段の突帯から口縁部にかけて外反し、内面のケズリは最上段の突帯付近まで横方向に施され、その上位は、ハケとナデが残る。外面は赤色顔料が顕著に観察できる。

36も最上段の突帯から口縁部に至る箇所である。口縁部は外反し、内面のケズリは最上段の突帯まで施される。

37 (H10) は胴部である。外面は褐色、内面は明赤褐色を呈し、26 (H7) の埴輪に類似し、同一個体の可能性もある。外面に縦ハケ、内面に斜めハケ

が見られる。突帯の内面はナデが施される。赤色顔料の塗布は認められない。

38は胴部である。橙色を呈する。外面に赤色顔料が確認できる。内面はハケ・ナデ調整が見られ、粘土紐の痕跡が認められる。

39は外面にナデと赤色顔料、内面に縦方向のケズリが見られる。外面に「津田岩崎山」の注記がある。

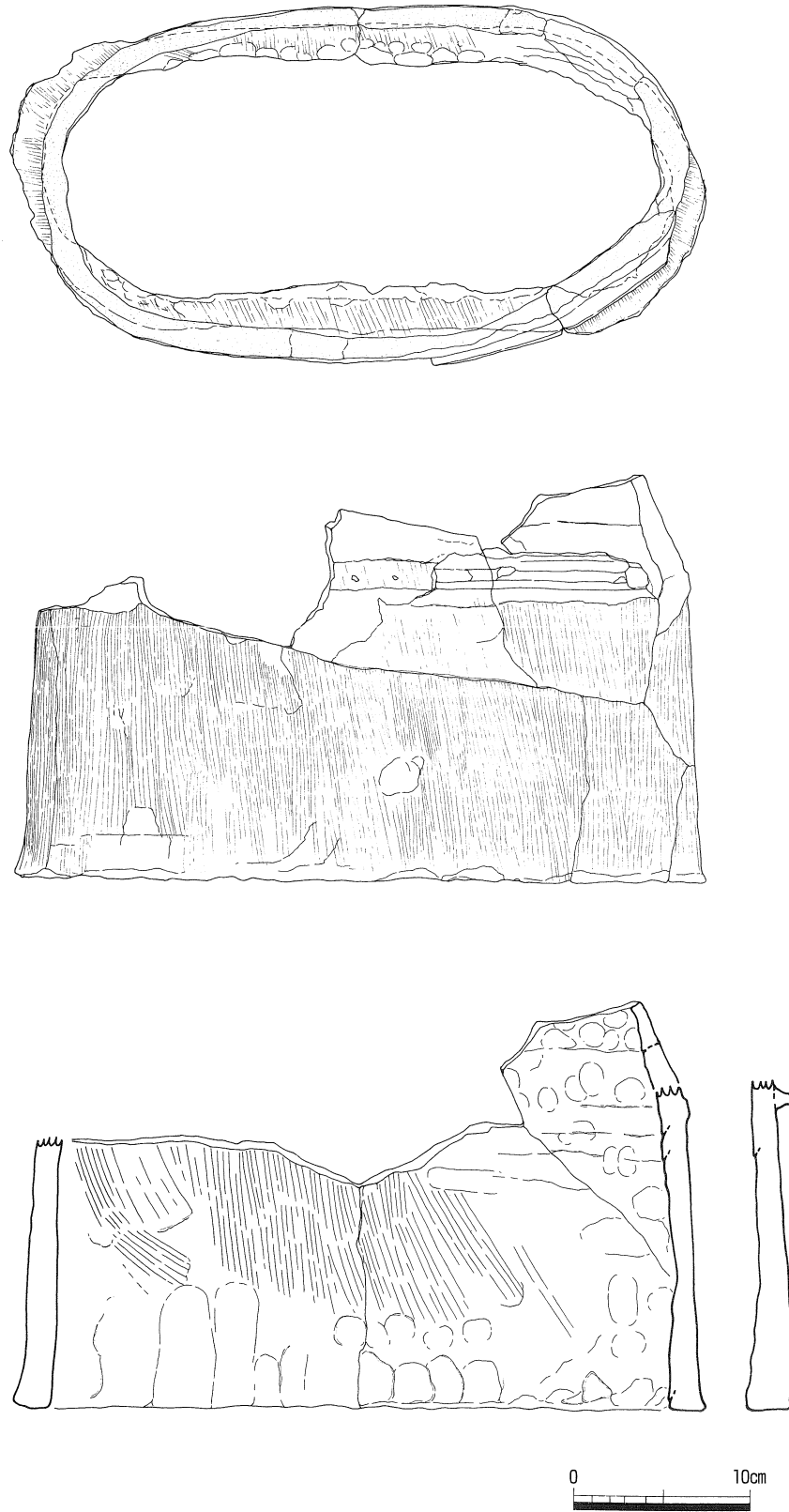
40は外面に縦ハケ、内面にケズリを施す。外面に「津田岩崎山」の注記がある。

41は外面にかろうじて赤色顔料を確認できる。

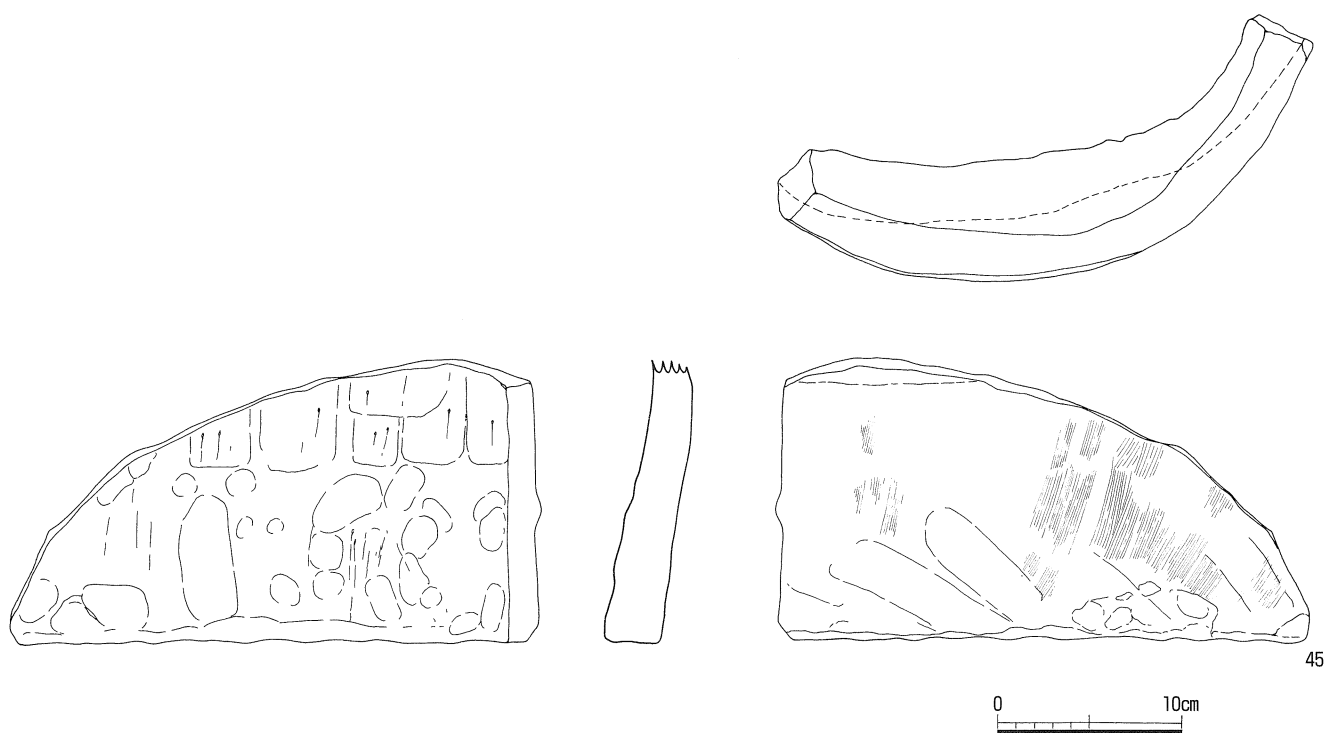
42は底部付近であるが、下端部を欠損し、傾きは判然としない。底部は広がっている。赤色顔料は確認できない。

43は底部である。端部は肥厚することなく、面を持つ。外面に黒斑を認める。

図化していない2点は胴部片である。内外面にナデ調整が認められる。



第17図 4号墳出土埴輪(3) (S=1/4 鎌田共済会郷土博物館蔵)



第18図 4号墳出土埴輪(4) (S=1/4 鎌田共済会郷土博物館蔵)

②鎌田共済会郷土博物館保管埴輪

坂田市鎌田共済会郷土博物館に岩崎山4号墳出土埴輪がある。これらの埴輪は大正時代に採集されたもの(大正15年10月4日採集の注記のある円筒埴輪が保管されている。)、昭和初期に採集されたものが中心である。その中に、昭和4年(1929)に発見された楕円形埴輪がある。昭和4年(1929)2月28日、松浦正一氏と岡田唯吉氏の2人が4号墳の石室を実測した際、墳丘南側のくびれ部で3個体の円筒埴輪が並んで埋まっているのを発見した。中央の埴輪は短径30cm、長径33cmで両側の埴輪との間隔は約12cmであったという。博物館には底部の完存する楕円形埴輪1点が保管されている。

他、昭和5年の報告書では前方部南側で円筒埴輪が多数散乱していることが記載されているが、この場所からの採集品も保管されている可能性がある。

今回、昭和4年に発見されたという楕円形埴輪の他、岩崎山4号墳出土遺物として所蔵されている埴輪で比較的残りの良好な個体について図化を試みた。

44は楕円形埴輪である。長径39cm、短径20cmを測る。外面に「大川郡津田町岩崎山4号墳 埴輪円筒」の注記がある。昭和5年の報告書では楕円形埴輪について長径33cm、短径30cmとあり、保管されている埴輪の数値と大きく異なる。

埴輪は内傾しながら立ち上がる箇所と外傾しながら立ち上がる箇所がある。底部から17cm上で最下段の突帯が見られる。突帯は部分的に欠損しており、

胴部外面の剥離面に0.3cm程度の円形状の小孔が確認できる。これは突帯貼り付けのための基準孔と推測される。小孔は2cm間隔で2点認められる。

外面は粗い縦ハケが一面に施される。透孔は認められない。ハケのラインは突帯剥離面に見られるハケのラインに繋がることから一次調整と考えられる。

底部内面は指押さえ、指ナデが顕著に見られ、その上位は斜め方向のハケやナデが見られる。1.5cm幅で粘土紐の接合痕が観察され、指ナデによる調整が確認できる。

色調は橙色を呈し、多くの岩崎山4号墳出土の埴輪とは異質な色調である。外面には広い範囲で黒斑が確認できる。赤色顔料は認められない。

45は楕円形埴輪の可能性がある。2個体が接合し、他1個体も同一個体の可能性がある。面をもった幅広の底部から外方に立ち上がる。外面にはハケが見られ、底部付近は工具を用いた斜め方向のナデが施されている。内面は底部付近に指ナデ、その上位に縦方向のケズリが認められる。色調はにぶい黄橙色を呈し、外面に赤色顔料が確認できる。

この他、岩崎山4号墳の埴輪として保管されている埴輪片が20点前後、岩崎山4号墳出土の可能性のある埴輪片が70点前後保管されている。多くが円筒埴輪で色調、胎土はさぬき市郷土館保管の円筒埴輪や、平成19年度調査で出土した円筒埴輪と共通する。なお、岩崎山4号墳の可能性のある埴輪片の中には赤褐色系も認められ、これらは岩崎山4号墳以

外の出土品である可能性もある。

第4節 土器

①土師器甕

さぬき市郷土館に岩崎山4号墳出土と伝わる土器小片が34点ある。破片の状態であるが、同一個体とおもわれる破片も多く、器種としては土師器甕が想定される。1～2の個体数が推測される。出土位置と現在に至る由来は不明である。

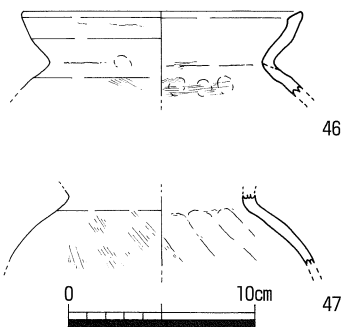
46は胴部上半から口縁部にかけてである。口縁部は途中ゆるく屈曲して広がる。端部は内傾して面をなす。口径15cmを測る。胴部は外面にハケ、内面にハケ、指押さえを認める。布留系の土器である。

47は胴部から頸にかけてである。外面にハケ、内面に斜め方向のナデが認められる。

図化していない資料は土師器甕の胴部である。外面にハケ、内面には指ナデが認められる。

②まとめ

土師器甕は発見の由来が判然とないが、形態的にみて、岩崎山古墳群にほぼ並行する時期の遺物であることが分かる。



第19図 4号墳出土遺物 (S=1/2 さぬき市郷土館蔵)

岩崎山5号墳遺物調査

第1章 調査の概要について

昭和57年(1982)9月26日、松喰虫の被害木を伐採するために、作業進入路を建設した際に4号墳の西30mで発見され、緊急調査が行なわれた。調査の概要については昭和57年度の『香川県埋蔵文化財調査年報』に報告されている。

出土遺物に関しては、箱式石棺の床面直上から仿製内行花文鏡1面、勾玉1個、ガラス製小玉38個、鉄刀子1、碧玉製管玉10個が出土した。また、さぬき市郷土館にはその他に針状の鉄器が岩崎山5号墳の出土遺物として保管されている。針状の鉄器は

『再訂津田町史』(1986)に勺(しゃく)と紹介され、野牛古墳の報告書にはヤス状鉄器として図面が公表されている(香川県教育委員会『野牛古墳』2000)。一方、その他の遺物については報告書には写真による掲載のみである。そこで、今回、出土遺物の図面の作成・検討を行った。

第2章 調査の成果

第1節 銅鏡(内行花文鏡)

①発見の経緯

抉り取られた箱式石棺東小口に近い所の右隅から出土した。出土位置は床面直上である。

②遺存状態

完存はしているが、錆の膜が広がっており、白銅部分はほとんど認められない。内区にL字状の長さ2cmの亀裂が入り、その部分が鏡背から見て、窪んでいる。鏡背面には鈕の部分、内区の花文部分に布の付着した痕跡が認められる。出土当時は鏡全体が布で包まれていたという。

③法量・重量

直径11.2cm、厚さは内区で0.25cm、縁頂部で0.3cmを測る。反りは0.2cm程度で、端から1.5cm内側から反りはじめる。重量は117.9gである。

④文様構成

半球形の鈕があり、内区は外方に向って二重の圈線、櫛歯文帯、平頂素文帯、八花文と続く。さらに内区外縁は珠文帯、櫛歯文帯である。殊文帯と櫛歯文帯は内区花文部や外区よりも若干窪んで低くなっており、内区と外区を視覚的に区画している。外区は鏡縁から1.6cm内側からで、鏡面はこの場所から反る。鏡背も外反しながら立ち上がる。鏡縁は傾斜する。

⑤鈕

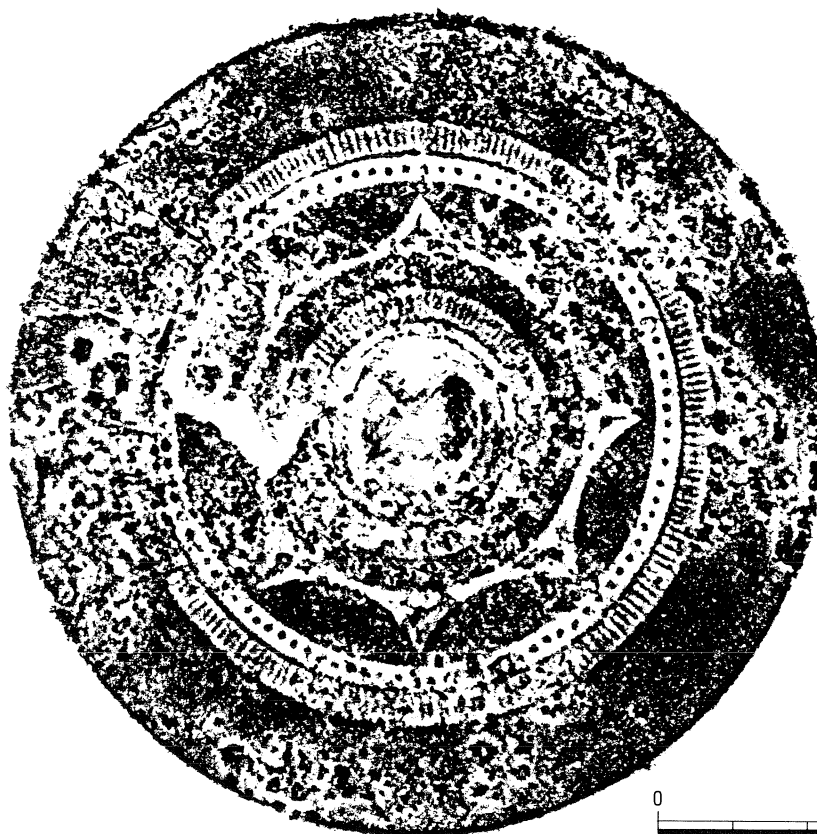
径1.8cm、鏡面からの高さ0.95cmである。鈕孔は断面がカマボコ形で幅4mm、高さ2mmを測り、鈕孔底部をおおよそ鏡背の地文部の高さに置いている。錆のためか、現状では鈕孔は貫通していないように見える。円座は認められない。

⑥内区主文様

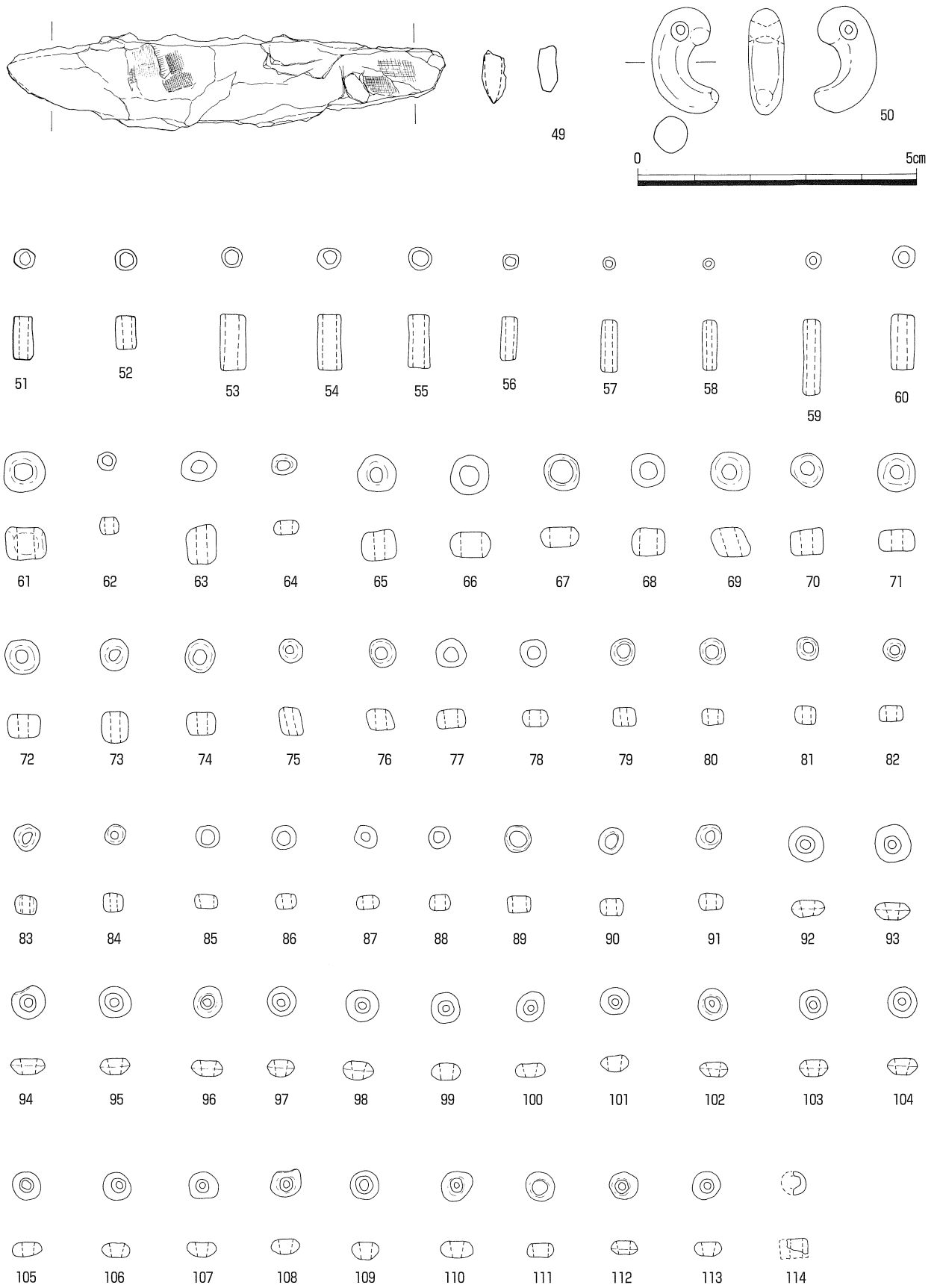
八花文が見られる。花文内は錆によって全体の様子は不明であるが、確認できる箇所からは花文ごとに単位文様が描かれているようである。鈕孔の延長は花文の頂点或は弧線の中央に位置していない。花文の頂点間は2.5cm、円頂素文帯から花文の頂点までの長さ0.8cmを測る。



48



第20図 5号墳出土鏡 (S=1/1 さぬき市郷土館蔵)



第21図 5号墳出土鉄刀子・勾玉・管玉・ガラス玉 (S=1/1 さぬき市郷土館蔵)

⑦内区外周部

内側に殊文帯、外側に櫛歯文帯となる。内区と外区は同じ高さで内区外周部が0.2～0.3cm低くなっている。

殊文帯は0.15cm程度の小型の殊文を密に配している。殊文間の距離は均等ではない。

⑧外区

内区との境から水平に0.5cm伸びた後、端部にかけて高さ0.2cmで立ち上がる。

⑨保管場所

平成20年（2008）現在、銅鏡はさぬき市郷土館で保管されている。

第2節 鉄刀子

①出土状況・現状

報告書によると鉄刀子は刃部を側石側へ、先端を東に向けて出土した。

②法量・特徴

現存長7.8cm、重量10.5gである。刃部は刃部長5.7cm、刃部最大幅1.3cm、刃部背0.3cmを測り、茎との境に刃部辺のみに関をもつ。刃部の背は茎部との境まで直線的で茎部は先端に向かって少しすぼまる。茎は刃部との境付近で幅1.45cm、厚さ0.3cm、端付近で幅0.9cm、厚さ0.25cmを測る。刀子全体に布痕が認められる。

平成20年（2008）現在、鉄刀子はさぬき市郷土館で保管されている。

第3節 勾玉、管玉、ガラス玉

①勾玉 1個

硬玉製である。淡緑色と白色が混ざり合い、透明感がある。稜線を残さず良く研磨されており、C字形を呈し、断面は円形である。全長1.9cm、胴部厚さ0.6cm、頭部厚さ0.75cmで、頭部はやや厚く曲線を描く。孔径は上端0.3cm、下端0.15cmを測る。穿孔は両面穿孔で赤色顔料の付着する箇所がある。昭和26年に出土した岩崎山4号墳出土品に法量が類似する。

平成20年（2008）現在、勾玉はさぬき市郷土館で保管されている。

②管玉

10点確認できる。小型品が多く、長さ、径ともにばらつきが見られる。長さ0.6～1.3cm、径0.2～0.45cm、孔径0.1～0.2cmである。長さの長いものが必ずしも径が大きいわけではなく、長さや径が対応していない点に多様さの要因がある。

色調も緑色を基本とするが微細な差異が指摘できる。深い緑色、淡い緑色、青味かった色など様々である。

外面や孔内には赤色顔料の付着した個体も多い。

津田湾古墳群では赤山古墳、岩崎山4号墳、野牛古墳で現存する管玉を確認できる。赤山古墳では長さ5～6cmの大型品が見られる。法量、色調にばらつきはどの古墳の管玉にも認められる。5号墳出土の管玉はこれら津田湾古墳群の現存する管玉の中では最も小型の部類に入る。平成20年（2008）現在、管玉はさぬき市郷土館で保管されている。

③ガラス小玉（第21図51～114）

岩崎山5号墳の調査記録によると石棺床面直上から4個、床面埋土から34個が出土したとある。しかし、現在さぬき市郷土館で保管されている総数は53個で記載より多い。

5号墳のガラス小玉は色調、形態から3タイプに分類できる。1タイプは濃青色を呈する大型のもので、1点のみの出土である（61）。側面の4方向に3～4mmの円形の面を有し、光沢をもつ。赤色顔料の付着は肉眼では確認できない。

2タイプは棗形、円筒状の形態で青色を呈する（62～88）。光沢は顕著には認められない。5号墳のガラス小玉では最も事例の多いタイプであるが3タイプに近似した形態もある。高さ0.3～0.7cm、幅0.3～0.6cmが多い。縦長のもの、高さが低く円柱のつぶれたものなどいくつかの形態に細分される。両端面の穿孔の径がほぼ同じで直線的な点が3タイプとの大きな相違点である。両端面は整形によって面をなすものと、面の不明瞭なものがある。外面には赤色顔料の付着が顕著に確認できる。

3タイプは緑色気味で、光沢と透明感をもつ（89～114）。長さ0.5～0.6cm、幅0.3cmで、2タイプに比べて形態差・法量差は少なく、均質な製品が多い。形態の特徴は側面が強く張る点で、最大幅部分に稜線をもつソロバン玉に似た事例も多く、滑石製の白玉に共通する。穿孔は両端の一方が幅広く、一方が狭い。広い方は穿孔面の角が丸みをおびているのに対して、狭い方は鋭利な角が残る。先端に向かってすぼまる工具を使用して穿孔されたと推察できる。また、2タイプに見られたような端部の面は確認できない。外面には赤色顔料の付着した例が認められる。

岩崎山火葬墓

第1章 掲載の概要について

岩崎山火葬墓はさぬき市津田町津田2205-1に所在する。

岩崎山火葬墓は古墳時代から後の遺構ではあるが、岩崎山山頂から南東に下った尾根傾斜面の、岩崎山古墳群からは近い場所に位置する。本書では岩崎山古墳群周辺の歴史をまとめる上で重要と考えられるためここに参考資料として掲載する。

第2章 調査の経緯

岩崎山火葬墓は民間土地開発に伴い平成13年10月に発見された。津田町教育委員会（当時）が調査主体となり、大川地区広域行政整備事務組合埋蔵文化財係が調査を担当した。調査期間は平成13年10月26日～11月6日の実動3日間である。

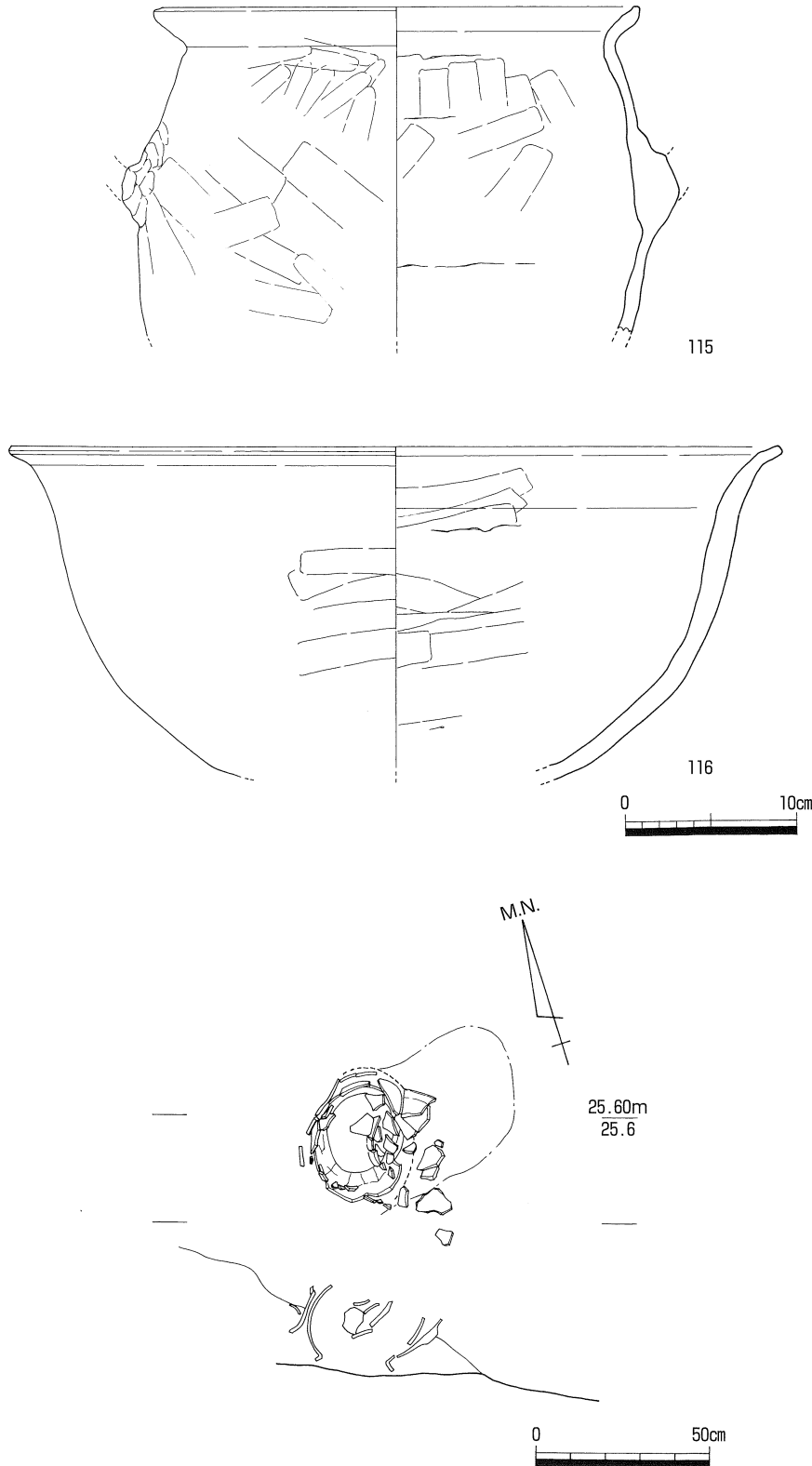
第3章 岩崎山火葬墓の概要

火葬墓は岩崎山1号墳の立地する岩崎山山頂から南東に尾根を下った標高26m付近の尾根斜面で発見された。事業予定地内には他に同様の遺構や遺物は認められず単独で所在する。

出土状況は土師質の甕と鉢の2個体の土器が重なるような状況で埋置されていた。上部を重機による掘削によって欠くが、甕を逆位に置き、この上に鉢を被せていた。土壙には石室のような施設は認められない。

甕形土器（第22図-115）

張りのない胴部から口縁部が短く外反する。胴部に把手が2ヶ所見られるが、両者とも打ち欠きにより欠損している。胴部下半は現存しない。内外面は一面にナデ調整が観察される。外面のナデは不整方向に認められ、器面は凹凸



第22図 岩崎山火葬墓出土遺物及び出土状況図 (S=1/4、1/20)

の目立つ粗い調整である。頸部直下から回転の横ナデが認められ口縁端部まで及ぶ。内面は不整方向のナデが見られ、器面は凹凸が目立つ。また、粘土紐の接合痕が一部観察される。頸部から口縁端部にかけては回転のナデが認められる。口縁端部は肥厚せず丸くおさめる。

法量は口径28cm、胴部最大幅30cmを測る大型品である。胎土は1～3mmの長石粒を多く含み、色調は浅黄橙色を呈する。器面に黒斑は認められない。

鉢形土器（第22図-116）

口径44.6cmの大型品である。器高は底部を欠損するため不明であるが、残存部で19cmあり、下端部は底部に向ってすぼまっていることから、底部は丸底で20cm程度の器高であったと推測される。胴部は張りがなく、外方に曲線を描きながら内湾し、口縁部は胴部からゆるく屈曲して外反する。残存状況は底部から上で、残存は1/2である。

内外面は全体にナデ調整が観察される。外面のナデは不整方向に認められ、器面は凹凸が目立つ粗い調整である。頸部から口縁部にかけて回転の横ナデが認められる。内面も不整方向のナデが見られ、器面は凹凸が目立つ。頸部から口縁端部にかけては回転のナデが認められる。口縁端部は丸くおさめられているが、端部内面に強いナデが施されるため、口縁端部内面は粘土を上方にややつまみ上げたような状況が窺える。

胎土は1～5mmの長石粒を多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。黒斑は外面に一部確認できる。

まとめ

第1章 岩崎山1号墳

第1節 墳丘について

①墳丘規模

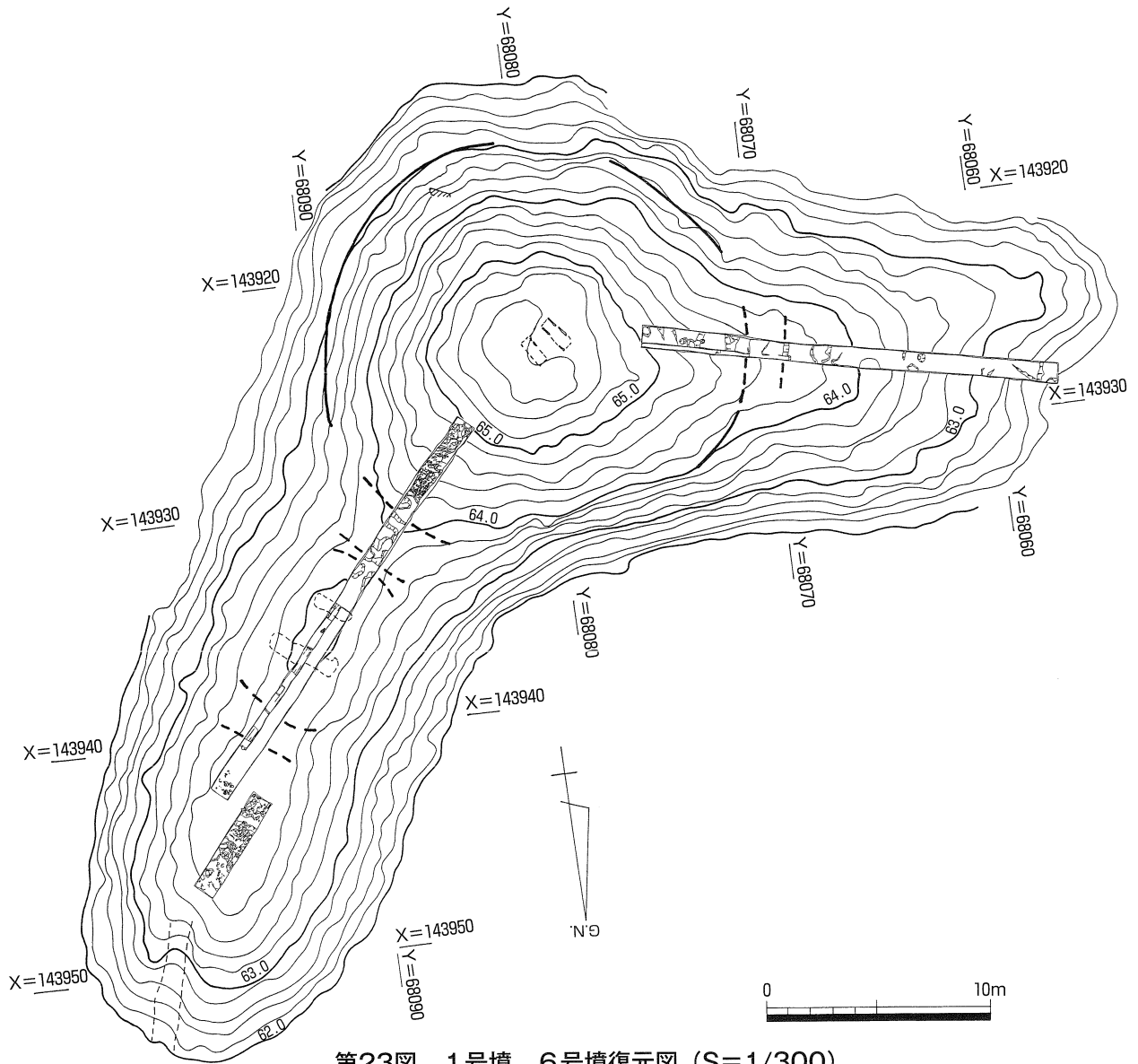
岩崎山1号墳はこれまで表面観察から円墳と前方後円墳の両説が指摘されてきた。また、墳丘は北東尾根側に掘切りが指摘されていたものの、その他の方角は墳丘がそのまま自然地形に続き墳丘の範囲が不明確であった。これまで昭和2年調査では直径15mの円墳、昭和26年調査では直径15mの円墳、平成14年調査では後円部径14m、前方部長12m、全長26mの前方後円墳が指摘されている。

今年の調査では墳丘から続く北東・北西の両尾根にトレンチを設定した。掘削の結果墳丘裾を示すような葺石は確認できなかったが、両トレンチともに掘切りを確認し、掘切り底から墳丘に立ち上がる傾斜変換点を確認した。これにより、墳形が円墳であることが確定した。ただし、傾斜変換点は明瞭ではなく、どのラインを採用するかによって墳丘規模に多少の差が生じる。次に多少の誤差を想定しつつ墳丘規模について検討したい。

トレンチ1は掘切り底から墳丘に立ち上がる地点に溝状の窪みがある。トレンチ内での検出のため、この窪みが自然に生じたのか、人為的なものかは判然としない。地山のラインからはこの窪みの西側に傾斜変換がみられ、墳丘裾の候補に挙げられる。この地点のベースは花崗岩風化土である。そして、この地点から緩く40cm立ち上がった地点でベースは岩盤となる。岩盤はトレンチ1の南西端まで続く。よって視覚的に見た場合、花崗岩風化土と岩盤の境が墳丘裾に見える。この地点をもう一つの候補とする。よって、トレンチ1で確認された墳丘裾はこの2つの地点間であり、誤差範囲は40cmである。

次にトレンチ2の掘切り底場はトレンチ1の底場よりも約1m高い。従って墳頂部までの傾斜は緩やかとなり傾斜変換点は不明瞭である。墳丘裾はトレンチ北東端から4.3～4.9m地点が想定され、誤差範囲は70cmである。

次に墳丘の中心を検討する。上記で確認された両トレンチの墳丘裾から垂直2等分線を引き、それが墳丘の中心付近のどの部分を通過するか検討したところ、ほぼ墳頂部の2基の箱式石棺の中心から北東の箱式石棺にかけて通過することが判明した。よって、墳丘の中心は定石どおり2基の箱式石棺の中間



第23図 1号墳、6号墳復元図 (S=1/300)

付近に設定することが可能である。

こうして導き出された墳丘の中心から両トレンチの墳丘裾を通過する正円を描くと墳丘規模は18~19mに復元される。

次にこの復元に対して地表面で観察される墳丘の傾斜変換点から検証を試みる。第23図の太線が地表面から想定される墳丘裾である。墳丘南東部が比較的視認しやすく、太線の箇所で若干のテラス状を呈する。上記の墳丘の中心から両トレンチの墳丘裾を通過する正円を描くと、ほぼこの太線の近辺を通過する。その誤差は最大で80cmであるが、多くの箇所では50cm内におさまる。よって、地表面観察からも上記の墳丘径が妥当なことが指摘できる。ただし、今回のトレンチが2ヶ所のみであること、地表面の観察には限界があることから、今回の数値は推定規模にとどまる。今回の調査では岩崎山1号墳は径18~19mの円墳であることが推測される。

墳丘高は墳丘裾が水平でないため、場所によって異なる。調査ではトレンチ1とトレンチ2の裾部では約1mの比高差が見られた。1トレンチの墳丘裾からは高さ2.4m、2トレンチからは1.4mを測る。

②墳丘の特徴・外表施設

これまでの津田湾古墳群の調査において、一つ山古墳、岩崎山4号墳は墳丘裾を水平に整形していることが判明し、鶉の部山古墳も東側外周段築以外は水平であることを確認していた。津田湾の古墳群は墳丘の丁寧な造作が指摘できるが、その一要素が墳丘裾を水平にすることであった。今回調査した岩崎山1号墳では墳丘北東尾根よりも標高の高い北西尾根を深い堀切りによって水平に造作する作業は行っておらず、結果として両尾根の堀切りの底場に1mの比高差が生じている。この点に周囲の墳丘裾に合わせるように深く尾根を掘り切った岩崎山4号墳との相違点が指摘できる。こうした特徴は墳丘築造の

簡略化であり、墳丘規模、古墳被葬者の階層性とも関わる可能性がある。

1号墳の墳丘築造の簡略化は外表施設にも認められる。トレンチ調査では葺石は全く確認できなかった。地表面でも地山とみられる岩盤の塊は点在しているが、葺石の可能性のある石材は皆無である。よって、元々葺石を使用していないことが指摘できる。トレンチ1の墳丘斜面は堆積土下で一面に岩盤が認められた。

埴輪は1号墳においてこれまで指摘されてこなかったが、今回の調査でその存在が確かめられた。原位置で出土した埴輪はなく、樹立場所は判然としないが、トレンチ1、2ともに出土したことから、比較的多くの埴輪が使用された可能性はある。

③埋葬施設の方位

埋葬施設は墳頂部に2基の箱式石棺が並列している。箱式石棺の長軸の方位はN-40°-Wである。津田湾古墳群では讃岐の前期古墳に多い東西方位が採用されず、畿内と共通する南北主軸が指摘されている(玉城1985)。しかし、厳密な南北方向ではなく、周辺の地形、墳丘主軸との関係の中で方位が決定されている例の多いことが判明しつつある。赤山古墳では刳抜式石棺は墳丘主軸に対して直交、平行の関係にあり、1号石棺がN-27°-E、2号石棺がN-124°-Eである。岩崎山古墳は墳丘主軸に直交して、N-29°-Eである。

岩崎山1号墳の方位はN-40°-Wで厳密な南北方位ではない。この方角は北東尾根の主軸から見れば、82°の関係にあり、北東尾根に直交していることがわかる。つまり、埋葬施設は岩崎山2~6号墳の立地する尾根を意識して方位が決定されていることが指摘できる。

④平野からの視覚

古瀬清秀氏は墳丘南側が自然地形と墳丘を区別することが困難であることから、南から仰ぎ見た場合に墳丘が大きく見える。それに対して、北側は急角度の自然傾斜面に続くことから、墳丘裾が直線的で円形でないことを指摘している。今回判明した墳丘裾から正円の墳丘を復元すると、墳丘北側は急角度の自然傾斜面となる。この地点は北東尾根と北西尾根の接点であり、今視認できる地形が本来のものか、山崩れなど後世の改変があったかは判然としないが、本来的な地形とすれば、墳形は箇所によって異なるいびつな形になる。

なお、埋葬施設の方位から見ると、北東尾根を意識していることがわかり、この方向に正面観のある

ことが指摘できる。

第2節 埴輪について

岩崎山1号墳の築造年代は石製模造品や武具から古墳時代中期頃が想定されてきた。今回の調査で年代を検証する材料として埴輪片が出土した。この節では埴輪から古墳の築造時期の検討を試み、また、形態的特徴から周辺の古墳との関わりを検討したい。

① 岩崎山1号墳の埴輪の特徴

まず、岩崎山1号墳の埴輪の特徴をまとめる。今回出土した埴輪は100点程度で、多くが小片である。よって、全体像を窺うことはできないが、突帯が5点、口縁部付近が想定される個体が1点、朝顔形埴輪の可能性が想定される個体が1点、壺形埴輪の頸部突帯の想定される個体が1点出土したことによりある程度の指摘は可能である。

まず、突帯からまとめよう。突帯は下端幅1.5cm、高さ2cm前後が多い。上端幅は0.5~0.7cmで細長く突出する形態を有する。先端はナデによって凹みが見られる。上下面はナデ調整されるが、上面は1条のゆるく凹むナデに対して、下面は2条の横ナデが多いのが特徴である。また、補充技法の事例が確認できる。補充技法とは胴部に貼り付けた粘土紐の上部や下部に粘土を足すことによって突帯の形状を整えるものであり(赤塚1979)、第7図-1では断面に接合線が、剥離面には粘土紐の接合痕が明瞭に観察される。

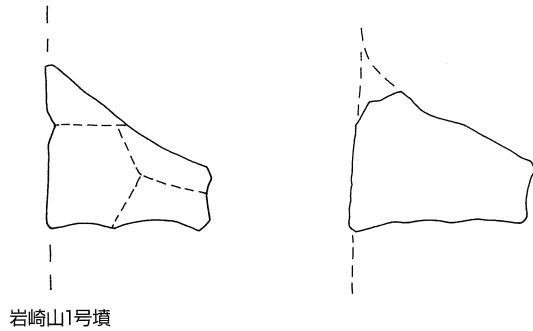
突帯貼付け時に基準として胴部に施される方形刺突痕は認められない。

胴部は高さ、径を示す資料は少なく、唯一第7図-1が胴径29.4cmである。厚さは0.7~0.8cmの薄手である。内外面の調整は摩滅によって明瞭に観察できる個体はないが、かろうじて内面にケズリの観察される例がある。

口縁部は先端が判然としないが、外面はつよい外反する曲線ライン、内面は屈曲点を認め直線気味に外方に広がる特徴を有する。二重口縁の可能性があり、円筒埴輪や壺形の口縁部になる可能性がある。

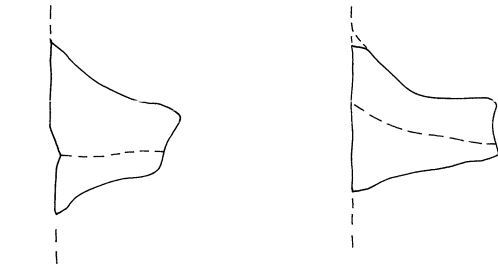
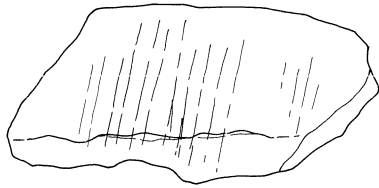
朝顔形埴輪が想定される個体は1点ある。最上の突帯から直線的に外反して口縁部に至る。端部は面をなす。最上の突帯の先端は剥離が認められ、補充技法の可能性があり、本来は長い突帯であった可能性が推測される。

壺形埴輪の頸部突帯の可能性のある個体は小片でそれと断定できないが、他の突帯と比較して小さく、断面形が異なる。



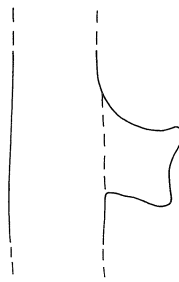
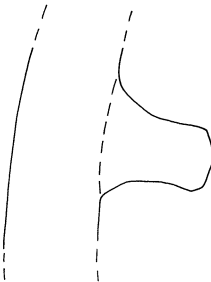
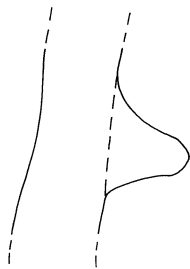
岩崎山1号墳

- ・突帯幅 1.5~2.2cm
- ・突帯高 1.9~2.35cm
- ・突帯上端幅 0.6~0.8cm
- ・補充技法有り
(断面・内面の接合痕)



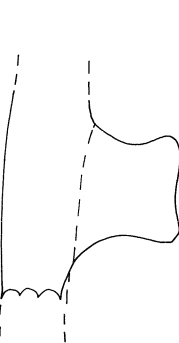
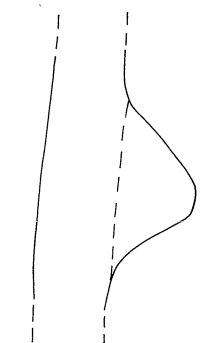
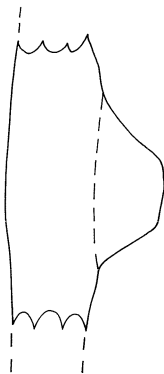
高松茶臼山古墳 (香川県立ミュージアム蔵)

- ・突帯幅 1.8~2.6cm
- ・突帯高 1.4~2.4cm
- ・突帯上端幅 0.4~1.0cm
- ・補充技法有り
(断面・内面の接合痕)



岩崎山4号墳

- ・突帯幅 1.4~2.7cm
- ・突帯高 0.7~1.3cm
- ・突帯上端幅 0.4~1.2cm



富田茶臼山古墳 (さぬき市歴史民俗資料館蔵)

- ・突帯幅 1.0~2.8cm
- ・突帯高 0.4~1.6cm
- ・突帯上端幅 0.5~1.8cm



第24図 円筒埴輪突帯の比較 (S=1/1)

他に高杯の脚部接合部の可能性がある小片が1個あるが、胎土が他の埴輪と同じであり、埴輪片である可能性も十分に想定され、詳細は不明である。

色調は全体的に共通しており（浅黄橙色）、胎土（0.2～0.5cmの砂粒を比較的多く含む）も共通しており、全体数は少ないものの、同じ場所で一系の集団によって製作された可能性が推測される。

以上が岩崎山1号墳出土埴輪の概要である。突出した突帯、二重口縁の可能性を推測させる口縁部片からは、県内でも古い段階の埴輪類の可能性はある。つまり、これまで古墳時代中期とされていた年代に対して、埴輪の様相からは時期を遡らせる必要が想定される。

②富田茶臼山古墳出土埴輪との比較

上記から岩崎山1号墳の時期が古くなり、富田茶臼山古墳よりも時期的に古いことが判明してきたが、確認として富田茶臼山古墳の埴輪との比較を行っておきたい。なお、富田茶臼山古墳出土埴輪は國木健司氏の記載があり、以下の内容は氏の指摘を参照して作成した。

埴輪の種類は円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある。円筒埴輪底径は18～25cmで上部に向かって外開きとなる。突帯は下端部幅1.6～2.4cm、高さ1cm前後である。突帯の形態について國木氏は断面台形のA種、上端部が0.6cm前後と狭く断面三角形に近いB種、上端部が1.3cm前後と幅広い断面正方形に近いC種に分類し、分類ごとに色調、胎土に相違が認められ、各々が製作地を異としていた可能性を想定している。

調整方法は外面が1次調整縦ハケ、二次調整横ハケ、内面が縦、横のナデである。最上突帯から口縁部上端までは高さ11.5cmの事例がある。透孔は円形である。

富田茶臼山古墳と岩崎山1号墳の埴輪を比較すると、差異は明確に指摘できる。特に突帯の突出度や形態は顕著である。両者の属性からは、岩崎山1号墳の方が古い特徴を有していることが指摘でき、岩崎山1号墳の埴輪は明らかに富田茶臼山古墳の埴輪よりも古いことが指摘できよう。

③岩崎山4号墳出土埴輪との比較

以上から、時期的に並行する可能性のあった岩崎山1号墳が富田茶臼山古墳に先行する古墳であることが確認できた。次に時期、埴輪の特徴を明確にするためにさらに他の古墳の出土埴輪との比較を試みる。その中で岩崎山4号墳は1号墳と同じ尾根上に造営された古墳である。

岩崎山4号墳は円筒埴輪、朝顔形埴輪もしくは壺形埴輪、形象埴輪がある。円筒埴輪の胴部径は30cm前後で規模が類似し、稀に40cm前後の例がある。

突帯の形態は台形、箱形が多く、若干三角形の例が認められる。突帯外面はつよいナデによって凹み、稜線の明瞭な例が多いが、断面台形のタイプも確認できる。胴部の突帯接合面は間隔を置いて方形の刺突痕の認められる個体が多い。

口縁部は最上の突帯から外反して約6cmで上端に至る例が多い。外面調整は縦ハケ、横ハケ、ナデが、内面調整はケズリ、ハケ、ナデが認められ、最上突帯から口縁部にかけては、内外面ともにハケ、ナデ調整されている。特に外面は丁寧なナデによってハケを消しているのが特徴である。

透孔は方形、三角形、半円？形など様々で、突帯間に3個以上穿たれていた可能性がつよい。

色調は浅黄橙色が多く、橙色が少し見られる。橙色と浅黄橙色の埴輪は内面調整など製作技法に相違点が認められる。

岩崎山4号墳と岩崎山1号墳の円筒埴輪を比較すると、色調・胎土はほぼ類似するものの、突帯の形態は大きく異なる。特に突帯の高さは岩崎山4号墳が1cm前後に対して、1号墳は2cm前後と、岩崎山1号墳の方が突出する。また、4号墳にある突帯接合面の方形刺突は数が少なく断定はできないものの1号墳では認められない。さらに、口縁部は1号墳で可能性を指摘した二重口縁は4号墳では認められない。4号墳ではほとんどの円筒埴輪外面に赤色顔料を塗布していたが、1号墳では赤色顔料は確認できなかった。

このように、同一尾根にある1号墳と4号墳は埴輪の特徴において相違点の目立つことが指摘できる。時期的関係は、これまで石製模造品を有する1号墳の方が新しく位置づけられていたが、埴輪の特徴を見ると、反対に1号墳に古い特徴が指摘できる。1号墳出土の埴輪は少なく、全体像が判然としない中で、ごく一部の特徴をもって時期的関係を検討することは危険であるが、突帯を中心とした限られた現状の資料からは1号墳の方が4号墳よりも古い円筒埴輪の特徴を有する可能性が想定される。

④高松茶臼山古墳出土埴輪との比較

では、1号墳の埴輪に類似例はあるのだろうか。県内の出土埴輪を概観した結果、高松市高松茶臼山古墳出土の埴輪が比較的共通点の多いことが想定された。

高松茶臼山古墳の埴輪は大久保徹也氏、蔵本晋司

氏の報告がある。今回1号墳の比較調査として高松茶臼山古墳出土埴輪の観察を行ない、岩崎山1号墳で見られた補充技法を確認した。

まず突帯は高さ2cm以上の例が多く、1号墳と類似する。突帯の形態は数タイプあるが、その中で下面が水平気味に突出するタイプがある。同様の形態は1号墳にも確認できる。また、突帯外面のナデ調整は下面に2条のナデによる凹みが両者ともに確認できる。類例は大分県小熊山古墳においても観察される。さらに、補充技法が両古墳で確認できる。赤塚次郎氏は補充技法がごくかぎられた時期に認められ、第1段階の埴輪の特徴であることを指摘している。また、事例として西殿塚古墳の埴輪を挙げている(赤塚1979)。

口縁部は高松茶臼山古墳が受口状口縁(二重口縁)を呈する。1号墳は小片で断定はできないが、同様の受口状口縁になる可能性がある。

以上から、1号墳の突帯の形態、製作技法は高松茶臼山古墳出土の突帯と類似していることが指摘できる。高松茶臼山古墳の埴輪は東四国地域における導入期の円筒埴輪であることが指摘されており(蔵本2007)、1号墳も同時期の埴輪である可能性がある。ただ問題となるのが、これまで時期の根拠となっていた石製模造品と武具の存在である。築造時期と副葬時期が異なる可能性、遺物の想定年代が誤っている可能性など、いくつかの可能性が推察される。しかし、1号墳で検討した円筒埴輪の資料数が少なく全体像が把握できていない現段階では、高松茶臼山古墳と同時期の埴輪であると断定することはできない。古い段階の特徴をもち、高松茶臼山古墳出土埴輪に類似する程度に指摘を留めておきたい。

⑤まとめ

以上をまとめると、まず、1号墳の埴輪の特徴からは富田茶臼山古墳よりも古く位置づけることができ、これまでの指摘から想定された時期的並行は否定された。そして、同じ尾根上に所在する岩崎山4号墳との比較からは、これまで4号墳の方が古く評価されてきたが、埴輪の検討からは1号墳の方が古くなる可能性が出てきた。現段階では時期的関係を断定することはできないが、時期的に近いことは間違いなく、立地、時期において近接した両者において埴輪の特徴が大きく異なる点は重要である。1号墳の類例を県内の埴輪において検討したところ、高松茶臼山古墳出土埴輪に類例が認められた。突帯の形態、製作技法は極めて密接な関係が窺える。ただ

し、時期の特定に関しては、埴輪の一部分の類似であるため断定は避け、現段階では類似するという指摘に留めたい。

第2章 岩崎山6号墳

第1節 墳丘について

岩崎山6号墳は2基の埋葬施設を確認したことにより、新しく発見された古墳である。1号墳の墳丘と北東尾根の境はつよくくびれていたことから、堀切りの可能性が指摘されていた(古瀬2002)。一方、伐採によって堀切りが想定される地点からさらに9~10m北東の尾根両斜面に凹みがみられ、この地点も堀切りになる可能性が推測された。トレンチ調査の結果、この2ヶ所から堀切りが確認され、さらに2つの堀切りの区画の中心付近に2基の埋葬施設を確認することによって古墳として認識されるに至った。

2基の埋葬施設はサブトレンチや現状の観察によって安山岩の蓋石の存在を確認した。埋葬施設の規模は掘削によらず、ピンポールを用いた硬度の確認により、蓋石の範囲を把握した。埋葬施設長軸の中心は2基ともにトレンチ南東壁付近でほぼ共通した。トレンチ南東壁は北東尾根の主軸上に相当することから、尾根主軸を基準にそれに直交し、そして、左右対称になるように埋葬施設が設定された可能性が推測される。

墳丘は、1号墳の堀切りの外側の肩か、或はその地点から北東に0.5mがテラスとなりその先に地形の立ち上がりが認められることから、地形の立ち上がりの地点か、いずれかに墳丘裾が想定される。北東側は浅い堀切りの底場から地形の立ち上がる箇所に墳丘裾を想定する。この両地点の距離は7~7.5mであり、墳丘規模は7~7.5mの円墳の可能性がある。しかし、コンターラインは明瞭な正円の墳丘ラインを示さず、楕円形の形状か、或は明瞭な墳丘を整形せず、堀切りによる区画に留めた可能性がある。

墳丘裾から墳丘の中心を復元すると2基の埋葬施設の間位置することから、埋葬施設は墳丘の中心の両サイドに設定されたことが指摘できる。

なお、墳丘上は地山上に堆積土が見られる。埋葬施設はこの堆積土を切っているが、一部のみの確認であるため、盗掘孔の可能性もある。よって、この堆積土が封土であるか、後世の堆積土であるかは今後の課題である。

埋葬施設

古墳名	墳形	形式	方位	内法長 (m)	内法幅 (m)	内法高 (m)	蓋石長 (m)	石材	床面	備考
岩崎山1号墳西棺	円墳	箱式石棺	N-20--W	1.5	0.54	0.3	-	安山岩	粘土	
岩崎山1号墳東棺	円墳	箱式石棺	N-20--W	1.32	0.35~0.47	0.23	-	安山岩	粘土	
岩崎山4号墳	前方後円墳	竪穴式石槨	N-29--E	3.11	1.0	0.58	3.48	安山岩 蓋石凝灰岩	粘土・礫	
岩崎山5号墳	なし	箱式石棺	N-81--W	(1.85)	0.2~0.4	0.2	(1.98)	安山岩	粘土	床面赤色顔料塗布
岩崎山6号墳1号棺	円墳	不明	N-55--W	-	-	-	1.8	安山岩	-	
岩崎山6号墳2号棺	円墳	不明	N-55--W	-	-	-	3.15	安山岩	-	
龍王山古墳	円墳	竪穴式石槨	N-4.5--W	5.9	0.75~0.8	0.7~0.75	-	安山岩 蓋石の一部に 花崗岩	-	床面に朱の痕跡
北羽立古墳	前方後円墳	箱式石棺	-	-	-	-	-	-	-	
吉見弁天山古墳	円墳	箱式石棺	-	1.5	0.7	-	-	安山岩	粘土	
野牛古墳	不明	箱式石棺	N-15--W	1.64	0.31	0.25	(0.9)	安山岩		側・端石内面、 床面一部に赤色 顔料塗布
泉聖天古墳	不明	箱式石棺	N-41--E	2.4	0.4	3.2~3.5	-	安山岩	粘土	

剝抜式石棺

古墳名	墳形	方位	外法長 (cm)	外法幅 (cm)	外法高 (cm)	内法長 (m)	内法幅 (m)	内法高 (m)	石材	備考
岩崎山4号墳	前方後円墳	N-29--E	2.54	0.78	0.82	2.04	0.52	0.52	火山産凝灰岩	石枕が両端につく
赤山古墳1号石棺	前方後円墳	N-27--E	2.5	0.76	0.78	2.17	0.48	2.49	火山産凝灰岩	内部に赤色顔料
赤山古墳2号石棺	前方後円墳	N-59.5--W	2.26	0.64	0.3~0.37	-	-	0.46	火山産凝灰岩	内部に赤色顔料

表1 津田湾古墳群 埋葬施設

第2節 埋葬施設について

岩崎山6号墳では2基の埋葬施設が尾根に直交して認められる。方位はN-55°-Wである。2基の関係は墳丘の中心の両サイドに位置し、尾根主軸に対称に全長が設定されている。2基の距離は1.5mである。両石棺ともにサブトレンチにおいて墓壙或は盗掘穴の可能性のある掘り込みを検出し、また、ピンポールによる石の反応から蓋石の範囲を調べた。

埋葬施設1（南西側）は蓋石の全長1.8m、幅0.5~0.7m、埋葬施設2（北東側）は蓋石の全長3.15m、幅0.7~0.9mである。

今回確認したのは蓋石であるため、埋葬施設の種類は不明である。法量は埋葬施設1と埋葬施設2では大きな差異がある。そこで、法量から埋葬施設を推測するため、表1に津田湾古墳群で判明している埋葬施設を集成した。これによると、箱式石棺は泉聖天古墳が2.4mとやや長いものの、他は1.5m前後から2mにかけての規模である。一方、竪穴式石室は3m以上を測る。赤山古墳は刳拔式石棺の規模を見ると2.5m前後であり、外側の土壙は3m前後が推測される。このように箱式石棺と竪穴式石室では規模に差異が認められる。岩崎山6号墳の埋葬施設は蓋石の範囲であり、埋葬施設の全長はそれよりも小さいことが想定される。それを考慮した上で、埋葬施設1は全長1.8mであることから箱式石棺、埋葬施設2は全長3.15mであることから竪穴式石室になる可能性が推測される。しかし、竪穴式石室は岩崎山4号墳、龍王山古墳など比較的規模の大きな前方後円墳、円墳に認められる。岩崎山6号墳は小規模で明瞭な墳形を有していない古墳である。このような古墳が竪穴式石室であると想定し難いが、法量からはその可能性があることを指摘したい。

第3章 岩崎山2号墳

第1節 墳丘について

岩崎山2号墳は1号墳のある岩崎山頂上から北東に約70m下った尾根上の傾斜変換地点にある。

現状で墳頂部は平坦となり、墳丘形態は不明瞭である。墳丘斜面には途中テラスがあり、このテラスが墳丘東-北-西側にかけて墳丘を取巻くように認められる。また、尾根側は溝状にくびれた場所があり、古墳を自然地形から区画する堀切りの可能性が想定された。

トレンチ確認調査の結果、トレンチ北西において

古墳を自然地形から区画する堀切を検出した。堀切りの底場は標高52.08~52.2mである。墳丘斜面のテラス部は地点により相違するが、約51.6mであり、堀切り底場との高低差は1m以内である。よって、墳丘はトレンチ内で確認された墳丘裾から地表面で観察されるテラス部を結んだ範囲であることが推測される。今回、確認調査によって墳丘裾の判明した箇所はトレンチ内の1点のみで、他の様子は不明であり、正確な墳丘の様子は今後の課題ではあるが、地表面観察を交えた状況からは、径13mの円墳の可能性が推測される。現状の墳丘高は1.2mである。

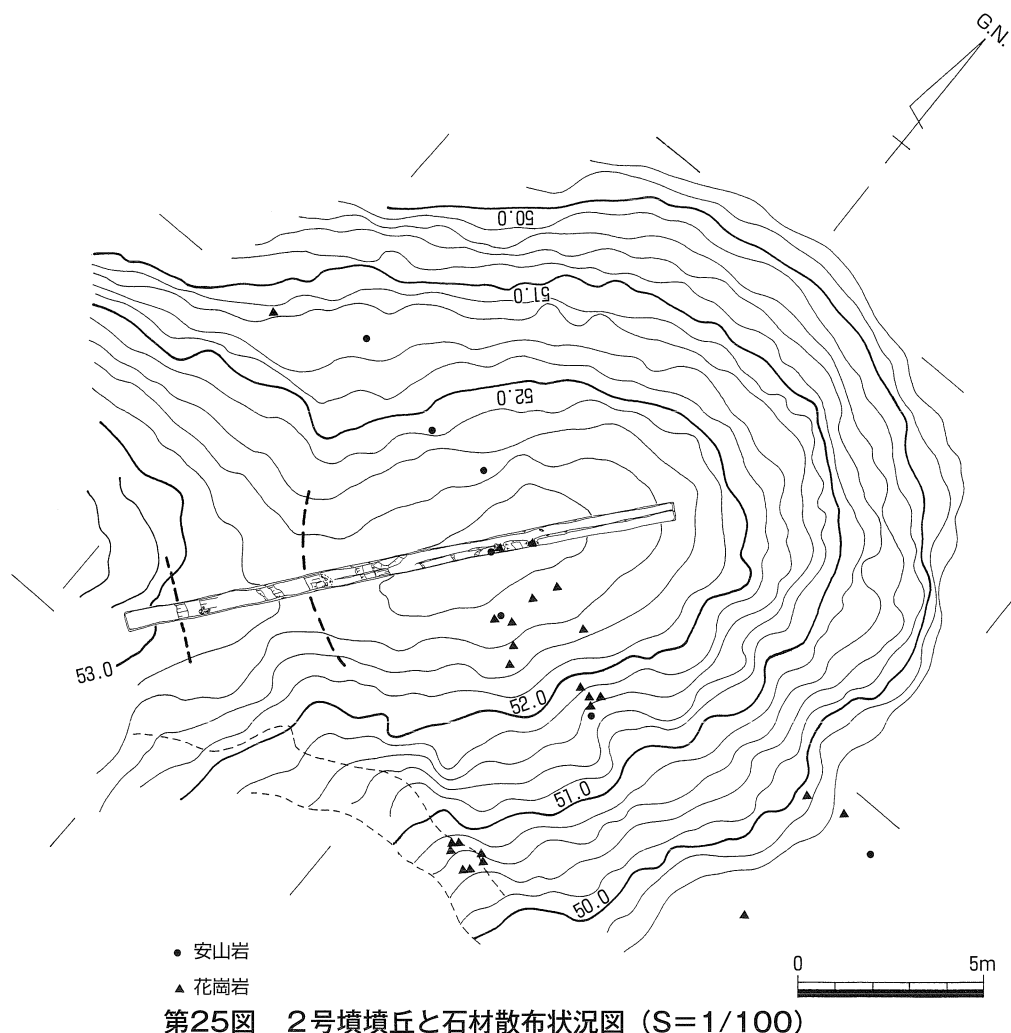
墳丘は北東方向（N-40°-E）を主軸に長い楕円形を呈する。墳丘斜面には花崗岩塊、安山岩が散布するが、トレンチ調査では葺石は確認できなかった。

墳丘構造は堀切りから墳丘の立ち上がりにかけて花崗風化土であり、地山整形によって墳丘を構築している。一方、堀切りから墳頂部に立ち上がった花崗風化土の墳丘ラインは尾根先端に向かって傾斜して下る。この傾斜面に盛土によって墳丘を築造している。岩崎山1号墳、岩崎山4号墳は墳丘のほとんどを地山整形して構築しており、墳丘構築方法に相違点が指摘できる。

盛土はしまりのある灰白色と明黄褐色の土を交互に厚さ0.3~0.7cmに積み重ねた版築技法が使用されている。丁寧な版築技法の見られるのは、墳丘の中心付近と、尾根端の墳丘裾付近である。その間は花崗バイラン土の混ざったしまりの悪い土が墳丘の中心に向かって傾斜して下っている層などが観察される。部分的な観察のため断定はできないが、墳丘裾付近に土堤状盛土を造り、土堤内を充填しながら盛土を行っていった可能性がある。

埋葬施設はトレンチ内では検出できなかった。ただ、堆積土に花崗岩塊、安山岩板石の混ざっている状況が確認でき、墳頂部から墳丘斜面にかけて同様の石材が多く散布していることから、これらが破壊された埋葬施設の石材となる可能性はある。墳頂部が現状で平坦であること、堀切りの埋土から後世の遺物が出土していることから埋葬施設が既に破壊されている可能性はある。埋葬施設の様子は今後の課題である。

古墳に伴う遺物は皆無であった。よって、古墳の築造時期は不明である。



第4章 岩崎山4号墳

第1節 線刻絵画埴輪について

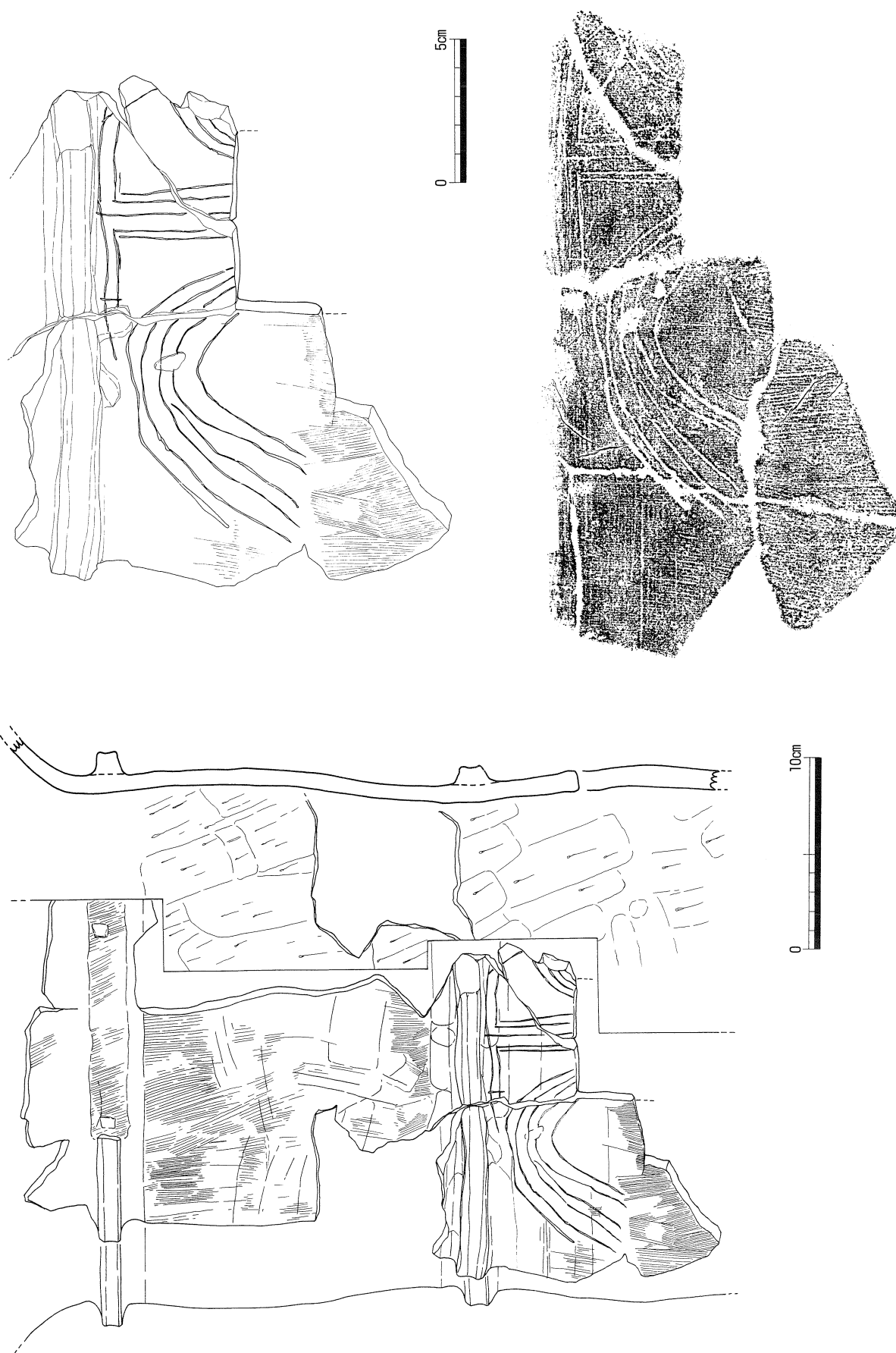
平成19年度調査において後円部後方に設定したトレンチ2から線刻絵画の円筒埴輪が出土した。本節では線刻絵画の内容について検討を行う。

線刻絵画は径28.4cmの円筒埴輪胴部に認められる(平成19年度報告書遺物番号66)。最上の突帯から下に2番目の突帯と3番目の突帯の間に描かれている。円筒埴輪の全長が不明であるため、推測の域は出ないが、円筒埴輪の中心付近に線刻された可能性がある。線刻は方形の透孔の上辺に透孔の主軸に対してほぼ対称に描かれている。透孔主軸の上辺に縦5条、横2条の「T」字形を配する。一見左右対称であるが、詳細に観察すると、左側の横線は横線を区切る縦線を入れているのに対して、右側は縦線が認められない。また、右側では横線端から右下に1本の線を延ばすが、左側では横線をそのまま延ばしており、下方におりていない。「T」字形の線刻の外側は透孔の上辺隅部付近から波状に数条の束に

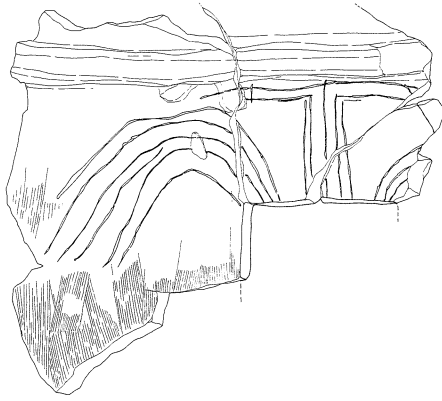
なった線刻を左右対称に施す。左側は全体像がわかる。左側は6条の束が見られる。ほとんどは透孔から線刻されるが、確実に1本は途中から束に加わっている。右側は破損のため全形は解らないが、透孔からは4本の束が線刻されている。これらの線刻は赤色顔料が塗られる前に施されている。

さて、この線刻絵画の内容であるが、左右対称に波状に描かれた例としては人物画がある。第27図は弥生時代から古墳時代における人物画の類例である。人物画と比較して当例に差異が指摘できるのは、目が表現されていないこと、目の下の波状の表現がないことである。

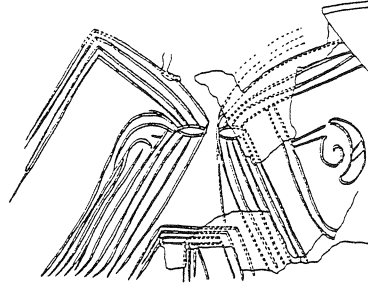
次に人物画では口の部分に「T」字が描かれている。注目すべきはこのT字の横線からさらに斜め下方に向かって線刻が見られることである。岩崎山4号墳の例でもT字の横線の外側には斜め下方に向う線刻が同様に確認される。このモチーフは髭という意見や顔面装飾という意見があり(説楽1990、辰巳1992)、岩崎山4号墳も同様の意図が推測される。しかし、ここで問題となるのが位置である。人物画



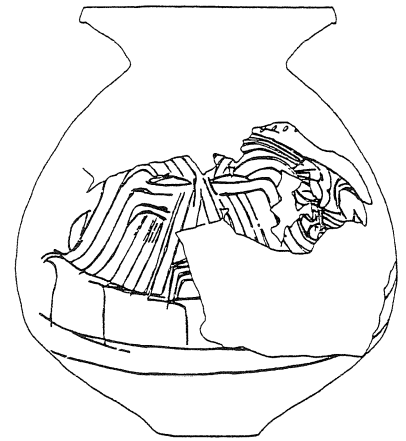
第26図 平成19年度報告書掲載遺物番号66 (S=1/3)



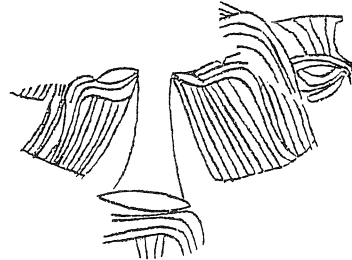
1. 香川・岩崎山4号墳



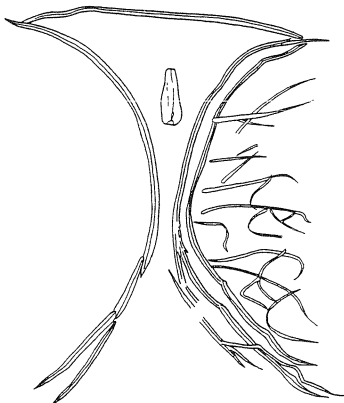
2. 群馬・下郷天神塚古墳



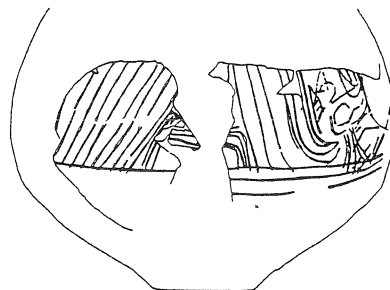
3. 岐阜・今宿遺跡



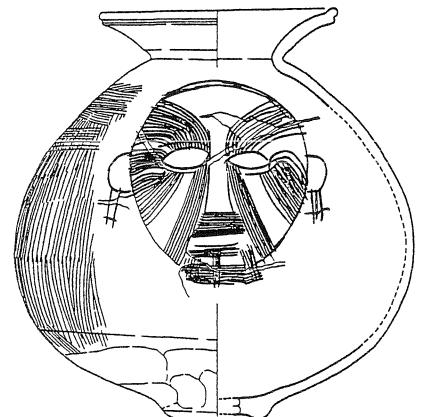
4. 岐阜・荒尾南遺跡



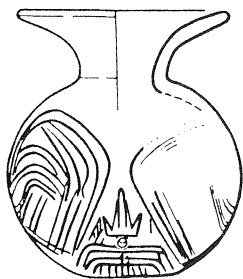
5. 京都・寺戸大塚古墳



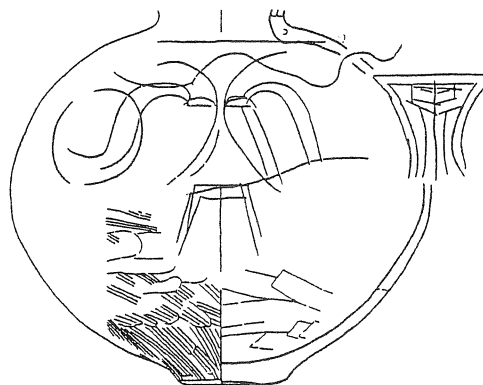
6. 岐阜・今宿遺跡



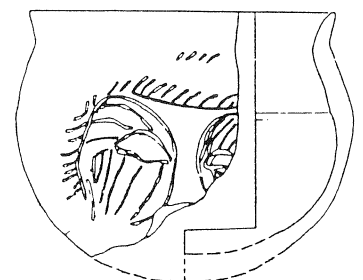
7. 愛知・亀塚遺跡



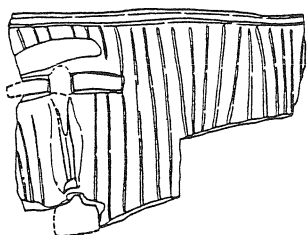
8. 静岡・栗原遺跡



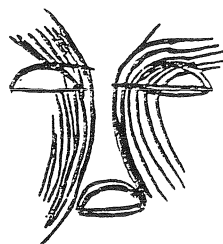
9. 茨城・曲松遺跡



10. 岡山・一倉遺跡



11. 栃木・上神主狐塚古墳



12. 岡山・上東遺跡



13. 香川・仙遊遺跡

第27図 人物、線刻絵画の事例

の多くが口の部分にこのモチーフが位置するに対して、岩崎山4号墳では顔面と想定すれば額の位置になる。口に相当する部分に透孔があるために上に描かざるを得なかった可能性は想定できるが、顔の表現と見た場合岩崎山4号墳の絵画に違和感を持つのはまさにその点であろう。前述した目の表現の欠如は静岡県栗原遺跡に類例が認められるが、これも人物画として違和感を持つ点である。

このように岩崎山4号墳埴輪の線刻絵画は要素的には人物画の可能性のあるものの、人物画としては欠如する要素も多い。この点に関しては人物画が極度にデフォルメされた可能性を想定したい。図5は寺戸大塚古墳埴輪の線刻絵画である。辰巳氏によって人物画として指摘されているが、岩崎山4号墳も同様に究極にまで人面をデフォルメした様子が窺える。よって、岩崎山4号墳の線刻絵画に関しても人物画が究極にデフォルメされたもう一つの形として評価することはできないだろうか。

なお、線刻絵画の出土した場所は後円部後方の墳丘裾部である。この地点は古墳を尾根から切り離れた堀切りである。線刻絵画埴輪を出土したトレンチ2の墳丘裾部には線刻絵画埴輪の破片と考えられる埴輪片が集中して出土しており、比較的近い場所から転落してきた可能性が強い。つまり、この線刻絵画埴輪は尾根と古墳を区画する重要な場所に樹立されていた可能性がある。辰巳氏はデフォルメされた埴輪について墳丘への邪霊の進入を防ぐ辟邪・除災の意図を想定しているが、岩崎山4号墳の線刻絵画埴輪も同様の意図があったものと解釈したい。

<参考文献>

- ・辰巳和弘1992『埴輪と絵画の古代学』白水社
- ・辰巳和弘2001「円筒埴輪の線刻絵画考」
『寺戸大塚古墳の研究I』
財団法人向日市埋蔵文化財センター

第5章 岩崎山5号墳

第1節 ガラス玉について

ガラス小玉は1個のみの1タイプの例外を除いて、2タイプと3タイプがほぼ同じ比率で認められる。

2タイプと3タイプは穿孔の様子や形状から異なる製作技法が推測される。2タイプは穿孔幅が同じであることから、幅の同じ棒状のものを利用しているのに対して、3タイプは一方の穿孔部が幅広く端部は外側に広がっているのに対して、一方は狭く、広がりには認められない。よって先端に向ってすばま

る棒状の工具が使用されていると推測される。形態は棗状を呈する2タイプに対して、3タイプは最大幅に稜線を有するソロバン玉形の事例が多い。2タイプの上下両端は面をなす例が多いが3タイプは認められない。

このように両タイプは様々な点で違いが見られる。光沢をもつ2タイプやソロバン玉形にならない3タイプなど両者の中間的な特徴を持つものもあるが、穿孔の様子などを見る限り、異なる製作技法からなる2者が想定される。

さて、この2タイプについて他の津田湾古墳群から出土した事例を比較してみると、2タイプは赤山古墳、一つ山古墳、岩崎山4号墳、野牛古墳など広く類例の認められるものであるが、3タイプは他の古墳に類例を確認できず、岩崎山5号墳の特徴といえる。なお、3タイプの形態はソロバン形を呈するという点からは、野牛古墳で出土しているような滑石製白玉との共通点が指摘できる。

第6章 岩崎山火葬墓

第1節 岩崎山火葬墓について

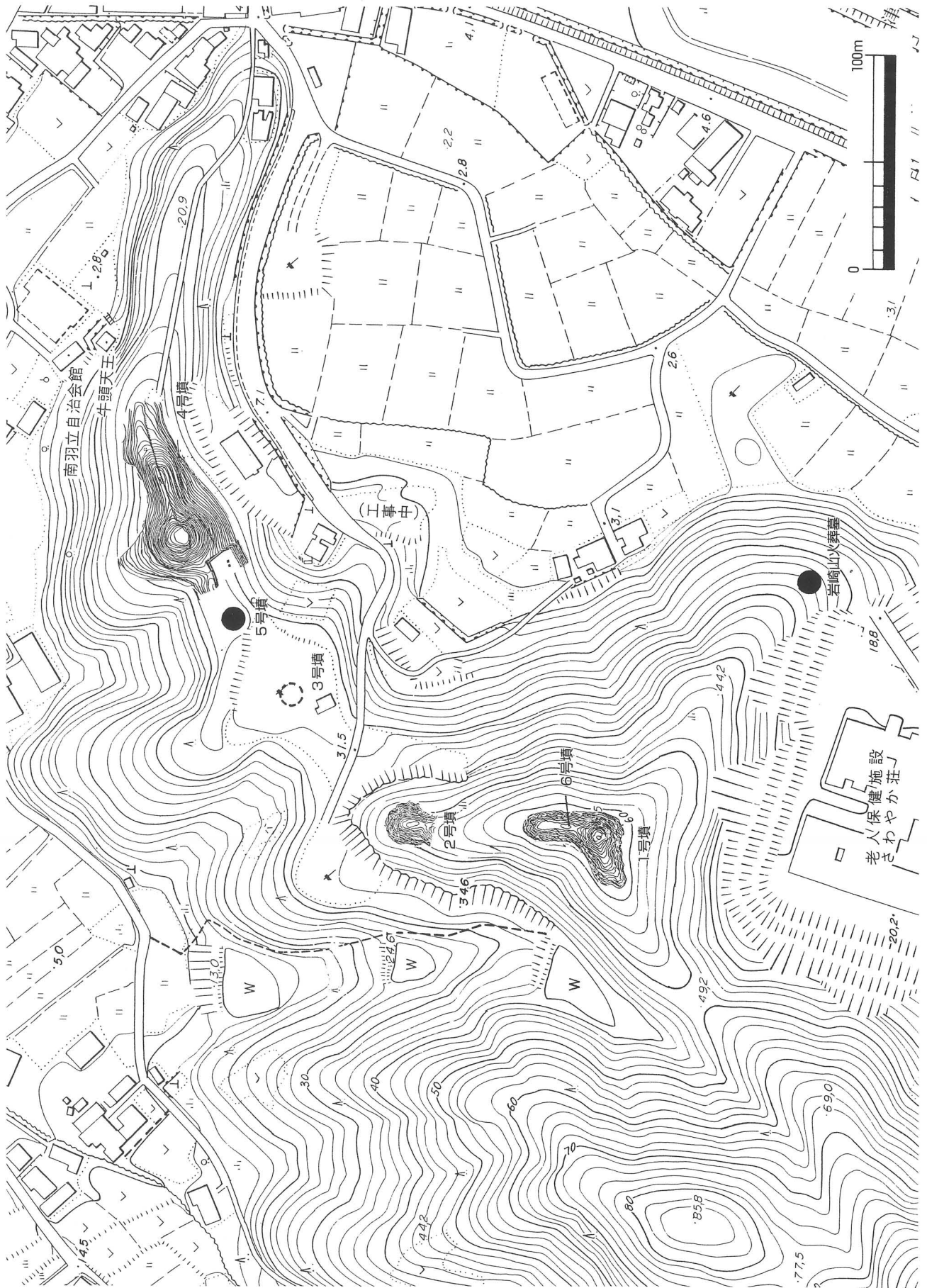
岩崎山火葬墓は甕を逆位に伏せて、その上に大型の鉢を伏せるといった構造である。甕を伏せた火葬墓の類例として丸亀市大原古墓があり、土師器甕を逆位に被せて三重に蔵骨器を被覆するといった丁寧な構造である。

蔵骨器として使用された土器は大型の甕、鉢の土師質土器である。県内の蔵骨器は須恵器の短頸壺が多く、当例のような土師質土器は上記の大原古墓があるが、類例は多くない。岩崎山火葬墓の甕と鉢は製作方法に類似性が指摘できる。また、形態的特徴は他の集落遺跡では顕著には確認できない形態である。煮炊きなどの一次的利用の痕跡はない。形態は蔵骨器に多い短頸壺ではないが、調整方法の粗雑さ、同形態の類例の少なさから推測すれば、火葬墓に使用するために製作された専用棺の可能性もある。なお、本火葬墓の甕は2つの把手を打ち欠いている。当時の葬送祭祀を検討する上で興味深い資料といえる。

時期は土師器甕、鉢から10世紀頃が推測される。

第7章 岩崎山古墳群について

岩崎山古墳群は今回確認された古墳を合わせて6基の古墳が確認されているが、昭和初め頃の開墾に



第28図 岩崎山古墳群及び岩崎火葬墓の位置 (S=1/2500)

古墳名	墳形	規模 (m)	埋葬施設	葺石	埴輪	遺物	備考
岩崎山1号墳	円墳	径約18~19	箱式石棺2基	×	○ 壺形埴輪? 朝顔形埴輪 筒埴輪	太刀2 劍1 鎧1 滑石製刀子3 滑石製鎌2 櫛2 有孔貝製品4 鉄鑿1 斧頭2 滑石製手斧1 黒色土器 (古代)	昭和2年の紛失した遺物に石製刀子3がある。
岩崎山2号墳	円墳	径約13	箱式石棺?	×	-	土師器 (中世)	盛土 (版築)
岩崎山3号墳	円墳	不明	不明	不明 (葺石散乱の記録あり)	-	勾玉3 管玉2	昭和47年以降に消滅
岩崎山4号墳	前方後円墳	全長61.8	竪穴式石室	○	円筒埴輪 朝顔形埴輪 または壺形埴輪 家形埴輪 形象埴輪	鏡2 勾玉3以上 管玉36 小玉39以上 石釧5 貝釧約10 刀1 劍6 槍3 刀子3 鉄鏃2 銅鏃5 有柄有孔鉄板3 鎌3 斧頭3 鑿1 錐1 ヤリガンナ10 壺1 (伝承) 甕 (伝)	紛失した昭和2年の遺物に、鉄形石1 石釧路3 硬玉製刀子頭勾玉1 管玉7,8がある
岩崎山5号墳	墳丘なし?	不明	箱式石棺	不明 (付近に石材が散乱している)	-	仿製内行花文鏡1 勾玉1 ガラス玉小玉4 刀子1 碧玉製管玉10 ガラス玉34	昭和57年発見
岩崎山6号墳	円墳	径7~7.5	箱式石棺? 竪穴式石室?	×	-	不明	今回 (平成20年) 発見

表2 岩崎山古墳群一覧

よって他にも小規模な箱式石棺が数基発見され、姿を消したといわれている（註1）。

6基の古墳のうち、3号墳を除く5基の古墳は平成19・20年度において確認調査並びに遺物整理を行ってきた。本章では2ヵ年の調査のまとめとして岩崎山古墳群の特徴について検討したい。

岩崎山古墳群で明確になってきた点は、各古墳が規模、構造において等質ではないということである。岩崎山4号墳が全長61.8mの前方後円墳で、墳丘に埴輪を巡らし、葺石を葺いている。山頂に位置する岩崎山1号墳は径18～19mの小規模な円墳で埴輪は樹立しているが、葺石は認められない。岩崎山2号墳は径13mのさらに小規模な円墳で、墳丘は盛土しながら構築されているものの、葺石、埴輪類は確認できなかった。岩崎山6号墳はさらに小規模（径7～7.5m）で、尾根を溝によって区画しただけの簡易な墳丘となる可能性もある。5号墳は埋葬施設のみで、墳丘は確認されていない。

このように、規模が大きく外表施設の充実している岩崎山4号墳から、墳丘をもたない可能性のある岩崎山5号墳まで、様々なランクの古墳が造立されていることが指摘できる（註2）。

また、各古墳は古墳時代前期後半の短期間に築造されていた可能性が推測されるが、埴輪や副葬品の内容に共通点が少ないことが指摘できる。特に埴輪は4号墳と1号墳の両方で確認されたが、両古墳で埴輪の特徴が大きく異なることは重要である。1号墳が長い突帯で、口縁部は二重口縁になる可能性がある。突帯には限定された時期の使用が指摘されている補充技法が観察される。一方、4号墳は最上の突帯から短く外反する口縁部を呈し、胴部の突帯貼付け箇所には方形刺突がみられる。時期的には1号墳埴輪の方に古い属性が多く確認できるが、副葬品の在り方を加味すると、築造時期を即断することはできない。現状では類似した時期を想定するのに留まるだろう。このように、立地箇所、時期ともに近接した両古墳において埴輪の形態が大きく異なる点は重要である。

同様の指摘は京都府向日丘陵の古墳群に見られる。元稲荷古墳と寺戸大塚古墳は底部製作、口縁部形態、方形刺突技法の有無に相違があり、続く妙見山古墳との間にも差異が存在することに対して、埴輪を生産した集団が一度解体された後、そのままの状態でも再組織されたのではなく、新たに外部からの影響を受けて組織・生産が行われたものと考えられている。

岩崎山1号墳と4号墳は墳形、墳丘規模に差異があり、同一首長系譜といえるかは課題であるが、時期差の顕著でない両者で差異の大きい埴輪が樹立されたことは、「1回性」の埴輪生産と、再組織の際に外部からの強いインパクトを受けていたことを推察させる。なお、1号墳は突帯の形態をはじめ高松茶白山古墳出土埴輪と類似し、4号墳は口縁部の形態に快天山古墳出土埴輪との類似が見られることは、外部の関係を検討する上で興味深い点である。

この他、5号墳からは滑石製白玉に類似した胴部に稜線をもつガラス玉が出土しているが、同様のガラス玉は4号墳では確認できない。他、滑石製模造品を副葬する1号墳など古墳ごとに副葬品の内様に個性が見られる。

一方、岩崎山古墳群で共通する遺物もある。1つは貝製品である。1号墳で月日貝、4号墳でイモ貝製の貝製品が認められる。もう1つは針状鉄製品である。1号墳、4号墳、5号墳で出土している。古野徳久氏は5号墳の事例をヤス状鉄器と考えており（古野2000）、1号墳、4号墳も類例になる可能性がある。ヤス状鉄器は漁具が推察されることから、貝製品とともに海に関わる遺物として、津田湾古墳の性格を象徴する遺物といえる。

（註1）

津田町教育委員会 1983『岩崎山5号墳現地説明会資料』5 P10～12行に記載。

（註2）

岩崎山3号墳はかつて勾玉3個と管玉2個が出土したことが記載されているが（津田町教育委員会2002 岩崎山第4号古墳報告書9 P14行）、現在遺物の所在は不明である。また、墳丘は発掘された形跡がないことや、葺石が散乱した円墳であることが指摘されてきたが、調査が行なわれないまま現在破壊されてしまった。

<参考文献>

- ・阿河鋭二 2001「岩崎山古墳群」
『香川県埋蔵文化財調査年報 平成11年度』
- ・大久保徹也1996『中間西井坪遺跡 I』香川県教育委員会他
- ・香川県史蹟名勝天然記念物会 1930「岩崎山古墳」
『史蹟名勝天然記念物調査報告 第5冊』
- ・國木健司1990『富田茶白山古墳発掘調査報告書』

岩崎山古墳群

- ・ 蔵本晋司2007「高松市茶臼山古墳の基礎的研究 I
- 円筒埴輪の整理から -」
『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅲ』
- ・ 玉城一枝1985「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、
三の問題」『末永先生米寿記念献
呈論文集 乾』
- ・ 津田町教育委員会 1959『津田町史』
- ・ 津田町教育委員会 1983『岩崎山5墳現地説明会
資料』
- ・ 長町彰1916「讃岐国大川郡津田岩崎山古墳群」
『考古学雑誌7-3』
- ・ 樋口隆康2002『岩崎山第4号古墳』
津田町教育委員会
- ・ 東原輝明1983「岩崎山5号墳」『香川県埋蔵文化
財調査年報 昭和57年度』
- ・ 広瀬常雄1983『日本の古代遺跡8 香川』保育社
- ・ 古野徳久2000『野牛古墳』香川県教育委員会
- ・ 古瀬清秀2002「岩崎山古墳群の地形測量」
『岩崎山第4号古墳』津田町教育委
員会
- ・ 松本敏三、齊藤賢一1986「香川県埴輪出土遺跡調
査報告 I」(資料 I)『瀬戸内海
歴史民俗資料館紀要 第3号』
瀬戸内海歴史民族資料館
- ・ 六車功1982「新発見の岩崎山5号墳とその周辺」
『津田文化財だより』

岩崎山1号墳

図番号	種類	部位	法量 (cm)				外	内	胎土	調整	備考
			口径	胴径	器厚	突帯高					
7 1	埴輪	突帯	29.4		2.3	2.2	10YR7/3黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	英、雲母	ナデ	突帯は粘土を継ぎ足して仕上げる
7 2	埴輪	突帯			2.0	1.5	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	長、英、雲母	横ナデ	突帯上面はふくらみをもつ
7 3	埴輪	突帯			2.0	1.5	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	長、英		剥離面に斜め方向のハケ
7 4	埴輪	突帯			1.9	1.5	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	長、英	横ナデ	
7 5	埴輪	突帯			1.2	1.3	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	長、英		法量、形態とも他と異なる
7 6	埴輪	胴部			0.8~1.0		10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	長、英		外面に20cmの剥離面あり
7 7	埴輪	胴部			0.9		10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	長、英		外面に1.5cmの剥離面あり
7 8	埴輪	胴部			0.8~1.0		10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	長、英		外面に1.5cmの剥離面あり やや曲線をもつ透孔あり
7 9	埴輪	口縁部			0.5~0.7		10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	長、英、雲母		外面は強く外反して立ち上がる
7 10	朝顔型埴輪	口縁部	41.4				10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	長、英、雲母		直線に近い口縁部の立ち上がり、 突帯に補充技法あり
7 11	埴輪・土師器	高杯?					10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	長、英		高杯の杯底部の可能性と埴輪の可能性がある
7 12	黒色土器A	底部					7.5YR6/6浅黄橙		長		古代後半
7 13	土師器杯	底部					10YR8/4浅黄橙		長、英		中世

岩崎山4号墳

図番号	種類	部位	法量 (cm)				外	内	胎土	調整	備考
			口径	胴径	器厚	突帯高					
15 20	家形埴輪	屋根			2.1~2.5		7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	長、英		棟覆(押縁あり)
15 21	家形埴輪	屋根~壁			1.5~2.3		7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	長、英		窓の表現あり。屋根の傾斜25°
15 22	家形埴輪	屋根			1.5~2.5		7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	長、英		窓の表現あり。屋根の傾斜25°
15 23	家形埴輪?				2.2~2.9		7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	長、英		
15 24	家形埴輪	基部					7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	長、英		高3.6cm、上面の幅3.0cm 断面「へ」の字状に屈曲。 基部の上位は窓の可能性。
15 25	家形埴輪	基部裾					7.5YR7/6橙 2.5Y7/1灰白		長、英 茶色粒		柱の剥離痕あり
15 26	草摺形埴輪?		35.0		1.1~1.4		7.5YR5/4にぶい褐	2.5YR5/6明赤褐	長、英		やや曲線を持った胴。4号墳では異質な色調

表3 岩崎山1号墳、4号墳出土埴輪観察表

岩崎山4号墳

図	番号	種類	部位	法量 (cm)			外	内	胎土	調整	備考
				口径	胴径	器厚					
15	27	器材埴輪?			1.1~1.3		10YR8/4浅黄橙	長、英		外面に綾形文とそれに並行する剥離痕あり。赤色顔料	
15	28	器材埴輪?			1.2~1.25		2.5YR5/8明赤褐	長、英		外面に突帯あり。4号墳では異質な色調。	
15	29	形象埴輪			2.0~2.8		2.5YR5/6明赤褐	長、英		勾玉の様な形状	
15	30	形象埴輪			0.6~0.9		10YR6/2灰黄褐	長、英		胎土は精緻	
15	31	埴輪	口縁部		1.1~1.3		10YR7/4にぶい黄橙色	長、英		外面に赤色顔料	
15	32	形象埴輪			0.9~1.4		5YR7/8橙	長、英		剥離痕あり。片方の端部欠損	
15	33	形象埴輪	緒?		1.4~2.7		7.5YR8/6浅黄橙	長、英		赤色顔料なし	
16	34	壺形か朝顔形		32 + α	0.9~1.35		10YR7/4にぶい黄橙色	長、英		断面5YR4/1灰 外面赤色顔料。擬口縁手法による二重口縁	
16	35	円筒埴輪	胴部	37.0	1.05		2.5Y7/4浅黄	長、英		赤色顔料多い。口縁部外反	
16	36	円筒埴輪	胴部	27.6	0.95		2.5Y7/4浅黄	金雲母 石 赤色 粒		断面5YR4/1灰 口縁部外反	
16	37	円筒埴輪	胴部	32.0	0.85		7.5YR4/4褐	長、英		赤色顔料なし、4号墳では異質な色調	
16	38	円筒埴輪	胴部		1.1~1.3	0.8	5YR7/6橙色	長、角		外面に赤色顔料	
16	39	円筒埴輪	胴部		0.9~1.1	1.4	10YR7/4にぶい黄橙色	長、英		赤色顔料、津田岩崎山の注記あり	
16	40	円筒埴輪	胴部		0.8~1.25	1.35	10YR6/4にぶい黄橙	長、英		赤色顔料、津田岩崎山の注記あり	
16	41	円筒埴輪	胴部		0.8~1.2	0.8	10YR7/4にぶい黄橙	茶色粒			
16	42	円筒埴輪	底部付近		1.9~2.2		10YR7/4にぶい黄橙	長、英		赤色顔料なし	
16	43	円筒埴輪	底部		1.4~1.7		10YR8/4浅黄橙	長、英		外面に黒斑	

表4 岩崎山1号墳、4号墳出土埴輪観察表

図	番号	種類	材質	法量 (cm)			色調	備考
				長さ	幅	穿孔幅		
21	50	勾玉	硬玉	1.9	0.6~0.75	0.15~0.3	淡緑 白	断面円形、C字状の屈曲を持つ。両面穿孔
21	51	管玉	碧玉	0.8	0.4	0.2	深緑	
21	52	管玉	碧玉	0.6	0.4	0.2	深緑	
21	53	管玉	碧玉	1.0	0.45	0.2	緑	
21	54	管玉	碧玉	1.0	0.4	0.2	緑	
21	55	管玉	碧玉	0.9	0.4	0.2	緑	
21	56	管玉	碧玉	0.8	0.3	0.2	緑	
21	57	管玉	碧玉	0.9	0.3	0.15	緑	
21	58	管玉	碧玉	0.9	0.2	0.1	緑	
21	59	管玉	碧玉	1.35	0.3	0.15	淡灰緑	
21	60	管玉	碧玉	1.0	0.4	0.2	青緑	
21	61	小玉	ガラス	0.6	0.7	0.3	青紫	
21	62	小玉	ガラス	0.3	0.3	0.2	青緑	
21	63	小玉	ガラス	0.7	0.5	0.3	深緑	
21	64	小玉	ガラス	0.25	0.4	0.2	深緑	
21	65	小玉	ガラス	0.55	0.6	0.2	水色	
21	66	小玉	ガラス	0.42	0.7	0.35	水色	
21	67	小玉	ガラス	0.35	0.7	0.4	水色	
21	68	小玉	ガラス	0.5	0.6	0.3	水色	
21	69	小玉	ガラス	0.5	0.8	0.25	水色	
21	70	小玉	ガラス	0.5	0.6	0.2	水色	
21	71	小玉	ガラス	0.4	0.7	0.2	水色	
21	72	小玉	ガラス	0.4	0.6	0.2	水色	
21	73	小玉	ガラス	0.57	0.43	0.2	水色	
21	74	小玉	ガラス	0.4	0.5	0.2	水色	
21	75	小玉	ガラス	0.5	0.4	0.15	水色	
21	76	小玉	ガラス	0.35	0.5	0.2	水色	
21	77	小玉	ガラス	0.3	0.5	0.25	水色	
21	78	小玉	ガラス	0.3	0.5	0.2	水色	
21	79	小玉	ガラス	0.3	0.4	0.25	水色	
21	80	小玉	ガラス	0.3	0.4	0.2	水色	
21	81	小玉	ガラス	0.3	0.4	0.2	水色	
21	82	小玉	ガラス	0.3	0.3	0.2	水色	
21	83	小玉	ガラス	0.3	0.4	0.15	水色 (青味)	
21	84	小玉	ガラス	0.32	0.35	0.1	水色	
21	85	小玉	ガラス	0.25	0.4	0.2	水色	
21	86	小玉	ガラス	0.25	0.4	0.2	水色	
21	87	小玉	ガラス	0.25	0.4	0.1	水色	
21	88	小玉	ガラス	0.3	0.4	0.25	水色	
21	89	小玉	ガラス	0.3	0.5	0.3	青緑	透明、光沢あり
21	90	小玉	ガラス	0.3	0.4	0.2	青緑	透明、光沢あり
21	91	小玉	ガラス	0.3	0.4	0.15	青緑	透明、光沢あり
21	92	小玉	ガラス	0.3	0.6	0.2~0.35	青緑	透明、光沢あり
21	93	小玉	ガラス	0.3	0.6	0.15~0.3	青緑	透明、光沢あり
21	94	小玉	ガラス	0.3	0.6	0.15~0.3	青緑	透明、光沢あり
21	95	小玉	ガラス	0.3	0.5	0.15~0.35	青緑	透明、光沢あり
21	96	小玉	ガラス	0.3	0.5	0.15~0.25	青緑	透明、光沢あり
21	97	小玉	ガラス	0.3	0.5	0.15~0.3	青緑	透明、光沢あり
21	98	小玉	ガラス	0.3	0.5	0.15~0.25	青緑	透明、光沢あり
21	99	小玉	ガラス	0.25	0.5	0.1~0.25	青緑	透明、光沢あり
21	100	小玉	ガラス	0.25	0.5	0.1~0.25	青緑	透明、光沢あり
21	101	小玉	ガラス	0.25	0.5	0.1~0.2	青緑	透明、光沢あり
21	102	小玉	ガラス	0.25	0.5	0.1~0.25	青緑	透明、光沢あり
21	103	小玉	ガラス	0.3	0.5	0.1~0.25	青緑	透明、光沢あり
21	104	小玉	ガラス	0.3	0.5	0.1~0.3	青緑	透明、光沢あり
21	105	小玉	ガラス	0.2	0.5	0.2~0.25	青緑	透明、光沢あり
21	106	小玉	ガラス	0.25	0.5	0.1~0.25	青緑	透明、光沢あり
21	107	小玉	ガラス	0.25	0.5	0.1~0.2	青緑	透明、光沢あり
21	108	小玉	ガラス	0.25	0.5	0.1~0.2	青緑	透明、光沢あり
21	109	小玉	ガラス	0.3	0.5	0.15~0.25	青緑	透明、光沢あり
21	110	小玉	ガラス	0.3	0.6	0.1~0.2	青緑	透明、光沢あり
21	111	小玉	ガラス	0.25	0.5	0.3	青緑	透明、光沢あり
21	112	小玉	ガラス	0.25	0.5	0.1~0.25	青緑	透明、光沢あり
21	113	小玉	ガラス	0.2	0.5	0.1~0.2	青緑	透明、光沢あり
21	114	小玉	ガラス	0.3+ α	0.35+ α	0.2	青緑	透明、光沢あり

表5 岩崎山5号出土 勾玉、管玉、ガラス玉観察表

龍王山古墳

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成16年度から国庫補助事業として津田湾古墳群の内容確認を実施している。平成20年度は新たに龍王山古墳の確認調査を実施した。今年度は墳丘測量を行い、表面観察から墳形、規模の検討を行った。(調査体制)

さぬき市教育委員会生涯学習課

課長	六車 正徳
課長補佐	山津 勝美
係長	山本 一伸
主事	鶴身 昌大

大川広域行政組合理藏文化財係

主査	阿河 鋭二
主任主事	松田 朝由
技術員	多田 歩
技術員	松村 春美

第2節 調査の経過

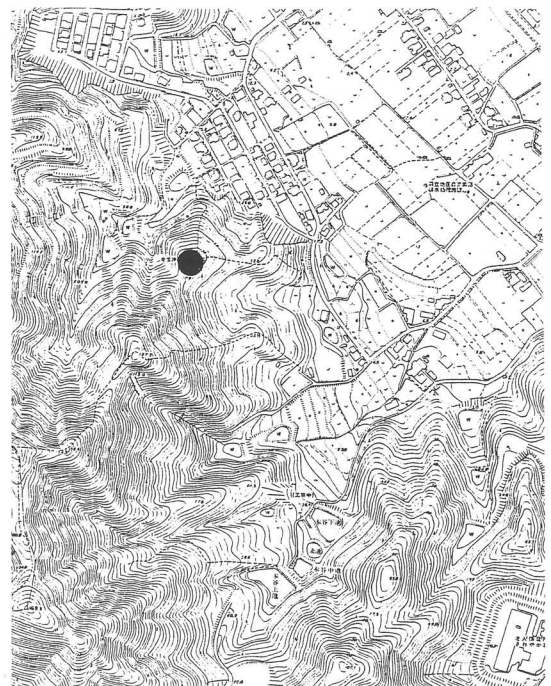
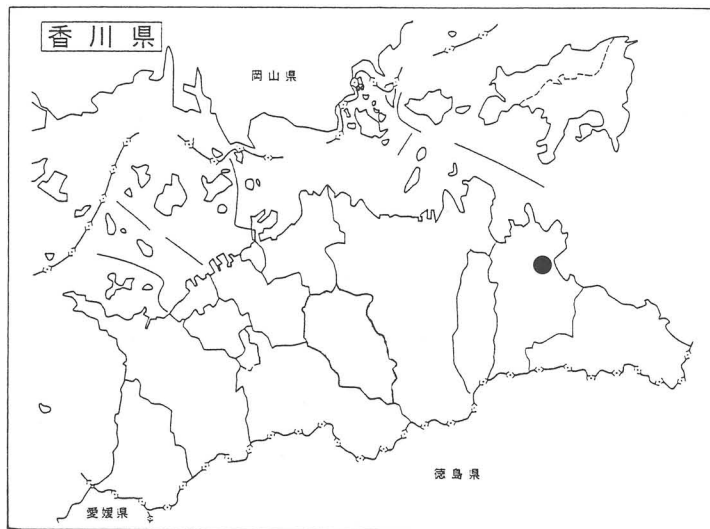
平成21年2月9日(月)から調査を開始した。17日までの7日間伐採を行なった。伐採中墳丘西南部裾の葺石散布地点において埴輪片を1点採集した。

18日から墳丘測量を開始した。並行して葺石、竪穴式石室平面の実測を行う。3月5日(木)に全ての調査を終了した。

調査期間

平成21年2月9日～3月5日 実働16.5日

測量面積 1667㎡



(S=1/10,000)

第29図 遺跡位置図 (S=1/10,000)

第2章 龍王山古墳に関する過去の記載

龍王山古墳に関する記載は大正11年（1922）香川新報に掲載された大内盤谷氏『津田と鶴羽の遺蹟及び遺物』の連載に見られる。17回目に以下のような記述がある。

1月23日・17回目

さて鶴羽村の古墳は前記の如く北方の鶴羽山に多くして、南部の山手には比較的すくない。然るに津田町にては之と反対に西南の山麓にのみ存在し、海岸線には何等遺蹟らしきものもない。而も其の多くは南羽立北羽立である。之は地形上然らしめたものと思ふ。即ち千四五百年前以前の津田かう云ふ墳墓を造られつゝ、あった時代の津田は現今見ゆやうな地形ではなく、南に石清水神社の付近から西は山根ツレガラ岩崎山近くまで海が入り込んで居たであらう。故に当時の民衆は雨瀧山や羽立北山の方面にのみ多く居住し、極めて原始的の生活、それは河海に依憑する漁撈、山岳森林に依頼する狩猟、即ち山野の生活、水邊の生邊の生活を営んで居たのだろう。従つて此の地方に古墳及遺多蹟の数存在する訳である。今日津田町内の人々は幾ら豪そうに云つた所で新来のお客様である。閑□体□津田町に現在する古墳は如何なる構造形式のものがあるかと云へば、完全なる古墳發掘も破壊もせられて居ないと云ふ墳□な先ず借無である。わたしの調査した所では一ヶ所も發見されない。唯僅に南羽立の龍王山□に石室の存在する他は、従来疑問とせられて居る石清水神社の後方の小山、□□ある吉見山の弁天宮の下に一度發掘されたる石槨の其儘に埋もれたるのかあるらしい。此外遺蹟は例の有名なる岩崎山、南羽立の南方の小山、北羽立の山麓北、松原の松林中、雨滝山麓の山根、八幡宮南方にある白粉山などである。副葬品の出たと云ふのは岩崎山は例外として羽立峠の南方の小山と龍王山塚との二ヶ所で、茲からの出土品は羽立の長町家に秘蔵されて居る。北山の北峰神社の後方の洞窟から□□三個出たと云ふ話もある。かう云ふ現状であるから津田町の古墳□書くとしては総ての材料が薄弱で困る。唯僅かに龍王山塚を目標となし夢物語のやうである岩崎山古墳を参考として長町家所蔵の二三遺物品に就いて駄説を吐いて見る位である。読者諸君宜しく了せられよ。

龍王山塚、津田町羽立の龍王山に在り。頂上に八

代龍王が祀られてあつて其□□□傍らに慘酷に破壊されたるまゝ、残つて居る。見た所では地平面以下に石室を設けられてあるやうだが、東南北の方面には今尚埋没土器の出現する点から見ると封土はまだ幾部分残つて居るらしい。此塚の發掘された時代は不明なるが龍王山勸請の際であつたのだらう。墳形は破壊の程度か酷いので判明しないけれども石室の構造及び附近の状態から考察すると其れが丸塚であつたらしい。さて石室は南北の方向を取つて板石を以つて積上げられたる長方形の縦穴式擴である。奥行約二十三尺、深さ三尺、横幅二尺五寸で此式の縦穴としては稍大なるものである。蓋石は擴の一方は未だ土に被れたるまゝ、に在りて一方は擴内に墜落して土擴に埋没せらる。此所から仰向けに身を伸ばして僅かに擴内に這い入るべき空隙が□。私はこの擴内に埋没して居る蓋石の下には未だ何物か存在するやうに思はれてならない。一昨年夏であつた。附近の子供が此塚穴の中で遊んで居つた際、銅鏡一鉄鏡鉄刀を掘り出したが、此んなに錆た刀や鏡□になる□のかとて其れを皆石に叩き付けて打毀して日を経つて話を聞いた長町與彦君は地團駄踏んで惜がつたが、最早後の祭で仕方なく攻めて其の破片でもとて子供に命じ拾しめて持つて居る。鉄鏡は鈕を□つて半□だ□あるが銅□は□□□□され太刀は形状が認められない程に打折られて居る。そうすると此の擴内に墜落して居る蓋石の下には未だ々々何物かが取残されてあるだらう。

大正15年（1926）、長町與彦氏の『津田町史』では「龍王山塚」として紹介されている。内容は、大内氏の文章をまとめたものである。

昭和26年（1951）に發掘された岩崎山4号墳の報告書には、径26mの円墳で、葺石がよく残り、円筒埴輪が散乱しているとある。墳丘の北寄りに主軸を南北に向けた竪穴式石室があり、床面に粘土床が設けられていたとある。出土遺物として鏡2面（銅鏡、鉄鏡）、鉄劍、鉄刀、鉄鏃片が記載されている（津田町2002）。

昭和34年（1959）の『津田町史』では前方後円墳として紹介されている。前方部は山の尾根を利用していること、葺石が散乱し、円筒埴輪の破片が發見されることが指摘されている。龍王山古墳を前方後円墳とする記述は昭和44年（1969）の『改訂津田町』まで見られ、続く昭和61年（1986）の『再訂津田町史』では円墳になっている。

昭和40年（1965）六車恵一氏は直径26m、高さ

3mの円墳として紹介している。葺石の構造について、裾に大きい葺石を配し、その上に小さいのを更の上に大きい石をめぐらす手法と指摘し、同様の手法の見られる古墳として北羽立古墳を挙げている。埴輪に家形埴輪のような形象埴輪が見られること、竪穴式石室が長大で板状安山岩が使用されていることから、畿内的な様相を感じさせることを指摘している（六車1965）。

昭和47年（1972）に津田町内の古墳の分布調査が実施され、龍王山古墳も踏査された。報告には東西20m、南北18mの円墳と記載され、墳丘北東部に円筒埴輪の跡が残存しているとある（津田町1973）。

昭和51年（1976）古墳の基礎的資料を作成し、遺蹟を広く周知して今後の保存を図るために香川県教育委員会によって墳丘測量と石室実測調査が実施された。墳丘は長径27.8m、短径23mの楕円形を呈すること、墳丘裾のレベルは水平でなく尾根先端側が低く基部側が高いこと、墳丘は地山をカットして盛り上げた可能性があること、等が指摘されている。埋葬施設は墳頂部においてやや東に寄っていることから、西側に別の主体部のある可能性が推測されている。出土遺物や石室の構造を県内の他の事例を比較して、築造時期が前期でも新しい4世紀末頃であると指摘している。

玉城一枝氏は龍王山古墳の竪穴式石室がほぼ正確に南北方向をとる狭長な形態を呈していることを挙げ、東西方向の埋葬施設を特徴とする讃岐地方の中で津田湾沿岸の独自性として指摘している。

以上、これまでの指摘から墳丘に注目すると、墳形は円墳と前方後円墳の両説がある。前方後円墳の場合、尾根側を前方部と判断している。墳丘規模は20～30mの中で開きがある。現状で墳丘の変形が著しく、正確な墳丘規模を把握することは困難であるが再度検討を試みる。

第3章 調査の成果

第1節 墳丘測量

龍王山古墳の墳丘測量図は昭和51年（1976）の図があるが、今回、西側の尾根と墳丘との関係を把握するため、再度墳丘測量を実施した。

測量は国土座標の基準点を設置し、縮尺1/100、20cmコンターで行った。測量範囲は墳丘の想定される範囲と、墳丘から水平気味に西側に続く尾根が傾斜して上がり始める地点までである。

龍王山古墳は西から東にのびる尾根が瘤状に高く

なった尾根の先端部に位置する。墳丘は後世の改変が著しく円形のラインの巡る箇所は北西部と南西部の墳丘裾付近のみである。墳丘斜面は改変によってテラス状になっている箇所、道によって溝状になっている箇所があり、段築の判断はできない。改変は全体に及ぶが、東から南にかけた墳丘上半部が顕著である。墳丘裾も不明瞭であるが、西側、南西側は葺石が顕著で傾斜変換は明確である。また、墳丘東側は墳丘裾の外側がテラス状になっており、他所に比べれば墳丘裾を把握しやすい。北側はテラスが不明瞭で、墳丘裾は把握し難いが、若干の傾斜変化のラインから推測する。このようにして把握した墳丘裾のラインは昭和51年の測量図とほぼ同じ結果となり、墳形は円墳で北西—南東にやや長い楕円形を呈する。長径27.8m、短径23mを測る。なお、楕円形の形態は、墳丘から下の自然地形も同様に楕円形を呈することから、地形に制約された可能性がある。ただし、昭和51年の調査でも言及されているが、地形的制約か墳丘盛土の流失などによる墳丘の変化なのかは判然としない。

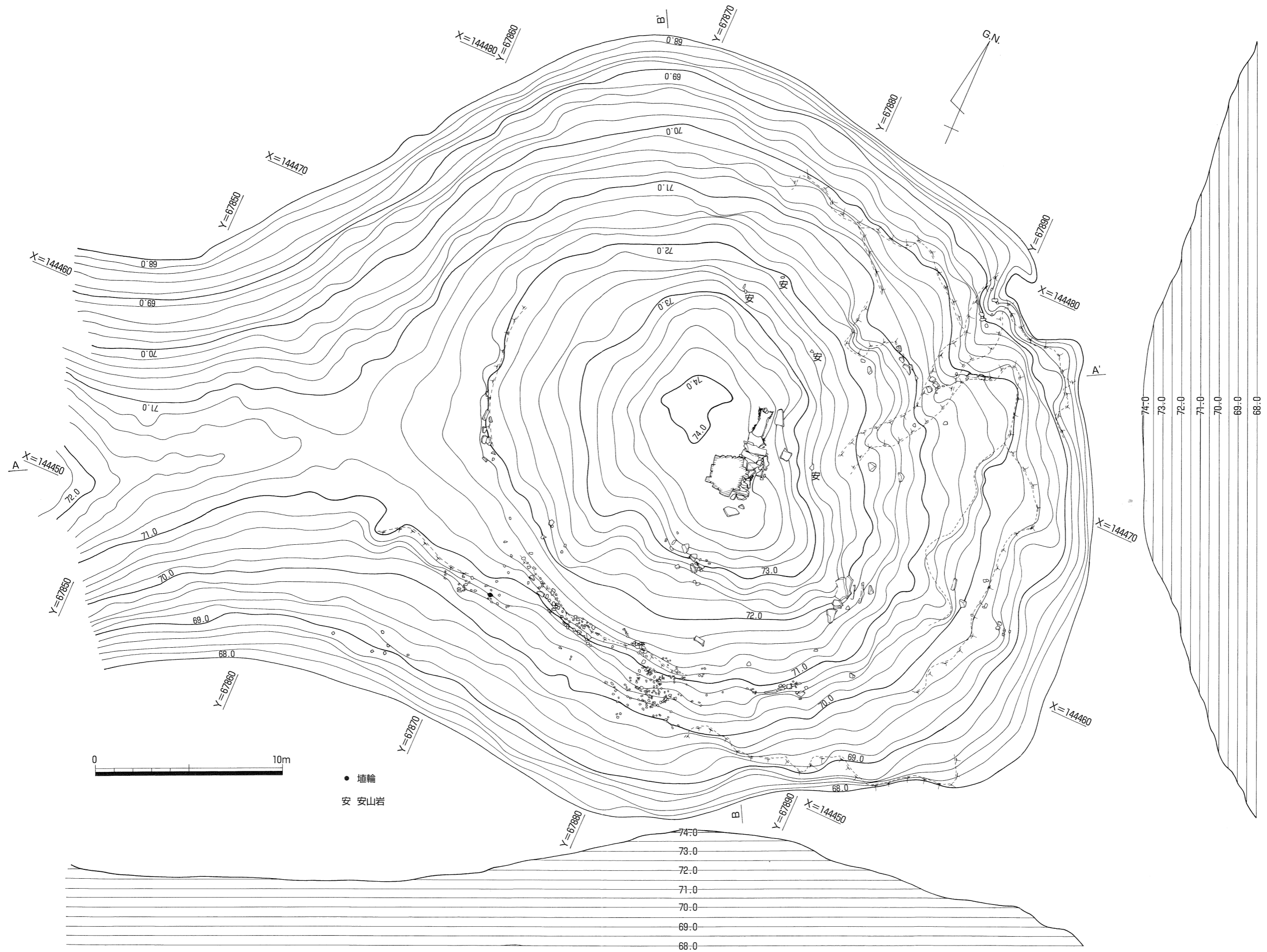
墳丘裾は広い箇所で標高70.8～71mを測るが、西側尾根と接する場所は標高71.8～72mと約1m高い。ただし、この地点は1m近い土砂の流土が推測され、本来は約1m下の標高70.8～71m付近が想定される。また、墳丘北東部裾は標高71.2～71.4mに想定されるが、深さ約0.6mの流土があり、本来の墳丘裾は標高70.8～71mが想定される。これらから、本来の墳丘裾は標高70.8～71mで水平に整形されていた可能性が強い。

墳丘高は標高70.8～71cmを墳丘裾と想定すると、最高点74.032mまでで約3mを測る。

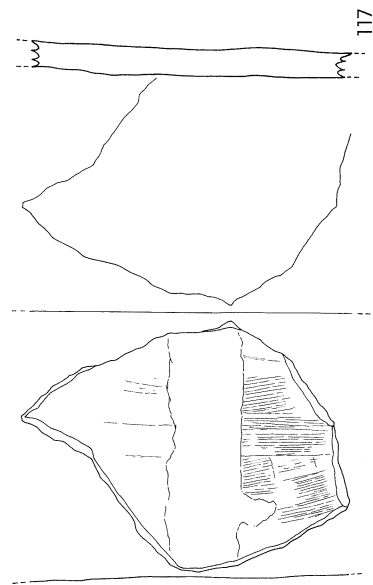
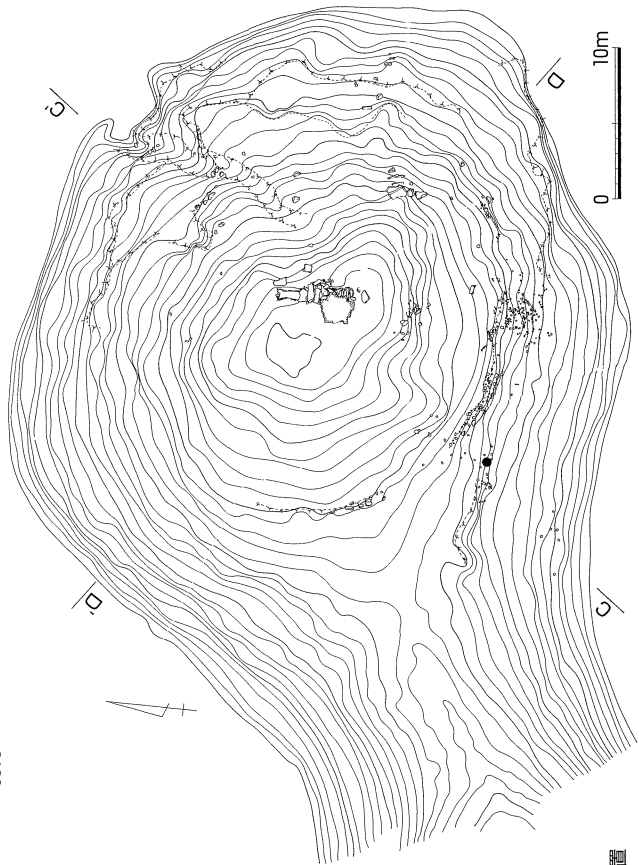
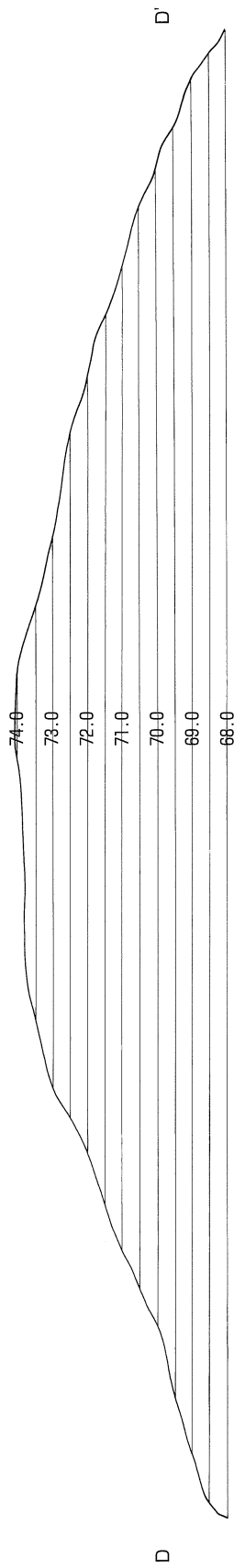
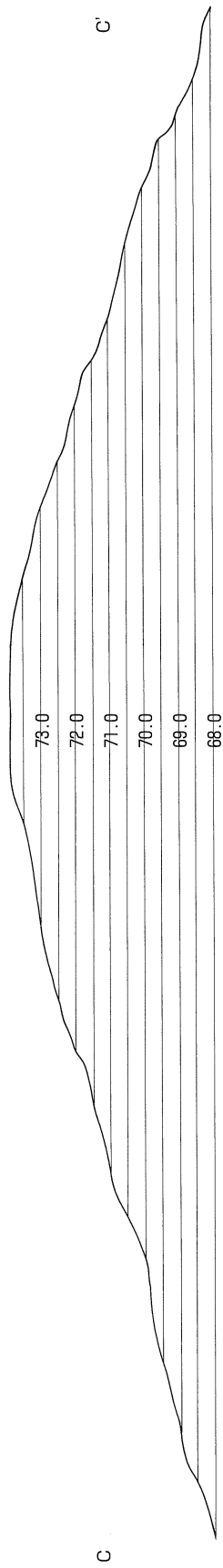
墳頂部は北西—南東に長い楕円形の平坦面をなす。北東部は攪乱が竪穴式石室の近くまで及んでいる。地表面には花崗バイラン土が見られ、昭和51年の調査では墳丘周辺の地山をカットし、盛り上げた可能性が指摘されている。

葺石は墳丘に散在する。墳丘南側の裾付近は花崗岩礫が長さ12mにわたり集中している。礫の大きさは拳大が多いが、長さ20cm以上の大きなものも確認できる。墳丘東、南、西の墳丘裾付近には長さ20～30cmの大きな葺石が散在している。墳丘中位の斜面には東及び南側において長さ70cmの巨石が見られ、露頭の可能性が推測される。また、墳丘斜面には石室石材の可能性のある安山岩の散布が数ヶ所確認できる。

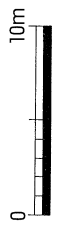
墳丘の西側は尾根が約16m水平気味にのびて、さ



第30図 墳丘測量図及び断面図 (1/200)



● 埴輪採集位置



第31図 墳丘断面図 (1/200) 及び採集遺物 (1/4)

らに西側へは傾斜して標高127mの山頂に至る。昭和34年『津田町史』、昭和44年の『改訂津田町史』ではこの墳丘西側の尾根を前方部と解釈している。コンターラインを見ると、標高71~71.2mラインは尾根主軸に向かって強くくびれている。ピンポールで地山の深さを確認すると、この地点で約1mの土砂の堆積が認められた。よって墳丘西側では墳丘を自然地形から切り離す幅5~6mの堀切りが造作されている可能性が強い。墳丘西側裾部付近では長さ4mにわたり、20cmの大型礫が見られる。

詳細は発掘調査で把握する必要があるが、尾根は前方部ではないといえる。なお、尾根の主軸ラインは墳丘の中心ではなく、墳頂部北端を通過する。

埋葬施設は墳頂部東寄りに竪穴式石室を南北方向設置している(N-45° - W、全長5.9m、幅0.75~0.8m)。北側は天井石がはずされており、内部を窺うことができる。床面は土が堆積している。竪穴式石室は墳頂部の東寄りに位置することから、西側に別の埋葬施設が推測される。竪穴式石室から5m程西側で土中に石材らしき反応は見られる。

伐採中に墳丘南西部の裾で円筒埴輪片1点を採集した(標高70.55m)。この地点は崩落したと推察される拳大の葺石が散乱している箇所である。円筒埴輪は胴部片で径28.6cmに復元される。胎土は石英、長石を多量に含み粗い。色調は明赤褐色を呈する。外面は縦幅3.5~4cmの突帯剥離痕があり、幅2cmの縦ハケが施されている。内面の調整は判然としない。破片1点のみのため龍王山古墳の円筒埴輪の特徴を把握するには至らないが、色調は岩崎山1号墳、4号墳の円筒埴輪と相違している。詳細は今後の課題である。

第4章 まとめ

これまで龍王山古墳は墳形において円墳と前方後円墳の2者が指摘されてきたが、墳丘の表面観察からは円墳の可能性の強いことが指摘できる。墳丘が尾根と接する箇所はコンターラインがくびれており、この地点の堆積土を確認したところ地山面までに約1mの深さの流土が想定される。よって、岩崎山4号墳同様に墳丘を自然地形から切り離す堀切りが施されている可能性が強い。

墳形は北西-南東に長い楕円形を呈しているが、墳丘外の自然地形も同様の楕円形を呈することから、本来の形状を保っていると仮定するならば墳形は地形に制約されたと考えられる。ただし、現状で

盛土の流失が顕著であり、詳細は今後の課題である。

墳丘裾は尾根と接する箇所(標高71.8~72m)と、尾根先端側(標高70.8~71m)では約1mの標高差がある。しかし、尾根と接する箇所は約1mの流土が推測されることから、墳丘裾の標高はほぼ同じである。その他の箇所も同じ標高の可能性が推測され、墳丘裾は水平に整形されている可能性が推測される。なお、墳丘裾を水平に整形するのは、津田湾古墳群では一つ山古墳、岩崎山4号墳において確認されている。

出土遺物は円筒埴輪片が1点南西部の墳丘外で採集された。外面に縦ハケが見られる。色調は明赤褐色を呈しており、赤山古墳、岩崎山1号・4号墳の円筒埴輪と相違していた。詳細は今後の課題である。

<参考文献>

- ・大内盛谷1922『津田と鶴羽との遺蹟及び遺物』
- ・香川県教育委員会1977『龍王山古墳調査概報』
- ・津田町教育委員会 1959『津田町史』
- ・津田町教育委員会 1969『改訂 津田町史』
- ・津田町教育委員会 1986『再訂 津田町史』
- ・津田町教育委員会 1973『ふる里津田の文化財』
- ・六車恵一 1965「讃岐津田湾をめぐる四、五世紀ごろの謎」『文化財協会報7』



1. 岩崎山古墳群遠景（南東から 昭和2～5年 ×が1号墳、○が3号墳）



2. 岩崎山古墳群遠景（南東から（平成20年））



1. 岩崎山 1 号墳墳丘 (北東から)



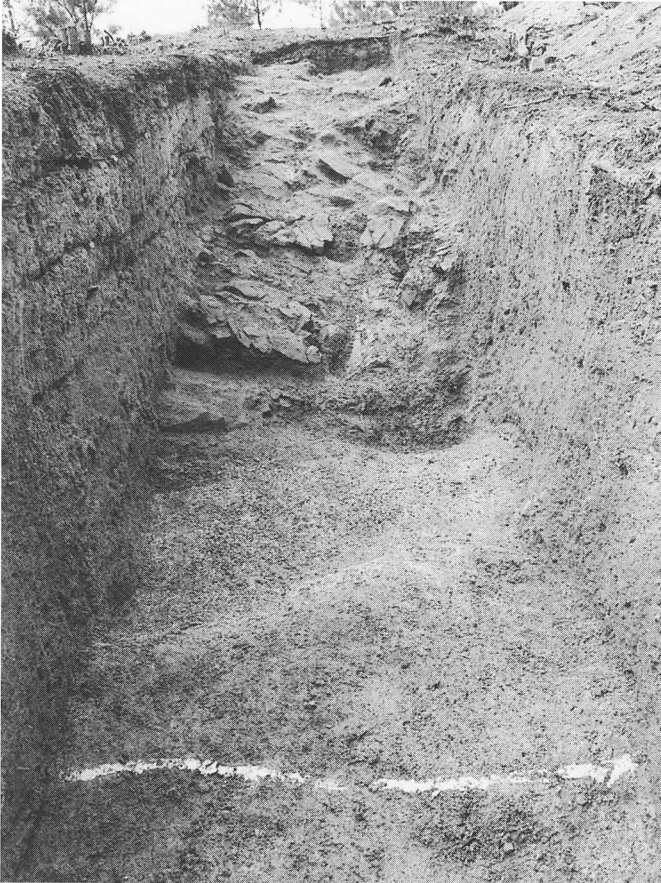
2. 岩崎山 1 号墳墳丘 (北西から)



1. 岩崎山1号墳トレンチ1 (北東から)



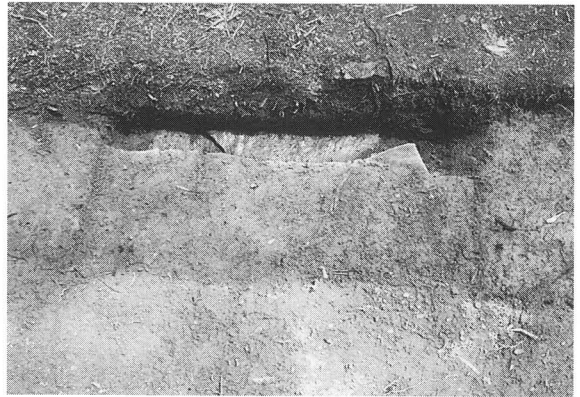
2. 岩崎山1号墳トレンチ2 (北西から)



1. 岩崎山 1 号墳墳丘傾斜面トレンチ 1



2. 岩崎山 1 号墳円筒埴輪出土状況



3. 岩崎山 6 号墳蓋石出土状況



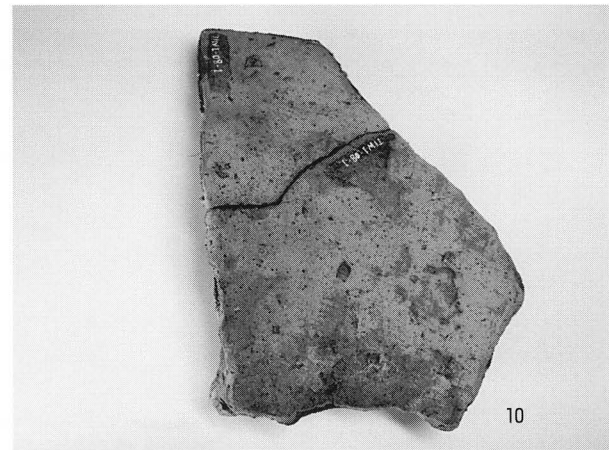
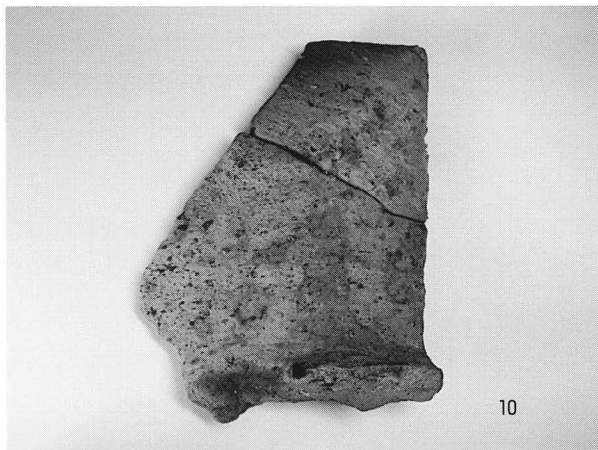
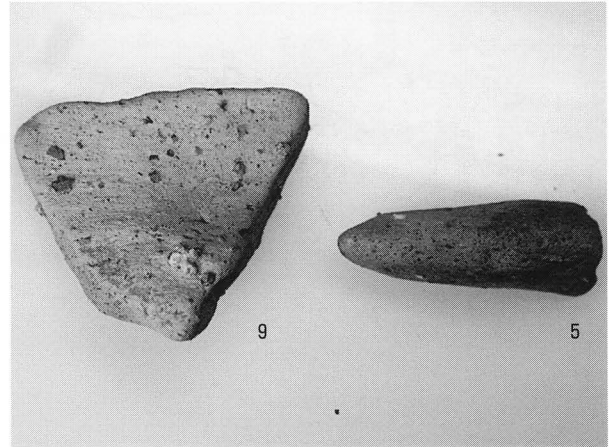
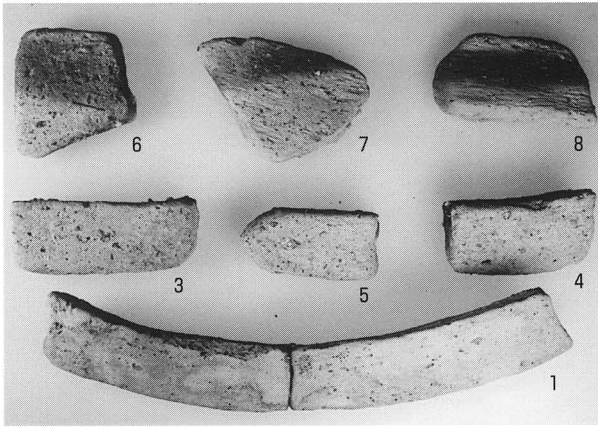
4. 岩崎山 6 号墳調査風景 (南西から)



1. 岩崎山2号墳墳丘（南西から）



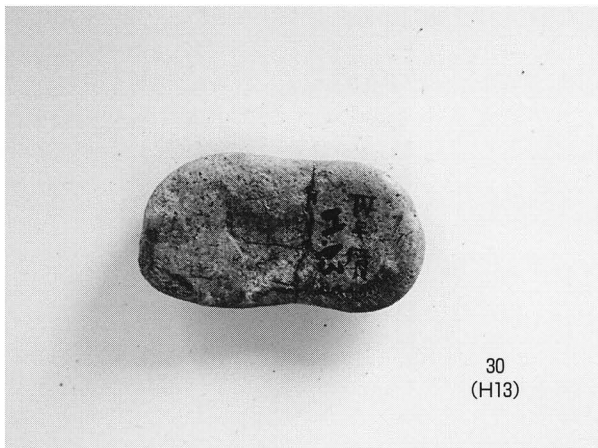
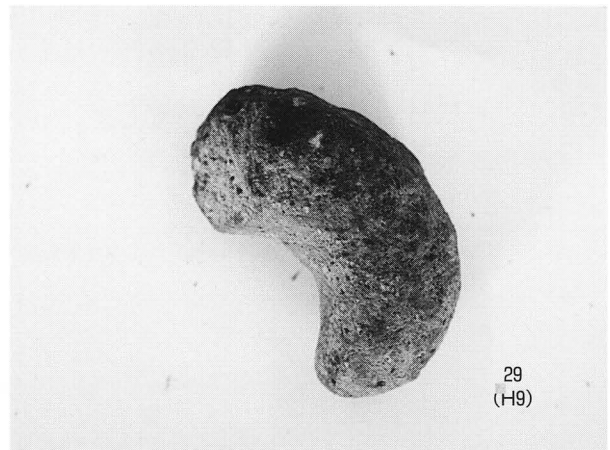
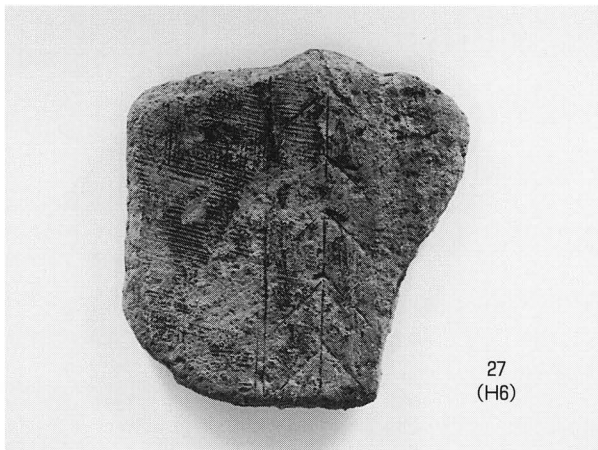
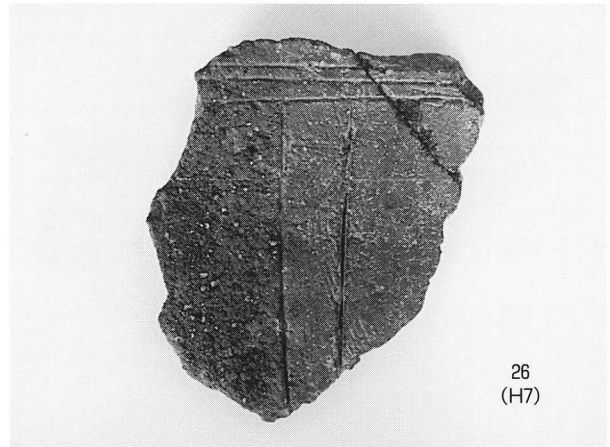
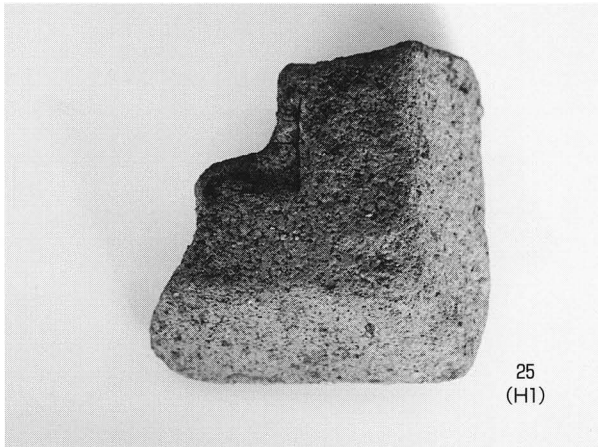
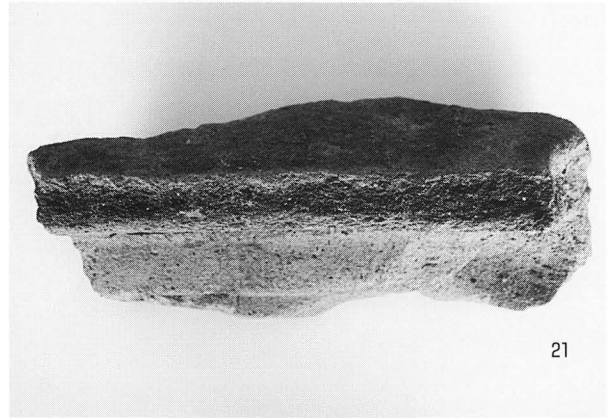
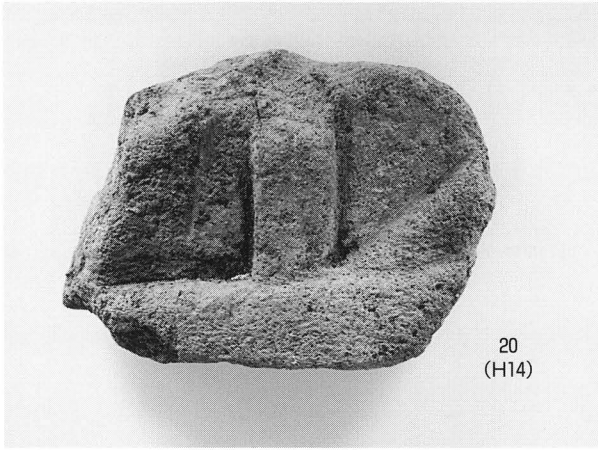
2. 岩崎山2号墳盛土



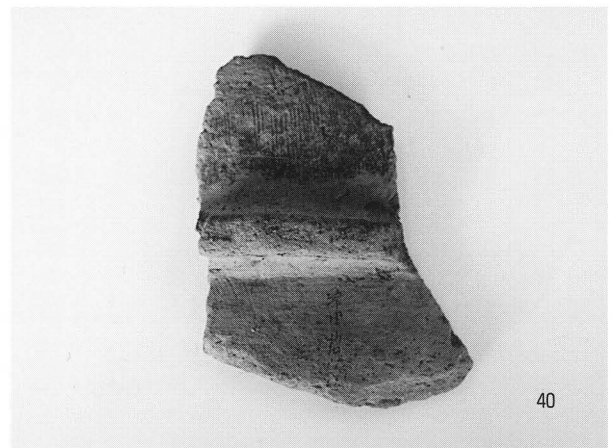
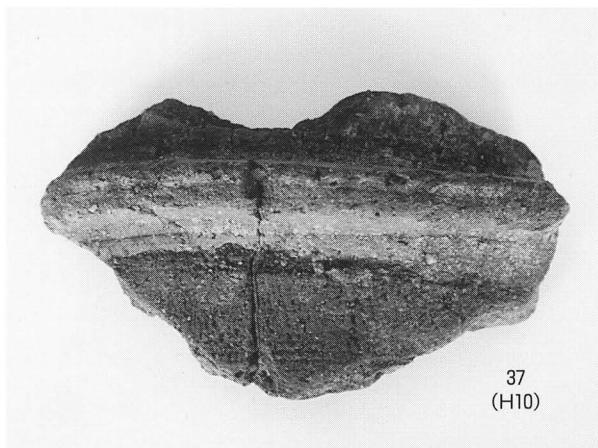
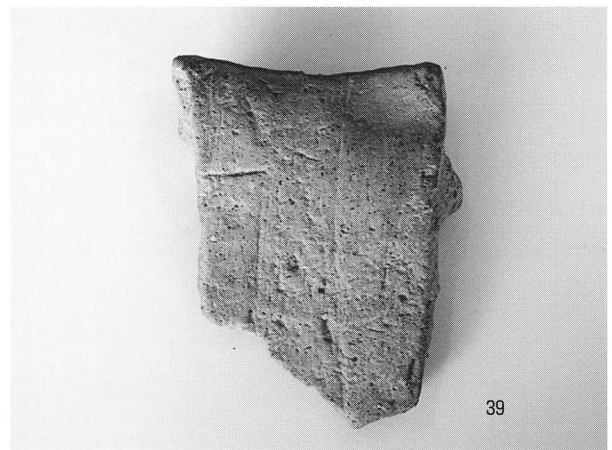
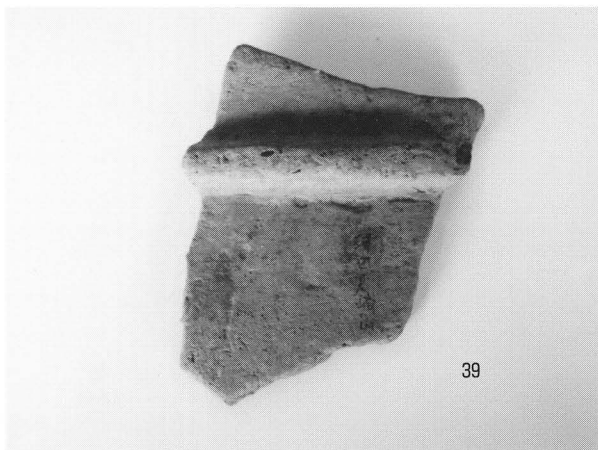
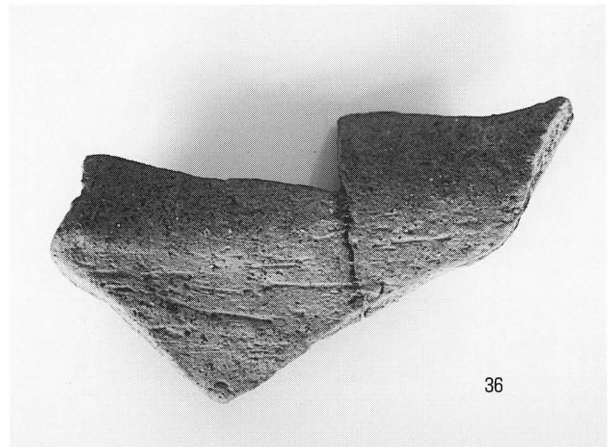
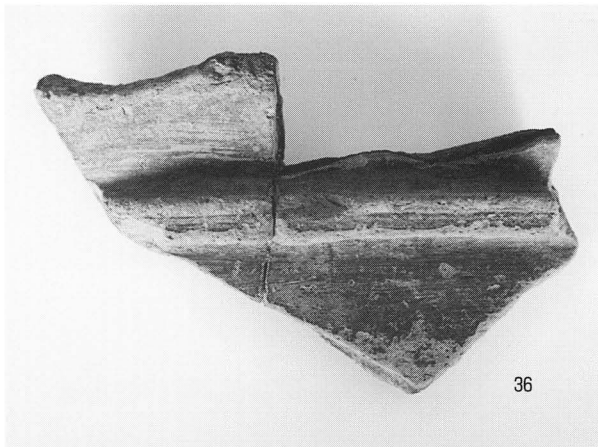
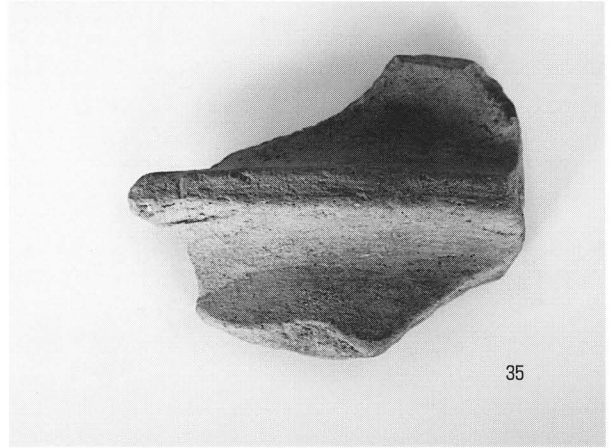
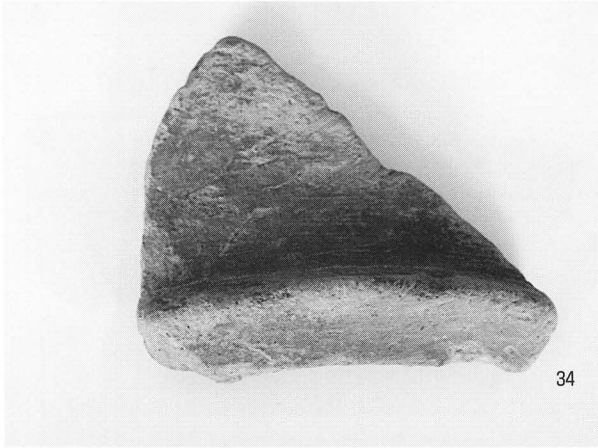
岩崎山 1号墳出土遺物 (平成20年出土資料)



岩崎山 4号墳出土遺物 (昭和4年出土資料、鎌田共済会博物館蔵)



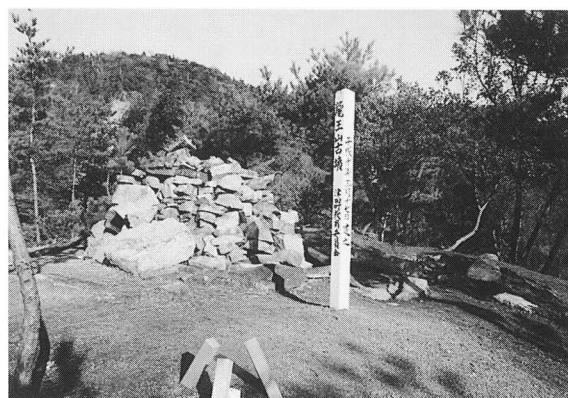
岩崎山4号墳出土遺物（昭和26年出土資料、さぬき市郷土館）



岩崎山 4 号墳出土遺物 (昭和26年出土資料、さぬき市郷土館)



1. 竪穴式石室（北から）



2. 墳頂部（南から）



3. 竪穴式石室（南から）



4. 墳丘（西から）



1. 墳丘（東から）



2. 葺石（墳丘南西部）

報 告 書 抄 録

ふりがな	いわさきやまこふんぐん ・ りゅうおうざんこふん
書名	岩崎山古墳群 ・ 龍王山古墳
副書名	平成20年度国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	さぬき市埋蔵文化財調査報告書 第7集
編著者名	松田朝由
編集機関	大川広域行政組合埋蔵文化財係
発行機関	さぬき市教育委員会
所在地	〒769-2401 香川県さぬき市津田町津田138-15 TEL0879-42-3107
発行年月日	西暦 2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査原因
いわさきやまこふんぐん 岩崎山古墳群	かがわけん 香川県さぬき市津田 まちつだ 町津田2250-7他	372064	34° 17' 46"	134° 14' 30"	2008/7/7 ~9/2	市内遺跡確認調査
りゅうおうざんこふん 龍王山古墳	かがわけん 香川県さぬき市津田 まちつだ 町津田2695-2	372064	34° 18' 01"	134° 14' 14"	2009/2/9 ~3/5	市内遺跡確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩崎山1号墳	古墳	古墳・前期	箱式石棺 2	円筒埴輪、朝顔形埴輪、 黒色土器	径18~19mの円墳
岩崎山2号墳	古墳	古墳	円墳	中世土器	径13mの円墳
岩崎山6号墳	古墳	古墳・前期	円墳 埋葬施設 2	なし	径7~7.5mの円墳
龍王山古墳	古墳	古墳・前期	竪穴式石室、 葺石、	円筒埴輪	径23~27.8mの円墳、円筒 埴輪採集

平成20年度国庫補助事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

岩崎山古墳群

龍王山古墳

2009年3月 発行

編集 大川広域行政組合

発行 さぬき市教育委員会

〒769-2401 香川県さぬき市津田町津田138-15

電話 (0879) 42-3107

印刷 株式会社 美巧社